
鋼魂 新訳 嘆きの丘の聖なる星

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼魂 新訳 嘆きの丘の聖なる星

【Nコード】

N2145V

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

次元を越えて出逢い、再会を約束して別れた銀時達と、エルリック兄弟。

その再会は、決して出逢う筈の無いもので、新たな戦いの幕開けでもあった。

映画リメイクの為、ネタバレあり。

第1話 繋がりが合う想い（前書き）

エド

「遂にスタート!!」

アル

「あらすじとかにもありましたけど、この小説は映画のリメイクです」

銀時

「アレンジもあるけど、ネタバレもあるからな。映画観る予定の奴は、注意しろよ!」

第1話 繋がり合う想い

『またな!!』

異世界に帰って行った少年が、最後に言った言葉が甦る。

「あれから、3ヶ月……」

神楽はため息をついた。

必ず会いに行く、と言ったが、3ヶ月も経ってしまった。

「どうしたの？神楽ちゃん」

「新八……」

近くに新八が来る。

ため息をつく神楽が気になったのだろう。

「何かあった？」

「別に、何でもないネ」

「……エドワードさん達のこと、考えてたの？」

すぐに見抜かれてしまい、ゆっくりと頷いた。

「及川さんの力が強くなれば、会いに行けるんだし、もう少し待とうよ」

「うん……でも」

「でも？」

「新八は、早くエドやアルフォンスに会いたって思わないアルか！？」

「……思っよ」

少し間を置き、窓の外を見た。

「ずっと待ってて、それから会えたら、会った時の嬉しさがもっと大きくなると思っよ。だから、僕はずっと待ってるよ」

「……本当に、待たせてごめんね」

突然の声に、思わず振り返った。
入口の所に刹那が立っている。

「及川さん！何時の間に！？」

「バナナく、まだエド達の世界に行けないアルか？」

やや不満をぶつけるように、神楽が言う。

「あと…何日かしたら、行けると思っの！」

少し考えてから、刹那は言った。

「本当アルか!？」

神楽は嬉しそうに言う。

それを見て、刹那は頷き、「本当だよ!」と続けた。

「楽しみにしてますよ」

新八も言うが、内心、とても喜んでいた。

「エド達の世界に、銀ちゃんやバナラは1週間いたんでしょ? どうだったネ?」

「どうって…。前にも言ったけど、この世界に戻る方法を探してたから、遊んだりはしなかつたんだよ」

とはいえ、アメストリスの街や自然など、様々なものは見れたが。

「でも、綺麗な所だったよ。エドワードさんとアルフォンスくんの故郷も、いい所だったし」

「行ってみたいネ!」

「うん。僕も見てみたい」

「お、刹那。来てたのか」

今まで寝ていた銀時は、刹那が来ていることに気づけなかった。

「銀ちゃん、エド達の所、あと何日かしたら、行けるみたいアル!」

「え？そうなの？」

「そしたら、また錬金術が使えるんじゃないんですか？」

錬金術の知識は、今もあるが、この世界で錬金術を使うことは出来ない。

だが、別の世界なら使うことが出来るらしい。

「錬金術ねエ。使えるんなら、こっちの世界でも使いてーよ。そうすりゃ、いろいろ便利なのによ」

「便利ねえ……」

刹那は呟いた。

この世界で、錬金術が使えるのは刹那だけだが、術の系統が違う為、銀時達のような錬金術は使えない。

「あ、でもこっちで錬金術が使えたら、ツラも高杉もヤバいことするかもな……」

銀時は、錬金術を使いまくる2人を連想した。

「雨降ったり、水でも被ったら、炎出せねエよな……。ツラだったら、策を固め過ぎて自滅するとか？」

窓の外を見ると、ちょうど桂が、土方と沖田に追われているのが見えた。

「小太郎さん追われてるね」

刹那は窓から身を乗り出し、様子を見た。
この光景も、見慣れてきている。

「そっぴゃ、前にエドと新八と一緒に、早く捕まれ、みてーなこと
言っぴゃな…」

「あ、言いましたよね！」

懐かしそうに、新八が言っぴゃた。

あちらの世界に行っぴゃて、エド達に再会したら、また、このようなや
り取りが出来るのだらうか。

銀時は、雲一つ無い空を見上げて思っぴゃた。

「随分伸びたなあ…」

庭の草を鎌で刈りながら、エドは呟いた。

「この前刈っぴゃたと思っぴゃたら、もう伸びてんのかよ」

「文句言わなななな！さっぴゃさとやる」

手を止めずに、ウィンリィが言っぴゃた。

「こっぴゃちに、新しい花壇作るから、土を綺麗にしておいて」

「へいへい」

シャベルで地面を掘り返し、石や根っこを取り除く。

「ところで、花壇作って、何植えるんだ？」

「この種よ」

ウィンリイは、白い布に包んだ種を見せた。

「花の種か？」

「うん！この種、刹那さんからもらったの」

「刹那さんから！？」

エドと、水を汲んでいたアルは驚いた。

「何時ももらったんだよ」

「あんだ達がうちに来た日の夜に」

「…！あの時か」

ホーエンハイムの資料を読んでいる時に、もらっていたのか。

「どんな花が咲くのかな？」

アルは、種を見つめて呟いた。

「確かね、『グラシデアの花』って言ってたかな」

「グラシデアの花？」

「聞いたこと無いな。多分、向こうの世界の花だと思っけど」

エドとアルも、どんな花なのかは知らない。

「でも、こんな時期に植えて、ちゃんと咲くの？」

「植えて何日かで、咲くように錬成してあるんだって」

「へえ、そうなのか」

ウィンリイは種を蒔き、そこにアルが水をやる。

「これでよし」

「片付けが終わったら、アップルパイ焼くね」

「おう、早くしてくれよ！」

先にウィンリイが家に入って行き、エドとアルは、鎌やシャベルを片付けてから、中に入った。

「綺麗に咲くといいね」

「そうだな。その花、向こうの世界でも咲いてんのかな……」

2階の部屋に入り、エドはベッドの近くに立てかけてある物を見て、言った。

「咲いてると思っよ」

アルも、立てかけてある木刀と刀を見つめた。

「……何時、来るかな」

「え？」

「銀さん達だよ。いつか、こっちに来るって言ってただろ？」

そう言えば、とアルは呟いた。

「こっちに帰ってきてから、もう3ヶ月経つんだね……」

戦いを除けば、あちらで過ごした約2ヶ月間は、短かったが、充実した日々だった。

「ねえ、銀時さん達が来たら、どこを案内しようか」

「やっぱり、セントラルとか、賑やかな所じゃねえか？」

「カウロイ湖は？時期が重なったら、花火大会もあるし」

「じゃあ、西の」

「アップルパイ焼けたよー！」

エドが言いかけた時、ウィンリイの声が聞こえた。

「兄さん、焼けたって」

「みたいだな。案内する場所は、銀さん達が来た時にするか」

「そうだね」

2人は階段を降り、リビングに向かった。

雲一つ無い空の下、次元も世界も異なる場所で、それぞれが再会を望んでいた。

だが、その再会は、思いもよらぬ形で実現し、新たな戦いの幕開けになるということを、この時、誰も気付いてはいなかった……。

第1話 繋がりが合う想い（後書き）

真理

「ここでも登場の、真理ちゃんです。この小説に主題歌があったら、OPPはLinkでEDはGOOD LUCK MY WAYってことで！どっちもラルク」

第2話 次元の果てから（前書き）

真理

「そうそう、前回言い忘れたけど、次元を征く者にも、作者は主題歌を考えてたんだよ」

エド

「ふーん。どんなの？」

真理

「71話が僕たちの季節、72話がLOST HEAVEN。映画のEDを意識したって」

第2話 次元の果てから

数日が経った、ある日の夕方に、刹那が万事屋にやって来た。スカイフォームのシェイミの姿で。

「おう、どうした？」

銀時が声を掛けると、刹那はテーブルの上に着地する。

「エドワードくん達の世界、いつでも行けるようになったよ！」

「本当ですか!？」

「なら、明日行くアル！」

「明日!?!早すぎない?」

「早くエド達に会いたいネ」

刹那は少し考え、神楽達を見て頷いた。

「……分かった。じゃあ、明日連れて行くね」

「キャッホーイ!!また、エド達に会えるネ！」

「向こうの世界か…。どんな所か、楽しみです」

嬉しそうな2人を見て、刹那も楽しくなった。

立っていたテーブルから降り、人間の姿になって、ソファに座る。

「明日か……。ツラや高杉には訊いたのか？あっちに行くかどうか」

「まだ訊いてないよ。あとで訊くけどね」

振り返った際に、右耳に何かが付いているのが見えた。

「何付けてんだ？イヤリング？」

「これ？」

刹那は、付けていたものを外して見せた。

雫の形をした透明なイヤリングで、中に、光とも炎ともとれる、蒼いものが輝いている。

「一つしか無いんですか？」

「うん……」

右耳にあったが、左耳にはなかった。

「高杉からもらったのか？」

子供の頃、誕生日に高杉からもらった赤い花の髪飾りは、以前と同じく、頭の左側に付けている。

このイヤリングも、そうなのかと思った。

「違うよ。これは……兄上がくれたの」

「兄上つて…！」

「あいつのことアルか!？」

新八と神楽は驚愕する。

刹那の…いや、イヴの兄は、銀時達の扉を強制的に開け、エド達をこの世界に連れて来た張本人。

その兄である紅夜…いや、アダムのからもらったとは、どういうことなのか？

「くれたつて、あいつが来たのか？」

銀時が訊くと、刹那は首を振った。

「来ては…いないと思う。昨日、気付いたらこれと、グラシデアの花があつたから……」

そう言うと、イヤリングを右耳に付けた。

「それとね、これを受け取った後に寝たんだけど、不思議な夢を見たの」

人間の姿になれるようになって、寝る時はランドフォルムのシエイミになって寝ている。

相変わらず籠の中で寝る刹那を、高杉は嫌な顔で見ているが。

「自分が人間だって自覚がねエのか？」

「あるよ。でも、いざ人間の姿になったら、こっちの方が結構便利

で楽だったから」

笑って高杉に言い、籠の中で丸くなると、すぐに眠った。

(…あれ？誰だろう…?)

真理の扉の空間にも似た、辺り一面、真っ白な空間。
その空間の中心に、誰かが立っていた。

(誰……?)

近くに行き、相手を見据えた。

(……！わ、私!?)

そこに立っていたのは、イヴだった。

「あれ？でも、ちょっと違う……？」

よく見ると、髪の色が濃い金髪になっており、イヴだった頃の自分より、一回り程、年が離れて見える。

「イヴ…いいえ、今は、刹那という名だったわね」

イヴによく似た女性は微笑みながら、刹那に話し掛けた。

「え…。あなたは……？」

口にしてから、もはや、との思いが浮かんだ。

「分からないのも、無理ないわね。私は、あなたとは一月しか、一緒にいられなかったから」

その言葉を聞き、鼓動が速くなる。もしや、との思いが、確信になっていく。

「私はあなたの」

「…うえ。母上…なの？私の…」

女性が言い切る前に、刹那は訊いた。

答える代わりに、女性は、にっこりと笑った。

「母上…っ!」

抱き付き、刹那は涙を流した。

母は静かに抱きしめた。

(これは夢。現実じゃない。でも……)

「逢えて…嬉しい……」

以前、アダムの話聞き、母に逢ってみたかったと、初めて思った。夢でもいい、逢ってみたい、と。

「ごめんなさい、刹那。私の身体が弱かったばかりに、あなたを護れず、つらく、苦しい想いをさせてしまって……」

「いいんです…。そのことは、もう……」

「……あら？」

母は、刹那の右耳に付いているイヤリングを見て、少し離れた。

「その耳飾りは……」

「あ、これは……」

「アダムが渡したの？」

涙を拭い、イヤリングに触れていると、母はすぐに訊き、刹那は頷いた。

「そう……。アダムは、渡してくれたの」

そう言っつて、母はイヤリングに触れた。

「これは、私が使っていた物で、死ぬ前にアダムにあげた物よ。中に、私の魂の一部を入れてね」

「魂の一部！？じゃあ、これは……！」

蒼く輝く、光とも炎ともとれるもの。

これは、母の魂だったのか……。

「魂だけでも、私はあなた達のそばにいたい。だから、耳飾りに魂の一部を移した……」

死ぬ間際まで、自分達に精一杯の愛情を注いでいた、と言っていたアダムの言葉が甦る。

「母上……」

「夢の中で出逢えるのは、一度きり。でも、逢うことが出来て、本当に良かった」

再び母は、刹那を抱きしめる。

「姿が変わっても、あなたは私の大切な娘。どうか、幸せになって……」

兄が言っていた通り、母は本当に自分達を大切にしていた、刹那の頬に涙が伝った。

「私は…罪を犯し、存在が消え、今いる世界では、一部のみにしか姿が見えません……」

でも、と続け、顔を上げた。

「それでも、今、私は幸せです！だから、心配しないで下さい……！……産んでくれて、ありがとう」

感謝の言葉を聞いて、母も涙を流した。

「……産まれてきてくれて、ありがとう。イヴ……」

「その後、目を覚ましたら泣いてて、晋助さんを起しそうになっちゃって」

イヤリングに触れ、少し下を向いた。

「じゃあ、そのイヤリングは、お母さんの形見でもあるんですね」

「バニラ。夢でも、マミーに逢えて良かったナ！」

「……うん」

顔を上げ、刹那は立ち上がった。

「そろそろ行くね。明日のお昼頃に、アメストリスに連れて行くから！」

笑って言い、刹那は玄関から出て行く。

それに、銀時もついて行った。

「刹那……」

「ん？何？」

「良かったな。ほんとに」

一言程だったが、銀時が何を言いたいのか、すぐに分かった。

「うん！」

微笑んで頷くと、刹那は万事屋を後にした。

第2話 次元の果てから（後書き）

刹那

「さーて、アメストリスに行く準備しないと」

エド

「早く来いよ！」

アル

「楽しみにしてるよ」

第3話 予期せぬ出来事（前書き）

真理

「リメイクは難しいって、作者がゴネてる」

エド

「散々リメイクやるって言ってたんだから、最後までやれ、って感じだな」

第3話 予期せぬ出来事

「じゃあ、セントラルまで行って来るからな」

「いってきまーす!」

2階にいるウィンリイに言うと、エドとアルは駅に向かった。

「今日も挨拶まわりかい？」

外に出ていたピナコが訊いた。

「ううん。今日は、セントラルで調べものだって」

「調べもの？」

「うん。東と西の地域を調べるって言った」

ウィンリイは、ベランダから身を乗り出し、数日前に作った花壇を見る。

「花、明日には咲きそうね」

植えて何日かで咲くと言っていた通り、花は、もう蕾になっている。

「…刹那さんが来たら、また、ちゃんとお礼言わないとな」

「兄さん、西と東、どっちを調べる？」

セントラル行きの列車の中で、アルが前に座るエドに訊いた。

「そうだな…。オレは、砂漠越えはきついからさ、西の方にする」

挨拶まわりが終わった後のことを、2人は話していた。

どこに行くかを決め、決めた場所を調べる為に、セントラルの図書館に行く途中だ。

「じゃあボクは、シンとか東の方にするよ」

「東って言ったらさ、そっちの方にある島国には、向こうの世界と似てる所があるんだって」

「あ、前に調べてた本に出てたよね！…流石に、宇宙人とかは、いないと思うけど」

そんな話をしているうちに、列車はセントラルに到着した。

「よし！図書館行こうぜ」

「うん！」

「あいつら、先に行ってるって言ってたな…」

銀時は呟きながら、階段を下りる。

刹那の力で、アメストリスに行けることになり、新八と神楽は、買い物をしてくると言って、先に出て行った。

「あ、旦那」

階段を下りてすぐ、沖田に会った。

「お出かけですかイ？」

沖田には、刹那の姿は見えない。

行き先を言い、自分も行きたいと言っても、連れて行くことは出来ないだろう。

「あー…散歩」

「そーですか」

「おい、総悟。何、堂々とさぼってんだ？」

煙草を加えた土方が、歩いて来て言った。

「何言ってるんですかイ土方さん。俺は、旦那と喋ってただけでさア」

「それをさぼってるって言うんだよ!!」

怒鳴った後、土方は銀時の右腕を見る。

「どう見ても本物だな、その腕。宇宙の技術はすげエな」

右腕のことは、宇宙の技術で再生させた、と説明していた。

錬金術を使えたことや、真理の扉については、信じてもらえないと思、話さなかった。

「俺だったら、ずっと義手のままにしてやす。それで改造を加えて、いつでも土方さんの命を狙えるように」

「総悟てめエエエツ！！今すぐ、叩っ斬ってやる！！」

沖田はすぐに逃げて行き、土方は刀を抜いて追い掛けて行った。その様子を見送った後、銀時は待ち合わせ場所に向かった。

「場所は、港の近くつつつてたな」

待ち合わせ場所を書いたメモを見ながら、辺りを見る。

「ん？」

前方から、誰かが歩いて来る。相手が誰なのか、すぐに分かった。

「……高杉」

以前なら、即、斬り掛かっていたが、お互いに宣言を撤回した為、斬り合うことはしない。

「よオ、おまえも行くのか？あつちの世界に」

「ああ。おまえは行かねーのか？」

「行かねエよ。あつちの世界にゃ、用も何もねエ」

「そーかよ」

目を閉じて呟くと、高杉の横を通り、歩いて行った。

「……」

銀時が歩いて行くのを、黙って見つめた後、高杉は反対方向に歩き出す。

「あ、銀ちゃんやつと来たネ」

待ち合わせ場所には、既に神楽と新八が来ており、近くには刹那と桂がいた。

「何だよ。ツラも行くのか？」

「ツラじゃない桂だ。：俺も、あちらの世界に興味があつたのでな」

それに、と続ける。

「アルフォンスくんが言っていたが、アメストリスという国には、猫が一杯いるらしい」

「てめっ、猫目当てで行くのか!？」

「当たり前だ。猫と錬金術の世界、早く行きたいものだな!」

「全然違エよ!!何だ?猫と錬金術の世界って!!」

桂を殴りながら、銀時はツッコんだ。

「じゃ、じゃあ、そろそろ始めるね」

その様子を苦笑いで見つめ、刹那は次元を越える準備を始める。

(行く場所は、エドワードくん達がいる所……)

目を閉じ、行き先を思い浮かべ、銀時達に両手を翳す。
同時に、緑色の光が輝き始めた。
その時だった。

バチッ!!

「え!?!」

激しい音に、刹那は目を開ける。
見ると、辺りには紫色の光が迸っている。

「刹那、何か変だぞ!」

様子を見て銀時が言うが、刹那も驚いている。

「どうなってるの……!?!」

「何が起きているんだ!?!」

「次元と時空が……乱れてる!?!」

桂の問いに、刹那は呆然と呟く。

「早く、ここから離れて!!」

「おい、今の光は何だ!？」

高杉が、こちらに走って来るのが見えた。

「高杉!？」

「こつちに来ないで!!」

叫んだ瞬間に、光は更に強くなり、全てのものを飲み込んだ。

アメストリスのセントラルでは、エドとアルは図書館で調べものの真っ最中。

図書館の一室で、エドは居眠りをしている。

「兄さん!!」

ドアの開く音と、アルの声で、エドは目を覚ました。

「ん…アル? 昼飯買ってきてくれたか？」

寝ぼけまなこでアルを見る。

すると、甲冑の鎧が立っている。

「懐かしいな、その鎧。錬成したの…? か？」

指を差した時、腕がいつも以上に重いことに気付く。
試しに、コートの袖をめくってみる。

「まさか…そんな筈…」

自分の見た物が、信じられなかった。

「何で……また機械鎧に!？」

取り戻した筈の右腕が、また機械鎧になっている。

「兄さん!ボク、また鎧になってる!!」

そう言いながら、アルは頭部を外す。

当然、中は空だ。

「……ということは」

両手を合わせ、床に手をつける。

錬成反応の光が輝いた。

「錬金術が……使える」

「どうして!?!兄さんの扉は、もう無い筈なのに!それに……」

エドは、自分の頭を右手で殴った。

「いって……。夢じゃなさそうだ」

「兄さん…、何が起きてるのかな」

「分かんねえ。けど、ここは図書館だよな。さっきまで、オレ達が

いた」

「うん。調べものをしてて、それから…」

2人は、自分達の行動を思い返す。

しかし、先程の錬成反応で気付かなかつた。

図書館の外からも、不思議な光が輝いていたことに。

第3話 予期せぬ出来事（後書き）

エド

「うおーっ！？錬金術使えるし！！」

アル

「ボクは、また鎧になってる！！」

銀時

「俺達は、どこに消えたんだ」

第4話 追跡と再会（前書き）

真理

「やっと、映画の内容に入ったよ」

エド

「この後は、どうなるんだ？」

真理

「ちあ？」

第4話 追跡と再会

「うっ……」

地面に倒れていた銀時は、目を覚ます。

「どこだ……ここ」

起き上がり、辺りを見回す。

どこかの路地裏のようだが、見覚えの無い建物ばかりだ。

「あれ……?」

自分の服装を見て、声を上げる。

いつもの着流しではなく、白い羽織りを着て、刀を差している。

「……何で?」

この服装は、攘夷戦争時の『白夜叉』の時の服装だ。

「どうなってんだよ……。つか、ここはどこだ!？」

辺りには、新八や神楽達の姿は無い。

建物をよく見ると、似たものを以前見た覚えがあった。

「まさか……な」

呟き、両手を胸の前で合わせると、地面に手を当てた。

すると、強い光が輝き、足元に小さな円柱が出来た。

「…錬金術が使える」

(ならば、ここは別の世界ってことか)

銀時は、暗くなった夜の空を見上げた。

「どうなってんだ、これ!？」

近くに置いてあった新聞を見て、エドは驚く。

「日付が、2年前だ……」

新聞の日付を、アルが指差す。

「確かこの日は、収穫祭があった日だ」

「ボク達…、過去に来ちゃったってこと？」

「それは無い。もしそうなら、何でオレ達は、こんな格好になっただんだ？」

エドの言うことは、尤もだ。

本当に過去に来たのなら、このような姿でいる筈が無い。

「あれ?」の記事……」

新聞に載っている写真に、エドは目を留める。

そこには、連行される、1人の少女がいた。

「なあアル。こいつって」

「兄さん、これ！」

エドの声を遮り、アルは部屋の隅にあった物を見せた。

「！おい、何でそれが、ここにあるんだ！？」

それは、かぶき町で鉄子から貰った、氷輪丸…ではなく、十字鐔の刀だった。

「セントラルに、刀は持ってこなかったのに…」

「そう言えば兄さん」

アルが声を掛けた、その時だった。

ガシャアアン！！

大きな音と共に、窓ガラスが粉々に砕け散った。

「な、何！？」

エドは素早く、割れた窓から外を見る。

すると、少し離れた所にある刑務所から、炎が上がっていた。

「祭りにしちゃあ、随分派手だな。行くぞ、アル！！」

「うん！」

エドは刀を腰に差し、アルと一緒に外に飛び出した。

刑務所の周囲では、消火活動が行われ、囚人達は外に出されている。

「化け物…。あいつは、化け物だ……！」

囚人達はうずくまり、何人かが口々に言っている。

「おい、何があった!?!」

エドは、近くにいた憲兵に訊いた。

「囚人が脱獄し、逃走した！」

「囚人が脱獄!?!」

「よし、追っぞー！」

話を聞いてすぐ、エドは路地に走り出す。

「エド!?!」

「エドワードさん!」

走り出そうとした時、突然、聞き覚えのある声が聞こえた。

（まさか…）

振り返ると、この世界にいる善の無い者達が、そこにいた。

「新八、神楽!?!」

「どっしてここに!?!」

エドとアルは、驚きの声を上げる。

「やっぱりエドネ」

「僕達、気が付いたら、ここにいたんです。そしたら」

「いきなり爆発が起きたアル」

爆発、という単語を聞き、エドは訊いた。

「なあ、その際に、誰かを見なかったか？」

「そう言えば……、誰かが走って行くのを見ました」

「本当か!?!よし!」

再びエドは走り出す。

途中で立ち止まり、アルを見た。

「アル!そいつらを頼む!」

「え!?!ちよつと兄さん、1人じゃ」

アルは、エドを止めようとするが、エドの姿は、路地裏に消えてしまふ。

「おまえ、アルフォンスだったアルか!？」

「何で、こんなに大きくなってるの!？」

鎧の姿のアルを初めて見た2人は、それぞれ驚きの声を上げる。

「あ、実はね……」

残されたアルは、とりあえず説明をすることにした。

「さっきの爆発はなんだ?この世界も、普通にテロとかがあんのか?」

銀時は、煙の上がる建物を見る。

と、辺りを窺いながら走る男がいる。

「なんだ?あいつ……」

服装から見て、一般人とは思えなかった。

「おい」

呼び止めると、男は振り返って、銀時を見た。

「そんなに急いで、どこ行くんのだ?」

訊かれたことに答えず、男は黙って左手を突き出す。そこには、血で描かれた図形があった。

「そりゃあ、錬成…どわぁッ!!」

錬成陣と言おうとした時、男は左手から、紫色の雷を放った。

銀時は咄嗟に避けたが、その隙に男は逃げた。

「ちっ、待ちやがれ！」

(ただの錬金術師には見えねエな…)

そう思いながら男を追い、銀時は路地を進んだ。

「仮装パーティーかい？囚人服で」

銀時を振り切った男は、エドと対峙していた。

「全く。次から次へと」

ぼやきながら、男は右手をエドに向ける。

右手にも、左手と違う錬成陣が描かれている。

「うわっ！」

氷柱状の氷を出し、エドに放つ。

壁を錬成し、氷柱を防ぐが、威力が強かった為、壁は碎け散る。

「てめえ、錬金術師か！」

エドは建物の壁から、棒を幾つも錬成して、男の動きを止めようとするが、素早い動きでかわされる。

「錬成陣を使わないか…」

雷を放ち、棒を全て砕いた。

砕いた衝撃で、煙が立ち込める。

「見つけたぜ！」

錬成反応の光が目印になり、銀時は男に追い付くことが出来、ニヤリと笑った。

「おまえ達と遊んでいる暇は無い」

男は銀時に向かって氷柱を、エドには雷を放つと、足元に氷の塊を錬成して逃げ出した。

「待て!!!」

銀時は、男を追い掛けようとして、目の前に誰かがうずくまっているのに気付く。

（誰かいんのか？）

煙が晴れ、近くに行くと、相手は顔を上げて、こちらを見る。お互いの顔を見て、2人は驚いた。

「銀…さん…?」

「エド……だよな……?」

(髪長くて、目え死んでねえけど、銀さんだ)

「……!おまえ、右腕と左足」

雷を受けたせいか、右腕と左足の機械鎧が露わになっている。

「あのさ、銀さんのその格好って……。戦争の時の?」

「……ああ」

「じゃあ、それが白夜又つてわけか」

「そう言うとおまえこそ、はが」

「兄さん!大丈夫!?!」

銀時が言い掛けた時、後ろから、アルと新八と神楽が走って来る。

「え?銀時さん!?!」

「ほんとだ、銀さんだ!」

「でも、さっきと何か違うネ!」

アル達は、少し驚きながら、2人と合流する。

「銀ちゃん髪長いし、エドは右腕が義手になってるネ」

「それに、ちょっと縮んでますね。2人共」

悪気があって言ったわけではないが、新八の発言に、エドは青筋を立てた。

「だがあれが、ギネス級ドチビだーっ!!」

「兄さん、そこまで言っていない!」

羽交い締めにして、アルはエドを抑える。

「兄さんって…このデカブツ、アルか!??」

銀時は、アルを指差して驚く。

「デカブツって…。ボクは、正真正銘アルフォンスです……」

「アルフォンスの中は、空っぽだったネ」

「は?空?」

試しに、鎧の頭を外して見る。

神楽の言った通り、鎧の中は空っぽで、風が吹き抜ける音がする。

「……ほんとに空だ」

「そこまでだ!」

「大人しくしろ!」

脱獄した男を追って、銃を持った憲兵達が現れる。

「大人しくしろお？おい、オレを誰だと思ってんだ？」

アルから離れ、エドはコートから、銀色の懐中時計を取り出す。

「その時計は…！」

「国家錬金術師殿でしたか！」

憲兵達は、慌ててエドに敬礼した。

「あ、鋼の機械鎧の手足…」

「まさか、あなたは」

容姿を見て、何人かが気付いた。

「ああ、そつだ」

エドは右手の親指で、自身を指して言った。

「オレが、鋼の錬金術師だ！」

第4話 追跡と再会（後書き）

アル

「映画のプロローグみたいな所だったね」

銀時

「次からは、オリジナルのシーン入れるってよ」

第5話 夜の街（前書き）

エド

「昨日は、高杉さんの誕生日だ！」

刹那

「ちょっと遅れちゃったけど、おめでとう！」

高杉

「お、おじ…」

銀時

「今回は、そんなに活躍しなーけど、まあまあ出番はあるぞ」

第5話 夜の街

エドと銀時が再会する、少し前。
刑務所が炎上を始めた頃……。

「何だ？何が起こった!？」

桂は起き上がり、辺りを見る。
すると、近くに誰かが倒れているのを見つける。

「おい!……ん？」

倒れている者に呼び掛けた時、その相手に見覚えがあるのに気付いた。

それと同時に、自分の服装の変化にも驚く。

「な、何故……この格好に!？」

桂の服装は、銀時と同じく、攘夷戦争時の物だった。

「……ツラ、そこにいんのか……?」

声に気付いたのか、相手は起き上がった。

「高杉……!やっぱり、おまえか」

起き上がった高杉も、攘夷戦争時の服装だった。
当然、左目に包帯はしていない。

「アメストリスか？ここア…」

「何？本当にここは、エドワードくん達の世界なのか！？」

「さあな。この辺は見たこと無エからな」

周りを見た時、自分達以外に、誰かが倒れているのが見えた。

「あれ…、刹那か？」

暗がりの中で、黒く長い髪に、丈の短めな黒い着物を着た人物が倒れていた。

「……………ん？ここは？」

相手は、やはり刹那だった。

だが、現在よりも幼く、幼少の頃よりも成長した、見たことの無い年齢の姿だ。

「何だろ、この格好…」

刹那の服装も、普段と違っている。

丈の短い黒い着物は、袖口と裾、襟元が赤く、足には、黒いブーツを履いている。

「あ、小太郎さん、晋助さん」

2人に気付き、近くに行く。

「おい、何が起こった?」

「ここはアメストリスでいいのか?」

「いつぺんに訊かないでよ...」

訊かれたことは勿論、今の状況も、どう説明していいか分からなかった。

「ここは、アメストリスであつてと思う。でも...」

「でも、なんだ?」

桂の問いに、刹那はためらい気味に口を開いた時だった。

ウオオオオン

犬か何かの鳴き声が聞こえた。

「犬...?」

鳴き声が聞こえてすぐ、近くの茂みから何かが飛び出して来る。

「.....え?」

「な、何だ。あれは...?」

飛び出して来たのは、狼をそのまま人型にしたような生物。狼らしきものは、一目散に街へと駆けて行った。

「何…？今の」

「街の方に行ったな」

刹那は波導で、街の方を見てみた。
すると、見覚えのある波導を見つけた。

「あそこに、エドワードくんがいる。近くに、銀時さんもいるよ！」

「本当か！？」

「銀時もいるのか…」

桂と高杉は、それぞれ呟いた。

「行ってみようよ。エドワードくん達が、どうしてるのかも気になるし」

いつまでも、この場にいるわけにはいかない為、とりあえず街に行くことにした。

「あー、なんつーか…。エド、アル…久しぶり？」

詳しい事情説明は、明日行うことになり、5人は軍のホテルに泊まり、一室に集まった。

「何で疑問形なんだよ」

そう言いたくなる理由も分かるが、エドは敢えてツッコんだ。

「だってよ。3ヶ月振りに会ったのに、おまえら代わり過ぎだろ！」

「3ヶ月？」

「向こうの世界も、3ヶ月しか経ってなかったんだね」

エドとアルは、顔を見合わせる。

「で、何でアルは、そんなゴツイ鎧になってんだ？」

銀時はアルを指差す。

同じように、新八と神楽も頷いた。

「前に言っただろ？アルは、全身を持って行かれたって。だから、鎧に魂を定着させてるんだ」

説明をするエドに合わせ、アルは頭部を外し、少し前屈みになる。

「何か描いてありますね」

「何アルか？これ……」

「……血か？」

錬成陣にも似た図形は、赤錆色をしていた。

「そう。オレの血」

「この血印^{けついん}が、ボクの魂と鎧との仲立ちになってるんだ」

「その印が消えたら……どうなるんだ？」

血印を睨むように見ていた銀時は、ぼそりと訊いた。

「…魂が鎧から離れて、消えちゃうんだ」

アルは答え、頭部を戻した。

「そんな……！」

「やっと戻れたつてのに、何でまた、こんなことになってんだか」

納得がいかない！！

というように、エドは頬杖をする。

コンコン

ドアをノックする音が聞こえ、ホテルの客室係が声を掛けた。

「エルリック様。桂小太郎様が、フロントにお越しです」

「ヅラさんが!?!」

「ヅラもこっちに来てたのか」

桂の名を聞き、5人は揃って、フロントに向かった。

「ヅラ!」

「あ、刹那さんと……高杉さん？」

フロントで合流してすぐ、お互いの姿に驚く。

「おまえら、なんだその格好!？」

「そう言うおまえこそなんだ!？また戦争に行く気か!？」

銀時が言うと、桂も負けじと言い返す。

「桂さん達も来てたんだ……」

「バニラも、いつもと違うネ」

「鋼の、俺のことが分かんなかっただろ」

「だって、包帯してねえし」

やや不機嫌そうに言う高杉に、エドは平然と言った。

「ねえ、エドワードくん。アルフォンスくんは一緒じゃないの？」

睨み合いになりそうだった為、刹那が話題を変え、話に割って入る。

「ん？アルなら……」

「ここにいます」

アルは手を上げて返事をした。

当然だが、他の3人は、銀時達と同じリアクションをする。

「アルフォンスくん…なのか!？」

「随分、高エな……」

「うそ……。だって、アルフォンスくんの波導は感じられなかった」

「あのさ、とりあえず部屋に行かないか？」

騒ぎになり始め、エドは場所を変えるように言った。

「……………!」

部屋に行ってから、アルは頭部を外し、エドは先程と同じ説明をした。

「空だ……」

「錬金術は、そんなことも出来るのね」

「ほんと。何でまた、こんなことになってんだか」

「あ、もしかして…この状況のこと？」

ぼやくエドに、刹那が訊いた。

「何か知ってるのか!？」

「教えてくれ!!」

銀時とエドは、思わず詰め寄った。

刹那は驚きつつも、2人を下からせる。

「落ち着いて。まずね、私達がエドワードくん達の世界に行こうとした時、次元と時空が激しく乱れたの」

「また、そのテのことが……」

似たようなことが、以前にもあった。

その時と同じだと思ったが、刹那の表情は厳しかった。

「あの時とは、比べものにならない……!」

「どういう意味だ?」

高杉が訊くと、刹那は髪を掻き分け、右耳を見せる。

そこには、母の形見である、雫の形のイヤリングがあった。

「それ、マミーの形見の……」

「これを受け取れるのは、多分あの次元だけ。この姿は、煉獄姫れんごくひめの物だと思う。つまり……」

「つまり……?」

「別の次元が、複数混じってる世界に来た……ってところかな」

刹那が言った『煉獄姫』というのは、別の次元での彼女の異名だ。

その証拠に、刹那は腰に刀を差し、小刀も持っていた。

「じゃあ、オレが錬金術を使えるようになって、アルがまた鎧になったのも、この世界に来たせいってことか!？」

俄には信じられない話だが、現実起きたことを目の当たりにした為、信じるしかない。

「そうなるね」

「ありえない。なんて事は、ありえない……」

アルはポツリと呟く。

人造人間・グリードの言葉を。

「元の世界には、帰れるんだよな？」

「…まだ、分からない」

「え!？」

「複数の次元が混ざった世界なら、すぐには戻れないと思う……」

「そんな……」

「帰れるさ」

視線がエドに向かう。

その表情は、頼もしい笑顔だった。

「方法が、何も無いって決まったわけじゃない。明日になったら、いろいろ探してみようぜ」

「……そうだな」

エドを見て、以前と同じだ、とその場にいる者達は思った。

第5話 夜の街（後書き）

銀時

「よし！早速メシだ！」

エド

「え！？」

刹那

「晋助さんの誕生日も兼ねて、一杯ご馳走を頼もう！」

エド

「ちょっと…！」

アル

「兄さんのお金だから、じゃんじゃん頼んじゃえ」

エド

「やめてえええっ…！」

第6話 西の地へ（前書き）

アメストリスに来た銀時達の設定は、当初、こんな感じでした。

銀時

「何で、またこの格好に……。しかも義手!？」

高杉

「あ、歩けねエ……」

桂

「何も見えん。どうなっている……!？」

刹那

「あれ？イヴになってる……」

あまりにも動かしづらかったのでボツに。

第6話 西の地へ

「錬金術師だと！？雑居房にか？」

早朝の中央司令部の廊下で、ロイとリザが昨夜のことを話しながら歩いていた。

「目撃者によると、指の皮膚を噛みちぎって、その血で錬成陣を描いたそうです」

「錬金術師なら、いつでも逃げられた筈。別荘気分で、刑務所暮らしか」

ロイは立ち止まり、訊いた。

「脱獄後の目撃者は？」

「2人います。目撃、および交戦した者達が」

「名前は？」

「エドワード・エルリックと坂田銀時の2人です」

「……坂田銀時？」

後者の名を聞き、ロイは怪訝そうに聞き返した。

司令部の一室に行き、ドアを開ける。
そこには、見知った顔が幾つもあった。

「よお、大佐」

エドは軽く右手を上げると、アルは頭を下げた。

「久しぶり〜、焰の大佐」

「マスタングさん、お久しぶりです」

「一緒にいるのって、大佐の女アルか？」

「……ホークアイ中尉。ちょっと外で待っていたまえ」

ロイは1人、部屋に入ると、部屋にいる者達を見る。

「何で君達がここにいる？しかも、アルフォンスは、何故また鎧になっっている!？」

目の前の状況が分からず、ロイは混乱しながら訊いた。

「あ…ロイさん。実は……」

刹那はとりあえず、ロイにもエド達に話したことを言った。

「別の次元が複数混じった世界……か」

「信じられないと思いますけど……」

「いや、信じよう。昨夜から、何かがおかしいと、ずっと思っていたからな」

「大佐も思ったのか……」

ロイは頷き、窓の外を一瞥した。

「刑務所から、囚人が錬金術を使って脱獄。私には、覚えがあった。だが、他の者達は初めてだと言っていた」

「初めて……!？」

「ああ。まるで、私だけ過去に来たかのようにだった」

「過去……。なら、この世界は、過去の世界でもあるわけね」

話を聞いて、刹那は呟いた。

「それより、鋼の。君は今、国家錬金術師だろうか？なら、この後の現場検証に同行しろ」

「……やっぱ、そうなるか」

錬金術関連の事件があれば、国家錬金術師も現場検証をする。エドは、ため息混じりに言った。

「行くぞ」

「ああ」

エドは振り返り、アルに声を掛けた。

「アル。銀さん達と、司令部で待っていてくれるか？」

「うん、いいよ」

「えーっ！こんな所で待たされるアルか？」

「兄さんが戻って来たら、街を案内してあげるから」

だだをこねるように言う神楽を、アルが宥める。

その様子を見た後、ロイとエドは部屋を出た。

「司令部には、君と坂田だけが来れば良かったんだが、何故、他の者達も一緒に来た？」

「いやさ、オレも銀さんだけでいいって言ったんだけど、神楽が一緒に行って言って、後は……成り行きで」

「全員で、司令部に来たというわけか」

呆れながら、ロイは言った。

「この話は、ここまでだ」

話題をすぐに切り替え、エドに向き直る。

「まずは、収容者の話を聞きに行くぞ」

「車は、用意出来ています」

ロイが言つと、控えていたリザが答えた。

「脱獄したのは、メルビン・ボイジャー。26歳。4年半前に、強盗傷害罪で、懲役5年の判決を受け服役していた」

車中で、ロイは運転をしながら説明をした。

「2ヶ月後に、仮釈放の予定だったわ」

リザが続けて言い、エドは静かに言った。

「あと少しで自由の身だったのに、随分短気な野郎だな」

エドは不機嫌そうに、窓の外を眺る。

(やっぱりオレも、初めてだと思えないな……)

3人は先に、負傷した囚人達が収容されている病院に行き、話を訊いて回る。

「何で、あんなバケモンを閉じ込めておかなかったんだ!!」

大怪我をした囚人が、怒鳴るように叫んだ。

「メルビン・ボイジャーが錬金術を使えるということは、誰も知らなかった。…奴は、錬成陣を描く前、何をしていた?」

「俺達は、メシ食った後、ラジオを聴いてた。あいつは確か、いつ

もみたいに新聞読んでたな」

「そしたら、急に自分の指かじりだしてよー！」

ロイの問いに、囚人達はそれぞれ答える。

メルビンの手のひらに描かれた錬成陣を、エドは連想した。

(あの錬成陣……)

話を聞いた後、現場である刑務所に向かった。

壁や床は焼け焦げ、一部の壁は崩れ落ちている。

「酷い有り様だな……」

ロイとリザは現場を見回している。

エドは、マットの下敷きになった新聞を見つけ、手に取った。

「大佐、中尉！見てみるよ、これ！」

手にした新聞を、広げて見せた。

一部分が、切り取られている。

「あの爆発で破けたにしては、形がしっかりしてる」

司令部に戻り、リザは同じ新聞を持ってくる。

「昨日のセントラルタイムス、夕刊の三面記事です」

「メルビン・ボイジャーは、この新聞の記事を見て、脱獄したらし

い

机の上に、切られていない新聞を広げた。
切られた場所には、連行されている少女が映っている。

「連行されてんのか？」

「この少女は一体？」

高杉と桂は、新聞を覗き込む。

「クレタより、テーブルシティに不法入国した…ジュリア・クライ
トン？」

記事を読み、エドは写真をじっと見る。

「兄さん、この女の子…。どっかで……」

「ああ……」

「おまえら、こいつのこと知ってんのか？」

銀時は、写真を指差して訊いた。

「知ってるってどうか……」

「よく思い出せねえ。初めて見た気はしないんだけど……」

「マスタング殿。クレタというのは、国の名前か？」

不法入国と聞き、桂が尋ねた。

「アメリリスの西にある国、それがクレタ。テーブルシティというのは、アメリリスの最西端にある、国境沿いの街よ」

リザは、2種類のアメリリスの地図を出して見せた。

「この国って、円形なんですね」

国全体の地図を見て、新八が言った。

隣で、テーブルシティの地図を見ていた銀時も続けた。

「何だこりゃ？まるで風船だな」

テーブルシティは、円形の形をしており、アメリリスから続く線路と、クレタの領内に浮かぶような外観は、風船のようだった。

「主要道路は封鎖されているが、メルビン・ボイジャーがテーブルシティに向かった可能性がある」

「テーブルシティか…。それに、あの錬成陣」

ロイの話を読み、エドは呟いた。

「あの錬成陣が気になるのか？」

「うん。あんな錬成陣、そんじょそこらじゃ見ないからな」

銀時に言うと、エドは何かを考える。

「おい、何黙ってたんだ?」

「……行ってみようと思ってさ。テーブルシティに」

「え?行つてどうするの?」

「確かめる必要があると思つたんだよ!」

エドは、ニツと笑つて言った。

『間もなく、テーブルシティ行き、特別急行が発車します』

アナウンスを聞き、エド達は走る。

「ほら、みんな急げ!」

「兄さん、切符は!」

「そんな後だ!」

ホームをひたすら走り、列車に飛び乗る。

自分達だけ行くわけにもいかず、銀時達も一緒に行くことになった。

「この世界の乗り物、初めて乗るネ!」

「テーブルシティがどんな所か、楽しみだね」

神楽と新八は、観光気分で話す。

ボックス席に、エドとアルは神楽と新八と座り、通路を挟んだ反対

側に、銀時ら幼なじみが座っている。

「えーっと、切符代を8人分用意して……」

「西の方に行くのは、初めてになるかな」

財布を見るエドに、アルが声を掛ける。

「うーん。どうだろうな。初めてにも思えるし、また行くなって感じもするしなあ……。でも」

「でも？」

「何があるかは、行ってからの楽しみだ！」

来る途中で買ってきたサンドイッチをかじり、やや楽しそうに言った。

第6話 西の地へ（後書き）

エド

「また、大量の出費が……」

アル

「こんな大人数じゃ、仕方ないよ」

第7話 車上の遭遇（前書き）

列車内

神楽

「車内販売とかあるアルか？」

エド

「あると思っけど」

銀時

「テーブルシティって、いつ頃着くんだけ？」

アル

「明日の昼位かな」

刹那

「そんなに掛かるの!？」

第7話 車上の遭遇

エドや銀時達がテーブルシティに向かった後、ロイはブレダとファルマンに、メルビンの出身地に向かうよう命じた。

「誰だい？こいつ」

ブレダから、メルビンの写真を見せられた、農家風の男は聞き返した。

「俺の知ってるメルビンは、こんな奴じゃないよ」

男から話を訊いた2人は、すぐにロイに連絡をする。

「…ええ。話を訊いたところ、メルビン・ボイジャーは9年前、出稼ぎに行くと言って、セントラルに行っただきりだそうです」

『そうか。家族や身寄りには？』

「いません。成り代わるには、もってこいの人物です」

『なるほど。引き続き、そっちの調査を頼むぞ』

「はっ」

列車に乗って、半日以上が経ち、エドや銀時、新八は寝ていたが、神楽と刹那は、窓から見える景色を見ていた。

「わあ…！アルフォンス、あれ見て！」

眠ることが出来ないアルは、珍しい物を見ては、はしゃぐ神楽に終始付き合っていた。

「よく寝ているな」

桂は、隣で寝ている銀時を見る。

「戦場で寝てりゃ、あつという間に斬られてるけどな」

銀時の前に座っている高杉が、呆れるように言った。

「私達の格好って、戦争の時の服装なんだよね」

景色を見ていた刹那は、2人の方を向く。

その際に、頭の左側に付けている花の髪飾りが、日光を受けて、一層赤く輝いた。

「おまえに至っては、別の世界では、だがな」

「まあね……」

「あ！兄さん、新八！見てみなよ！！」

反対側の席で、アルがエドと新八を起こした。

「どうしたの？アルフォンスくん」

「早く見るヨロシ」

窓の外を見ると、幾つもの崖や溪谷が見えた。

「うわぁ…！」

「凄いな」

「こつちからも見えるよ！」

刹那も、反対側の窓を指差す。

声を聞いて、銀時も目を覚ました。

「あ…？着いたのか？」

「やっと起きたか。テーブルシティには、まだ着いていない」

「そつでもないよ、桂さん」

呆れている桂に、アルは外を指差した。

反対側の席に行くと、遠くに建物が幾か見えた。

「ほら、あの山の手前」

「あれが、テーブルシティ……」

「不思議な街だね」

大きな山の手前に、円形を重ねていったように出来た街が見える。

「入領許可証を拝見する！」

アメストリスの憲兵が、何人か入って来る。

「許可証？」

「国境沿いの街は厳しいな。クレタに行くわけじゃねえのに」

エドは、憲兵達の様子を見る。

近くにいる老夫婦に、話を訊いていた。

「テーブルシティには、どのような要件で？」

「娘夫婦に、子供が産まれました」

「それは、おめでとうござい…ます…！」

憲兵は言いながら、持っていた棍棒を振り下ろした。

「なっ…！？」

だが、棍棒は振り下ろされる前に、憲兵は返り討ちにされる。老夫婦はマスクを被った若い男女で、すぐに逃走を図った。

「よっ」

透かさずエドは、足を出して転ばせようとするが、2人は側転の要領でよけていった。

「いい身のこなししてんなあ」

「エドワードさん！感心してる場合ですか!？」

新八が窓の外を見ると、先程の男が飛び降りようとして網に捕まり、落ちて引きずられ、女は取り押さえられていた。

「……………」

「容赦無しって感じだな」

余りの光景に、新八と神楽は顔を背ける。

「奴らは、クレタのスパイだ。許可証を確認する」

憲兵が、エド達の近くに来て言った。

「許可証は無い」

「何!？」

「これで勘弁してよ」

エドは銀時計を取り出し、憲兵に見せた。

「こ、これは…！国家錬金術師の方でしたか!！」

敬礼をし、憲兵は去って行った。

「便利だな、その時計」

「その懐中時計が、国家錬金術師の証ってことか？」

昨日のことを思い出し、銀時は呟き、高杉は時計を指差した。

「ああ。国家錬金術師は、この国の研究機関や施設の利用が何でも出来る。特権だな」

銀時計を握るエドの姿を、別の車両から見つめる男がいた。

「あんなガキが、アメストリスの狗？」

「許可証を拝見」

近くに憲兵が来て、男は黙って許可証を出し、憲兵は確認した後切った。

すると、連れていた憲兵の犬が激しく吠えた。

「きゃあああぁっ!!」

叫び声と共に、前の車両の客が逃げて来る。

「何だ!？」

ただ事ではないと感じ、エドとアルは前の車両に走った。

「おい、待て！」

銀時達も後を追ひ、前の車両に行く。

「何だ…!?!」

前の車両に行くと、先程の男が、憲兵の首を掴み、足元には血を流した犬が転がっている。

「無駄な抵抗はやめ…うわっ!!」

憲兵が言い切る前に、男は掴んでいた憲兵を投げつけた。

「全く、余計な邪魔が入ったものだ!」

言いながら、男の様子が変わる。

錬成反応に似た光を放ち、姿が変わっていき、刹那達が見た狼男の姿になる。

「ば、化け物!?!」

「狼男ネ!」

新八と神楽は、驚きながら言う。

「こいつは…!」

「一昨日の!」

「知ってんのか!?!」

銀時は、目線だけを動かして訊いた。

「うん……」

「こいつは合成獣だ！」

エドは叫び、合成獣に向かって行く。
が、合成獣は天井を壊し、外に飛び出した。

「何が目的だ…！？待て！」

壊された天井の真下に行き、エドはアルを踏み台にして、外を見る。
合成獣は、先頭の方に走って行く。

「前の方に行った！追うぞ…！」

アルから飛び下り、エドは前に走る。

「アルフォンスくん、じっとしてて」

そう言いながら、刹那はアルによじ登った。

「ちよっ、刹那さん！？」

「1人で倒せると思ってんのか！？」

高杉も後を追い、アルによじ登る。

「高杉さんまで！」

「アルフォンスくん。上は、あの2人に任せよう」

桂に引かれ、アルもエド達の後を追う。

後ろでは、憲兵が機関室に連絡を入れていた。

『列車を止める！化け物が乗っている！！』

「…何だ！？緊急停止！！」

機関師はブレーキを掛けるが、その直後に窓から、合成獣が機関師を掴んだ。

「ブレーキは、まだ早エんだよ！！」

エド達は、機関室に繋がる戸に着くが、戸は閉まっている。

「開かねエぞ！」

「どいてろー！」

銀時を下がらせ、エドは両手を合わせ、戸に触れた。

「行くぞ！」

再錬成した戸を開け、機関室に向かう。

「……趣味悪イ」

「ほんとですね……」

銀時と新八は、エドの錬成した戸を見て呟く。

エドが錬成した戸は、本当に酷いデザインだった……。

「何で！？カッターじゃん！！」

「自分のセンスが最悪だったこと、無自覚アルか」

万事屋メンバーやアルに、白い目で見られながら、エドは機関室に向かった。

「おわっ！！」

炭水車に上がった時、合成獣は機関師を投げつけ、列車の屋根に飛び移った。

「来たぞ！」

「このっ！！」

飛び移って来た合成獣の爪と、素早く抜いた刹那の刀がぶつかり合い、激しい音が鳴り響く。

「まずい！アル、列車を止めろ！！」

「え！？」

驚く間もなく、エドは屋根に飛び乗って行った。

「ちょっと兄さん！いきなり、そんな」

「アルフォンス、私に任せるネ。適当に撃てば、きっと止まるアル」

神楽は傘を構え、引き金を引こうとする。

「駄目だよ！そんなことしたら、止まらなくなっちゃう！！」

「なら、錬金術だ」

銀時は両手を合わせ、アルは慌てて止める。

「銀時さんも、不用意に錬金術は使わないで！」

一方、屋根の上上がったエドは、合成獣と対峙する刹那と高杉と合流する。

「エドワードくん！」

2人は、合成獣に刀を向けながら、視線だけでエドを見る。

「合成獣さんが1人旅かい？」

機械鎧を甲剣に錬成し、エドも戦いに加わる。

「機械鎧…！貴様、鋼の錬金術師か！！」

「人気者はつらいねえ！」

わざとらしく笑うと、合成獣は爪を伸ばし、エドに向かって来る。

「…っ！！何が目的だ！？」

「鋼の！」

一瞬押されたエドを見て、高杉も合成獣に切りかかる。合成獣はすぐによける。

「逃がすかよ」

刀を持ちながら、両手を合わせ、高杉は指を鳴らした。瞬時に炎が錬成され、合成獣に命中する。

「ぐあつ…!!」

「久々なのに上手だね」

「加減も出来てるしな」

炎を見て刹那とエドが言った。

合成獣は炎を受けたところを押さえ、高杉を睨み付けた。

「炎を錬成したか。なら、貴様は焰の錬金術師か!？」

「俺がマスタングに見えんのか!？」

高杉は不快そうに、炎を放った。

「嫌そうだな…」

「晋助さん、ロイさんと仲悪かったからね」

合成獣は炎をかわし、飛びかかる。

その反動で、エドは飛ばされるが、線路の周りにある鉄骨を足場にして、屋根に戻る。

「あつぶねえ」

「大丈夫？」

「ああ、何とかな」

答えた時、銃声のような音が幾つも聞こえた。

第7話 車上の遭遇（後書き）

エド

「今回は、映画キャラが多数登場！」

アル

「代わりにボク達の出番が無いかもね」

エド

「え…！？じゃあ、映画キャラの出番は少なめで…！」

第8話 蝙蝠と囚人（前書き）

エド

「出番……あるよな!？」

真理

「文章が多いけど、ちゃんとあるよ」

第8話 蝙蝠と囚人

「何だ……!?!」

上空を見ると、蝙蝠の翼の形をしたグライダーのような物を付けて飛行する、黒い装束の集団がいた。

「邪魔が入ったか!」

合成獣は忌々しげに、上空を見上げる。

黒い装束の者達は、手元のワイヤーを引く。

先程の銃声のような音は、このワイヤーを刺した時の音だったらしい。

「どこ行くんだ?」

「エドワードくん、前!」

ワイヤーを使い、滑空して行く姿を見ていると、前から合成獣が迫って来る。

「おわっ!」

合成獣の爪を、ギリギリでかわし、後ろに下がった。黒い集団は、列車を通り過ぎ、前方に飛んで行く。

ピィィッ

先頭を飛んでいた、マスクを被った女が笛を吹いた。
前方の反対車線から、列車が走って来る。

「来たぞ！『黒コウモリ』だ！！」

反対側の列車に乗っている憲兵達は、銃で応戦を始める。

黒コウモリと呼ばれた者達は、腕に装備していたマシンガン撃つ。

「ぐあっ！」

「うわあっ！」

憲兵達は、次々に撃たれていく。

「緊急停止、奴らが」

無線で連絡をする憲兵の脳天に、銃弾が命中し、事切れた。

それらの様子を、客車から1人の男が見ていた。

男は、窓から屋根に上がる。

「何だ、おまえは！？」

黒コウモリの1人が、男に訊いた。

風が吹き、男の被っていた帽子と付け髭が吹き飛ばす。

男は、脱獄したメルビンだった。

「そこをどけ」

問いには答えず、メルビンは前に出て、左手を突き出す。

錬成反応の光が輝き、左手の手袋が破け、その下の錬成陣が露わに

なる。

「ぐあぁっ!!！」

その瞬間、相手の身体に電撃が走り、全身が燃える。

「なっ!?!」

「錬金術師か！」

メルビンを見て、黒コウモリ達は口々に言った。

その間に、先程の女と何人かの男が、最後尾の車両に入る。

「助けに来たぞ！」

車両の中には、拘束された者達がいた。

「すまない」

拘束されていた者達は、立ち上がってすぐに、後ろ手に持っていたマシンガンを乱射した。

「罨よ!!！」

女が言い、黒コウモリ達は急ぎ、列車から離れて行く。

「罨だと!?!手間取らせやがって…!!！」

メルビンが舌打ちをすると、反対側から、合成獣と戦うエド達の乗る列車が通り過ぎる。

「あいつ!」

「知ってるの!?!」

戦いながら、エドはメルビンの姿を見る。

「脱獄野郎だ!」

「見つけたぞ!」

合成獣は、メルビンに向かって行く。

「お出迎えとは、ご苦勞なことだ!」

「久しぶりだな!」

屋根の上を走りながら、メルビンと合成獣は言い合つ。どうやら、お互いを知っているらしい。

「待ちわびたぞお!」

メルビンの電撃をかわしながら、合成獣は飛びかかった。

「あいつら、知り合いみてエだな」

「仲良し、って感じには見えないけどな」

高杉と刹那は、メルビンと合成獣のやり取りを見る。

「このままにしとけるかよ！」

エドは鉄骨を錬成し、捕まえようとする。だが、合成獣はよけ、メルビンは電撃で砕いた。

「うわっ！！！」

反動で、エドは屋根から落ちる。

「おい、大丈夫か！？」

落ちて来たエドを、銀時が受け止める。

「ああ……」

軽く返事をし、下ろしてもらおう。

「やべえ、駅だ！！！」

テーブルシティの駅が、目前に迫っていた。

「アル、まだか！？」

「やってるよ！これがボイラー、圧力計、シチリンダー、ブレーキ」

確認しながら、アルは錬成をする。

その直後に、水蒸気が溢れた。

「わっ！！何！？」

屋根の上にした刹那は驚く。

「ちっ！ここまでか」

合成獣は呟き、屋根から飛び降りて行った。

「待て！」

高杉は炎を放つが、届かなかった。

「何やってるネ、アルフォンス！」

「早く止めないと！！！」

「分かってる！でも、ブレーキが……！！！」

慌てる神楽と新八を宥めるが、ブレーキが動かない。
先程の錬成で、動かなくなったらしい。

「何でもいいから、止めんだよ！」

エドは床に手を合わせ、錬成をする。

列車の下から突起が表れ、衝撃と共に幾らかスピードが落ちる。

「エドワードくん！距離が間に合わんぞ……！」

今の位置と駅までの距離を見て、桂が言った。

「刹那、高杉！こっち来い……！」

銀時は、2人を炭水車に移らせる。

「このままじゃ、駅にぶつかっちゃう!!」

2人が移つてすぐ、銀時は炭水車と客車の間にある連結部分を分解し、切り離した。

切り離れた時、メルビンは炭水車に飛び移り、しがみついた。

「ぶつかるーっ!!」

「しっかり掴まれ!!」

アルと桂は、ほぼ同時に叫んだ。

「衝突だけはさせねえ!!」

悲鳴が聞こえ、エドは咄嗟に手を合わせた。

錬成反応が起こり、線路が変形し、列車は脱線した。

「……おい、無事か?」

脱線はしたが、駅には衝突せず、死者や怪我人はいなさそうだ。

「何とか間に合った…か」

炭水車にしがみついていたメルビンは、ホームに降り、走り出した。

「あ!脱獄野郎!」

メルビンの姿を見つけ、エドはホームに立つ。

「追うぞー!!」

「え!?!」

駅構内はめちゃくちゃになっており、このままにしていいいのかと、アルや新八は思った。

「後で直す!それより、早く追うぞー!!」

駅から出ると、憲兵達が銃を撃っている。見ると、上空に黒コウモリ達が飛んでいた。

「あそこ!」

刹那は、ジェットコースターのレールのようになっているパイプの上を指差す。

そこには、メルビンが走っていた。

「みんな、逃げろー!!」

メルビンが一度立ち止まり、手を動かしたのを見て、エドは叫んだ。叫んですぐに、幾つもの氷柱が憲兵達に突き刺さった。

「おい、あいつらは、どこに向かった!?!」

エドは近くにいた、軽症の憲兵に訊いた。

「西のドームだ。不法入国者を収容している!」

「そこだ！」

エド達は、遠くに見えるドームに向かい、街中を走る。

『黒コウモリは、中央広場を通過中！奴らの狙いは、西のドームと思われる！！脱獄した錬金術師も、そちらに向かっている模様！！』

憲兵の無線が、街中に響く。

「ドームって、あれですか！？」

新八が、ドームを指差した。

黒コウモリ達は、そのドームの周りを飛ぶ。

「しまった！」

ドームの周りに、錬成反応の光が輝くのを見て、エドは声を上げる。

「破壊したか…！」

ドームは、轟音を立てながら崩れていった。

第8話 蝙蝠と囚人（後書き）

桂

「ドームが崩壊したぞ！！」

エド

「いよいよ、あいつの登場だな」

アル

「そつだね」

第9話 少女との邂逅（前書き）

真理

「オリジナルの描写をどうしよう、って作者が言ってる」

エド

「オレの出番を増やす！」

ロイ

「いや、私の出番をだ！」

銀時

「俺の出番を多くしろ！」

真理

「言い争いになってるよ……」

第9話 少女との邂逅

あちこちから火の手が上がり、周りの者達は火を消そうと、水を掛ける。

その中を、一組の一家が走っていた。

「ここで待っていてくれ」

男は、妻と子供を待たせ、手にしていた本を広げ、自分の前に来た軍人に見せる。

「……！研究施設は用意させていただきました。クレタ本国へお迎えします。アトラス中尉、ラウル軍曹。クライトン博士ご一家だ。安全にお連れしろ」

後ろにいた2人の軍人に言った。

2人は敬礼をしながら、返事をした。

軍人達と一家は、軍のエレベーターに乗り込む。

「ねえ、おうちは何？おうちに帰らないの？」

小さな少女が訊くと、母が抱きしめた。

「おうちは焼けてなくなっちゃったの。これから、新しいおうちに行くのよ」

少女に言いながら、母の身体が小刻みに震えているのが分かった。

「すまない。いつか、彼らが分かってくれる日がくる」

外からは、「裏切り者!」、「どっか行っちまえ!」などの罵声が聞こえた。

「みんなは?みんなは行かないの?」

少女が両親に訊いた時、銃声が聞こえ、罵声を上げていた者達が撃たれていくのが見えた。

「ジュリア、見るな!」

少女の兄が目を塞ぐ。

その光景は、少女の目に焼き付いた。

「はっ…!」

椅子の上でうたた寝をしていた少女は、目を覚ました。

「どうした?ジュリア」

兄が、心配そうに声を掛けた。

「怖い夢見てた…」

数年前の出来事は、悪夢となって、時折思い出してしまう。

「寝るんなら、ちゃんとベッドで寝ろ」

「うん……」

少女は頷き、本を読んでいる兄の近くに行く。

「お兄ちゃん、また難しい本読んでの？…！これって」

「父さんと母さんの研究記録だ。内緒だぞ」

「私、知ってる。大いなる力のことでしょ？お兄ちゃん、錬金術が分かるの？」

両親が研究しているのは、大いなる力。それを、兄も分かっているのか。

「分かるさ。そのうち、ジュリアにも教えてやる。そしたら、父さん達の錬金術も」

「うわあああつ…！」

突然叫び声が聞こえた。

兄は立ち上がり、ドアを開ける。

「ちょっと見てくる。ジュリアは、ここにいろ！」

「お兄ちゃん…！」

少女は部屋に1人、残された。

「……………！」

不安になり、少女も部屋を飛び出すと、叫び声の聞こえた部屋に向かう。

部屋の前に行き、開け放たれたドアから中を見ると、兄の姿があった。

「お兄ちゃん」

声を掛けると、兄は一瞬振り返った。

「ジュリア、逃げろ！早く！！」

少女に言ってすぐ、兄は悲鳴を上げた。

その光景を見た少女は、気を失ってしまふ。

「あれ見ろ！」

崩れるドームを、銀時が指差した。

見ると、ドームに収容されていた者達が脱出を始める。

「収容者を逃がしている！？」

桂は、逃げて行く者達を見た。

すると、別の場所に電撃を放つメルビンがいた。

「おい、あいつがやってんのか！？」

「見る限りはね」

メルビンの様子を見ながら、高杉と刹那はそれぞれ言った。

「……はっ！」

そのまま立ち去ろうとしたメルビンは、何かに気付く。エド達は、メルビンが見た方向を見る。すると、崩れたドームから1人の少女が現れた。

「あの子……！」

「写真の女の子だ！」

刹那とアルは、少女に気付いた。腰の近くまである茶髪に、水色の瞳が印象的な少女だった。

「ジュリア・クライトン……！？」

少女……ジュリアを見てみると、彼女はドームから飛び降りる。

「な……！？」

崩れた部分を足場にして、ジュリアは着地をすると、走り出す。

「おい……！」

ジュリアは走りながら、エド達を一瞥する。

「ジュリア！」

黒コウモリの女が飛んで来て、ジュリアに向かって足場の付いたワイヤーを投げる。

「ミランダ！」

ワイヤーを掴み、ミランダはジュリアを連れて飛ぶ。

「あいつら、仲間なのか!？」

エドは呟くと、2人を追い掛けるメルビンを見て、走る。

「目障りだ！」

メルビンはミランダに向かって、氷を放つ。

ミランダはかわすが、氷は空中で向きを変え、ワイヤーに当たり、ジュリアは落下してしまう。

「きゃあああっ！」

落下したジュリアは、鐘が幾つも付いた塔にしがみつく。が、その塔も崩れてしまう。

「危ねエ！」

「オレは脱獄野郎を追う！銀さん達は、女の子を頼む！」

エドは銀時達に言い、パイプの上を走る。

「1人じゃ無理だろ！」

「私達も、あの人を追う！」

「……分かった。二手に別れて、脱獄野郎を追おう。アルは、女の子を！」

「うん！」

即座に決め、エドと銀時はパイプの上から、桂と高杉と刹那は地上からメルビンを追ひ、アルと新八と神楽はジュリアの下に向かった。

「待ちやがれ、脱獄野郎！！」

パイプの上を走り、銀時は叫ぶ。

メルビンは銀時とエドに向かって、氷柱を放つ。

「その錬成陣、どこで学んだ！？」

素早く機械鎧を甲剣に錬成し、氷柱を砕いて訊いた。

だが、メルビンは訊いたことには答えず、ジュリアの近くにアーチ状の氷を錬成する。

「ジュリア！」

ミランダは再びワイヤーを使うが、ジュリアは掴もうとした時、塔が倒れてしまう。

「落ちるぞ！」

「任せて！！」

アルはパイプに飛び移ると、氷のアーチに乗る。

「邪魔だ！」

「させるか！」

氷を錬成していくメルビンを見て、桂は行く手を塞ぐように壁を錬成する。

「ちっ！」

メルビンは舌打ちをし、壁を破壊する。
その間に、アルは走る。

「きゃあっ！！！」

落下したジュリアを、アルが間一髪で受け止めるが、受け止めた衝撃で、足元の氷が砕けた。

「うわあっ！」

ジュリアを抱えたまま、アルを乗せた氷は滑っていき、崖まで行く。

「アルフォンスくん！」

「このままでは、谷に落ちるぞ！！！」

谷に落ちることを阻止しようと、桂達は走った。

「アル、落ちんなよ！！！」

「何とか踏ん張れ！！！」

「そ、そんなこと言ったって……っわっ!」

氷から落ち、そのまま崖を滑り落ちる。

「くっ……!」

手を伸ばし、崖っぷちで止まる。

抱えられたジュリアは、真下に見える谷底と、落ちていった氷を見る。

「あっ……!」

「駄目だよ、動いちゃ」

「アルフォンス、掴まるネ」

目線の先に、新八と神楽が、アルを引き上げようとしていた。

「頑張つて!」

新八は、神楽の身体を支え、その状態で神楽はアルの手を掴む。と、ジュリアは崖に上がろうとするが、足を踏み外す。

「しまった!」

ジュリアは咄嗟に鎧の頭にしがみつくが、谷底に落下する。

「わあっ!」

落下した衝撃で、アルと新八、神楽も谷に落ちてしまう。

「アル！」

「新八、神楽！！」

「女の子が落ちた！」

「ガキ共まで落ちてんじゃねエか！」

エドと銀時は、高い位置から、刹那達は低い場所から崖を見ていた。

「……おい！」

桂は崖を指差す。

見ると、アル達が落下した直後に、メルビンが飛び降りる姿があった。

落下していくアルは、空中で新八と神楽を抱き寄せ、落ちた時の衝撃を弱めようとする。

「落ちる！死ぬウウウツ！！」

「もう駄目ネ！！」

かなりの高さの為、もう助からないと思った。
すると、後方にいたメルビンが、雪状にした氷を放った。

「クッション代わりにするのか！？」

谷底に出来た雪山に、全員落下する。
錬成反応が起こり、雪の大半が消えると、ジュリアを抱いたメルビ
ンと、倒れたアル達がいた。

「その子を離しなさい」

メルビンの近くに、ミランダと黒コウモリ達が降り立ち、銃を向け
た。

「うわっ！」

起き上がった新八と神楽は、その状況に驚く。

「おまえらは死にたいのか？」

銃を向けられても、メルビンは平然と訊く。

「状況をよく見ることね」

残った雪山の周りにも、銃を持った者達がいた。

「残念だったな。この谷は、我々のテリトリーだ」

黒コウモリの1人が言うと、その声でジュリアが目覚めます。

「離せ！」

「安心しろ、ジュリアー！」

突然名前を呼ばれ、ジュリアはメルビンを見る。

「誰……!?!?」

「おい、動くな!」

「ボクの首を拾わせてよ」

頭の外れたアルは、立ち上がって、落ちていた頭を拾った。

「空っぽ!?!?」

「化け物だ!」

「アルフォンスは、化け物じゃないネ!」

驚きの声を上げる者に、神楽はムツとして言う。

「おまえ、神の領域に手を出したな。持って行かれたんだろ? 肉体を」

「何故そう言える?」

メルビンの発言に、ミランダは怪訝そうに訊く。

「俺の両親は、錬金術を研究していた」

ジュリアを下ろしながら、続けた。

「こいつらは、真理の扉を見たに違いない」

その場にいる、ほとんどの者が動揺した。

「右手は父から、そして左手は、母親から受け継いだ」

左右の手のひらに描いた錬成陣を、メルビンは見せた。

「俺の名は、アシュレイ・クライトン」

「アシュレイ…!?!」

その名に、ジュリアは聞き覚えがあった。

「本当に、アシュレイ兄さんなの!?!」

驚くジュリアに、メルビン…いや、アシュレイは頷く。

「ごめんな、ジュリア。ずっと1人にさせて。こんな兄を許しておくれ」

ジュリアの目尻に、涙が浮かんでいた。

第9話 少女との邂逅（後書き）

真理

「次回は、場面がコロコロ代わるかも、だってさ。…あ、新沢ミロ
スでも『教えて！！真理ちゃん』はやりま〜す」

第10話 谷底へ（前書き）

エド

「短い割にしては、時間掛かったな」

作者

「新作を考えてたら、遅れちゃって……」

銀時

「何書いたんだよ」

作者

「……銀魂とスケッチダンスのコラボ」

第10話 谷底へ

一方、崖の上ではエド達が、谷へどうやって行くかを話していた。

「脱獄野郎まで、谷底に行っちまうとはなア」

銀時は谷底を見下ろす。

隣で刹那は、目を閉じて、波導で谷底を見た。

「女の子とアルフォンスくん達と、あの男の人は無事みたいだよ」

「そっか…。けど、どうやって下りるか」

「それだけだよ」

「君が鋼の錬金術師か？」

エドが話そうとした時、後ろから誰かに、声を掛けられる。見ると、1人の軍人が部下と一緒に立っていた。

「この街を預かるピーター・ソユーズ少佐だ」

ソユーズは、やや偉そうに髪をなびかせる。

「…谷に下りる方法は、あるのか？」

「国境を越えてクレタに行くつもりか？」

エドの問いに、ソユーズは答える。

「この谷が、隣の国なのか…？」

桂は、谷とクレタ側の領土を交互に見る。

「谷は廃棄物に病原菌、犯罪者の巣窟だ。『デスキャニオン』は、人が踏み入れる場所じゃない」

「なるほどな。あの風船の周りが、この谷ってわけか」

ソユーズの話を聞き、銀時は司令部で見た地図を思い出す。

「その谷に、オレの弟と仲間が落ちこちまったんだ。助けに行く」

「先程、空を飛んでいた連中は何だ？」

「この街を狙うテロ組織。奴らは、『黒コウモリ』と称している」

桂とソユーズの話に、エドも口を挟む。

「あんたか。不法入国者を護送するって、嘘の情報を流したのは」

「もう少しで、犯罪者を一生逮捕出来たんだが。…脱獄錬金術師は、何故あの娘を狙っている？」

ソユーズはわざとらしく肩をすくめ、話題を変えた。

「さあな。そっちの方は、大佐が調べてるんじゃないの？」

「谷へ下りるんなら、気をつける。クレタの秘密警察とかにな」

「忠告どうも」

エドは軽く手を上げると、背を向けた。

「秘密警察に見つからないように、別れて下りた方がいいな」

「じゃあ、俺とエドがこっから下りっから、おまえらは向こっから
行けよ」

「分かった」

桂達は、場所を移動して行き、それを見送った後、エドは監視所を
リフト状に錬成する。

「行くか、銀さん」

「ああ」

2人はリフトに掴まり、崖を下りて行った。

「ジュリアだ！ジュリアが帰って来た！！」

「おかえり！！」

「成功したのね！！」

アル達は手枷をされて、黒コウモリのアジトに向かう。

その途中、谷の集落のような所で人々はジュリアの姿を見て、口々に言った。

「ご心配をおかけしました」

「ジュリア、また学校で教えてくれないの？」

小さな子供達が話し掛けてくる。

「もう少し待っててね」

「えーっ」

子供達は不満そうに、口を尖らせた。

「アルフォンス、こんな壊して、さっさと逃げるネ」

アルの後ろを歩く神楽が、手枷を見せて、小声で言う。

「駄目だよ。逃げるのは、もう少し様子を見てからにしよう」

谷の者達は、神楽と新八は勿論、鎧のアルを怪訝そうに見ている。

「この人達、こんな深い谷に住んでるんだ……」

歩きながら、新八は谷と崖の高さを見る。

「……」

ジュリアは、そんな3人をじっと見つめていた。

「ポロスの山とミロスの丘……。古より、ミロスの民の聖域か。…
やはり、覚えがある」

中央司令部では、ロイが資料と地図を見ていた。

コンコン

ドアをノックする音が聞こえ、資料から目を離さず、「入れ」と返事をした。

「失礼します！」

聞き覚えのある声に顔を上げると、そこにはウィンリイがいた。

「ウィンリイくん」

「こんにちは、大佐」

「司令部は、一般人が入って来ていい場所じゃないのだが…」

「すみません。けど、大佐なら何か知ってるかと思っただんです」

「何だね？」

苦笑するウィンリイを見て、ロイは訊いた。

「エドとアルが、また前みたいに、右腕が機械鎧になったり、鎧になつたりとかしてませんよね!？」

「…っ！何故それを！？」

「……やっぱり」

ロイの表情を見て、ウィンリイは呟いた。

「昨日。新聞を見たら、日付が2年前になってて、しかもぼっちゃんは、アルが元に戻ったことを知らないし……」

「君も、こちらに来てしまった、というわけか」

「え？どういことですか？」

ロイは、刹那が言っていたことを、ウィンリイに話した。

「べ、別の次元に来た…！？」

突然の物言いに、半分声が裏返ってしまふ。

「信じられないかもしれないが、事実だ。我々は、その世界に
来ている」

「大佐は、信じたんですか？」

「ああ。逢う筈の無い者達に逢ったからな」

「逢う筈の無い者達？」

ウィンリイが復唱すると、ロイは頷いた。

「別の世界で、共に戦った者達だ」

「それって、銀さん達のことですか!？」

以前、戦いの最中に、エドと銀時、高杉と刹那は、アメストリスに
来てしまったことがある。

「知っていたのか…!」

「大佐!」

少し驚いていると、部屋にリザが入って来る。

「ウィンリィちゃん!」

「あ、お邪魔してます!リザさん」

軽く挨拶をすると、リザはロイのそばに行き、耳打ちをする。

「セントラル発の列車が、テーブルシティの駅で脱線したと連絡が
入りました」

「あの、馬鹿共が!」

「エド達が、何かしたんですか!？」

思わず大きくなってしまったロイの一言に、ウィンリィが反応する。

「大佐」

今度は部屋に、アームストロングが入って来る。入ってすぐ、ウィンリィに目線で挨拶をした。

「クレタが、犯罪者の引き渡しに応じると言って来ております」

「犯罪者だと？」

「犯罪者の中に、クレタで指名手配されている者がいるそうです」

アームストロングは、持っていた資料を広げて見せた。

「指名手配者の名前は？」

ロイが訊くと、アームストロングは一枚の写真を出した。

「ジュリア・クライトン。16歳の娘です」

第10話 谷底へ（後書き）

真理

「コラボってさ、始めるの？」

作者

「完成次第始める!!」

第11話 ミロスの民（前書き）

『教えて！！真理ちゃん』

真理

「はい、新訳ミロスで初めての『教えて！！真理ちゃん』のコーナーです」

エド

「やっぱり、ここでもやるのか」

真理

「アステカさんからの質問。『エド達と銀さんは、どうして言葉が通じるの？』」

アル

「そう言えばそうだね」

エド

「向こうの世界に行った時、普通に会話出来たしな」

真理

「次元や時空が乱れていた為、言葉が通じてました。文字が読めたのは、扉を開けたことで、知識が増えたからです」

銀時

「あーだから、こっちの世界の字が読めたのか」

真理

「ちなみに、新八と神楽はアメストリスの文字は読めません。言葉は通じてるけどね」

第11話 ミロスの民

蝙蝠が飛び回る洞窟の中に、ジュリアと黒コウモリ達、そしてアル達は入って行く。

その後、アル達は手枷をされたまま、牢屋に入れられた。

「へえ、洞窟のアジトか」

牢屋に入って、アルはあちこちを見る。

「ごめんなさい。私を助けようとしてくれたのに…」

ジュリアは、牢屋の前に座り、申し訳なさそうに言った。

「いいんだ。それより、お兄さんに逢えて良かったね」

アシレイの話の聞いていた為、アルはそのことが喜ばしく、新八と神楽も頷いた。

「なあ、ジュリア。ミランダはどうして、こんな化け物とガキ共を？」

「やめてトニ」

ジュリアは、見張りの男を咎めた。

「失礼を許して下さい。彼らは、錬金術について、よく知らないんです」

「いいよ。慣れてる」

「あの、アル…さん」

少し間を開けてから、ジュリアは話し掛ける。

「ああ、アルフォンス。アルフォンス・エルリック」

「私は神楽ネ！」

「僕は志村新八っていいいます」

3人がそれぞれ名乗ると、ジュリアは軽く頭を下げた。

「エルリックって、アメストリスのエルリック兄弟!？」

「知ってるの？」

「錬金術を広く学んでいると、自然と耳に入ってきます」

「エドとアルフォンスって、有名人アルか!？」

エルリック兄弟の知名度に、神楽と新八は驚く。

「アルフォンスさん、あなた達が、人体錬成の禁を破ったのは本当ですか？」

「……何でそんなことを？」

「私の両親は、神話を元に錬金術を研究してました。『真理の扉を開いた者は、大いなる力を手にする』…そう、ミロスの神話にありました」

「ミロスの神話？」

「地中には、マグマという力の流れがあります。真理を見れば、その力を自在に操れると、語られています」

少し俯いていたジュリアは、顔を上げた。

「教えて下さい。あなた達が、もし本当に人体錬成をしたのなら、真理の扉を見た筈ですよね!？」

「……ボクと兄さんは、ただ母さんの笑顔が、もう一度見たかっただけなんだ」

もう一度母の笑顔が見たい、その為に2人は、錬金術を鍛えた。だが、錬成は失敗に終わり、真理に身体を持って行かれた。

「この2人は錬金術師じゃないけど、ボクと一緒にいた人達は、強制的に扉を開かせられて、一度は身体を持って行かれたんだ」

新八と神楽は、右腕を持って行かれた銀時を思い出す。

「……!」

話を聞き、ジュリアとトニは衝撃を受け、息をのむ。

「持って行かれた身体を取り戻すのは、すごく大変なんだ。だから」

アルは、ジュリアを見据えた。

「いけないよ、ジュリアさん。禁忌を犯せば、必ず報いを受ける」

「私達の祖国を取り戻すには、大いなる力が必要なんです…!!」
思わず語尾が強くなってしまったが、ジュリアは少し微笑んだ。

「話してくれてありがとう、アルフォンスさん。早く、ここから出られるようにするから、もう少し待っててね」

ジュリアは立ち上がり、牢屋から去って行った。

その頃、銀時とエドはリフトに掴まり、谷底を目指していた。

「うえっ!! すごい臭いだな…」

「あのソユーズって奴が言ってただろ? 廃棄物や病原菌の巣窟だつて」

エドが言った時、壁にあったダストシュートから、大量の廃棄物が落ちてくる。

「あっちからもか」

見ると、あちこちのダストシュートから廃棄物が落ちる。

「隣の国に垂れ流し、って感じだな」

「……ツラ達は、どうやって下りてんだか」

降り積もっていく廃棄物を見下ろし、銀時は呟いた。

「銀さん、なるべくゴミの少ない所に下りよう……」

「そうだな……」

アジトの中で、ジュリアと別れたミランダ達は、被っていたマスクを外し、アシュレイと話していた。

「私はミランダ。あなたのことは、ジュリアから聞いているわ。生きて会えるとは思わなかったけど、本当に凄い錬金術師なのね」

「『黒コウモリ』とはよく言ったものだ。2つの国の間をフラフラと飛び回る……。君達には似合いの言葉だな」

アシュレイは、皮肉を込めて言った。

「何だと!？」

「アラン」

ムツとした様子の大柄な男を、ミランダが宥める。

「そう。私達は、この洞窟の壁に張り付くことでしか生きていけない蝙蝠よ。だから聖地の」

「話は聞いてきたわ。あの人達を自由にしておいて！」

ミランダの言葉の途中で、ランプを持ったジュリアが入ってくる。

「どうだった？」

「兄さんが言ったとおり、あの人は、お兄さんと一緒にお母さんを蘇らせようとして、その時真理を見たって」

ジュリアの話聞き、黒コウモリのメンバー達は驚きの声を上げた。

「クライトン博士の説は正しかったのね。真理の扉は、実在する…」

「でも、そのせいで彼は、身体を失ってしまった。持って行かれた身体を取り戻すことは、すごく大変だって言ってたわ」

「それでも、真理に…神の領域には近付ける」

「愚かな。そんな話を聞いても、真理を目指すか」

アシュレイは、嘲るように呟く。

「どうして！？私だって、方法を知っていたらやってたわ！それで、父さんと母さんを…」

「ジュリア！あいつの身体を見ただろう。あんな姿になりたいのか！？」

強く言われ、ジュリアは俯いた。

「こんな連中と付き合うのはやめろ。忘れたのか！？こいつらは、俺達一家を裏切り者呼ばわりした。おかげで、俺達は危険を冒してクレタに移住するしかなかった！！」

「それは私も知ってる！なら、どうして私達を受け入れたクレタに、父さんと母さんは殺されたの！？」

アシュレイはジュリアを見つめ、ミランダ達を見る。

一度目を伏せた後、マフラーを取る。

その下は、首から顎にかけて傷があった。

「父と母を殺したのは『狼キメラ』。クレタ軍の差し向けたな！！」

アシュレイは鋭い目つきで、当時のことを話す。

「あの日、悲鳴を聞いて研究室に駆け付けた時、父と母は殺され、狼キメラがいた」

宙吊りにされ、血だらけになった両親の姿が、ジュリアの目に浮かぶ。

「奴は研究室をめちゃくちやにしながら、ある物を探していた」

「その『ある物』というのは…」

ミランダは、『ある物』が何か、予想がついた。

「俺がその時持っていた本。両親直筆の研究記録だ」

「やはり……」

「俺はジュリアを抱いて、必死で逃げた。だが奴は、匂いで追ってきた。逃げ切れないと判断した俺は、ジュリアを木のウロに隠し、崖へ向かった」

「崖へ…！？」

「その後、クレタ軍に囲まれ、崖から落ちた。…奇跡的に助かった俺は、父さんと母さんの研究記録を頭に叩き込み、アメストリスに密入国した」

だが、と険しい表情で続けた。

「奴らはしつこく追ってきた。俺は罪を犯し、アメストリス最大の刑務所に入った。そこなら、奴らの手は及ばないと思ったからだ」

「そう…だったの…」

「そして、おまえを助けようと思っていた矢先に、クレタにいる筈のおまえが、アメストリスに密入国していた！」

話しながら、アシユレイは切り取った新聞の写真を出す。

「まさか、谷の奴らに利用されていたとはな！！」

「それは違うわー！！」

黒コウモリ達より早く、ジュリアは反論する。

「その後、私はクレタ軍に捕まった。軍は、散々私を調べて、私が

何も知らないと分かると、着の身着のまま、この谷に放り込んだ」
谷に放り込まれ、うずくまっていたジュリアに、人々は手を差し伸べてくれた。

「私は、谷の人達に助けられて、やっと生きてきた。兄さんだって、昔は谷で一緒に」

「昔のことなんて、思い出したくもない」

冷たく言い、アシュレイはミランダに向き直る。

「おまえ達の目的は、聖地の錬金術か」

「それは足掛かりに過ぎない。我々の目的は、ただ一つ。ミロスの独立」

「やはりそうか」

「数と力では、クレタやアメストリスには勝てない。我々に残された道は2つだけ。人体錬成をして真理の扉を開くことか、聖地の錬金術を手にするか。私達には切り札が必要な」

ミランダはアシュレイに問い掛ける。

「博士は何を解き明かしたの!？」

「クレタ軍も、その秘密を探っている」

「な……!？」

その場にいた全員は驚き、アシュレイは続ける。

「奴らはその秘密を使い、何かを仕掛けるつもりだ」

第11話 ミロスの民（後書き）

真理

「質問は、まだまだ募集中！あたしが何でも答えるよ」

第12話 嘆きの丘（前書き）

真理

「話の組み立てを考えて遅れたって」

エド

「もう一つの話は？」

真理

「そっちも組み立て中だって」

第12話 嘆きの丘

「ゴミが沢山落ちてるね」

崖を下りながら、刹那が呟く。

エドと銀時と違い、刹那達は崖を自力で下りていた。

「こんなゴミ捨て場のような所に、人が住んでいるとは……」

廃墟にも見える建物に、人影が幾つもあり、桂はそれを眺める。

「おい、鎧とガキ共の居場所は分かんのか？」

先に下りていた高杉が、刹那と桂を見上げて訊いた。

「鎧じゃないアルフォンスくんだ！」

桂は、いつもの調子で言い返した。

「本人に言ったら、きつと怒るよ。アルフォンスくんだって、好きであんな姿になったんじゃないんだし」

「いや…、エドワードと違って、アルフォンスと喋ったことがあんななかったからよ…」

「だからって、そういう呼び方は…あ」

刹那は咎めながら、波導で辺りを見て、声を上げた。

「どうした？」

「あっちの洞窟から、新八さんと神楽ちゃんの波導が見えたの」

「アルフォンスくんも一緒か？」

「多分。鎧の姿になってるから、波導で見づらいけど……」

人間の時と鎧の時では、波導が違う。

無機物である分、生き物と違って分かりづらい。

「あっちだよ」

刹那は指を差した後、反対方向を見る。

「銀時さんとエドワードくんは、アルフォンスくん達の居場所分かるかな」

「あいつらなら、何とかやれんだろ」

高杉が言うと、桂も頷いた。

(確かに、あの2人なら、何とかやれるかも)

遠くを見つめて、刹那は思った。

その頃、銀時とエドは谷底にたどり着き、リフトから降りた。

「どわぁっ!!」

「ちよっ…!!」

着地した途端に、大量のハエが飛び交う。

「あー、ゴミだらけだから、虫もかなりいるな」

「うん……」

2人が辺りを見ると、離れた所にゴミを拾っている者達を見つける。

「よお!この辺に、でっかい鎧が落ちてこなかったかあ!？」

エドが大きな声で呼びかけると、ゴミを拾っていた者達は、そそくさと逃げてしまう。

「…ったく。オレ達は怪しい者じゃねーっつーの」

「おい、エド!」

「ん?あ…!!」

見ると、リフトが崖の上に引き上げられていく。

「ヤロー、戻って来んなってか?」

「しょうがねえ、戻る方法は後にして、今はアル達を捜そう」

「そうだな」

残った雪の上を歩き、あちこちに向かって呼びかけてみる。

「アルーツ！新八、神楽、どこだーっ！！」

「！銀さん」

エドは銀時を呼び、地面を指差す。

そこには、アルの顔の跡がついていた。

「落ちたのは間違いねーな」

「スクラップ扱いされてなきやいいけどな」

と、エドは地面の下に隠れ、こちらに銃を向けている者に気付く。

「エド」

「わーってる…よー！」

素早く両手を合わせ、地面に触れた。

「うわっ！」

地面が突き上がり、隠れていた青年が転がり出る。

「他にも隠れてんだろ？」

銀時もエドと同じように錬成すると、隠れていた者達が何人も出てくる。

「おまえらの大将の所に案内しろーっ！」

錬成の際に飛び交ったハエと、臭いを払いながら、エドは言った。

『谷に脱獄犯が!?!』

「ええ。指名手配の娘と落ちて行きました」

ソユーズは、セントラルにいるロイと電話で話していた。

『ジュリア・クライトンで間違いないか?』

「写真を見る限りでは」

『鋼のと、一緒にいた奴らはどうした?』

「二手に別れて、谷底に向かいました。弟と仲間を助けると言って」

『クレタが信じると思っているのか!?!?』

「事実ですので…」

『話にならんっ!?!?!』

ロイは、乱暴に電話を切った。

「若造め…」

ソユーズは憎らしげに呟いた。

「鋼の達は、谷底に行ったようだ」

「秘密警察に、捕まらないでしょうか」

「奴らなら問題無いだろう」

ロイとリザは小声で話すが、ウィンリイはその様子を見つめる。

「エド達に、何かあったんですね」

ウィンリイは立ち上がり、言った。

「あたし、テーブルシティに行きます！」

「その街は、立ち入り制限もされている危険地域よ。あなた1人では、とても危険だわ」

「しかし。このままでは、クレタとの国境紛争に発展する可能性があるな……」

ウィンリイとリザの会話を聞きつつ、ロイは不安を口にした。

「こんな所に、よく住んでられんなア……」

銀時は谷を見回す。

ゴミを拾う人々、汚れた川、崖沿いに建つ多くの廃墟……。とても

住めるような所ではない。

「……おまえら、アメストリス人か？」

最初に発見した青年に、アジトへの案内をさせている。

青年の銃を没収し、後ろ手に縛り、エドは甲剣を突き付けている。
勿論、不本意だが。

「俺は違つが、こいつはそつだ」

銀時は銃を持った手で、エドを差した。

「軍の狗か？おまえ」

「訳アリ何だよ」

「我々は必ず、聖地を取り戻す」

「聖地つて、あのテーブルシティのことか？」

「ミロスの丘と呼べ！！」

歩きながら、青年は肩越しに振り返って言った。

「クレタ側のポロス山や、聖なる丘は、元々は俺達、ミロスの民の物だつたんだ」

「なら、何で手放したりしたんだ？」

「知らないのか？ミロスは、力づくでクレタに併合されたんだ！」

力づく、という言葉聞いて、銀時は眉をひそめた。

「クレタに併合されてから、ミロス人は数百年間、酷い仕打ちを受けてきた。そんなミロス人に近付いてきたのが、おまえらアメストリスだ」

青年は崖を見上げ、続けた。

「アメストリス人を引き入れてすぐ、谷は戦場になった。俺の両親は、その時死んだ」

銀時とエドは顔を見合わせると、頷きあった。

ブチッ

エドは甲剣を使い、青年を縛っていた縄を切る。

「訊くんじゃなかったよ」

「どの世界でも、似たようなことはあんだな」

話しながら、銀時は青年に銃を返す。

「……………」

青年は無言で受け取った後、近くの建物に案内した。

「ペドロ！ジュリアが帰ったのは本当か！？」

中に入ってすぐ、近くの部屋から老人が顔を出した。

「ああ、本当だ」

「ほら！言ったとおりじゃん」

ペドロが答えると、傍らにいた子供達が言う。

「ん？おおっ！！」

老人は、エドの右腕の機械鎧を見る。

「素晴らしい…！」

「ちよっ、何だよ、このじいさん！」

「わしはゴンザレスじゃ！この腕はどこで、誰が作った！？」

「オ、オレの幼なじみだけど…」

「よく見せてくれ！」

ゴンザレスはエドを部屋に連れ込むと、椅子に座らせ、腕を吟味する。

「じいさん、機械鎧屋だったのか…」

部屋には、作り掛けの機械鎧や、機械鎧装備者が何人かいた。

「珍しい形じゃ…」

「何？おまえの腕って、珍しいの？」

エドの機械鎧しか見たことがない為、銀時は不思議そうに訊いた。

「製作者や地域によって、機械鎧の形や性能は違うからなあ……」

「ゴンじい、俺の途中」

「おお、すまん」

ベッドに座った男に呼ばれ、ゴンザレスはエドから離れる。

「早く付けてくれよ」

男には左足が無く、すぐに動きたいからか、急かした。

「あれって、痛エんだろ？」

「…うん。めちゃくちゃ痛い」

「おい、おまえらも手伝え」

「え？」

ゴンザレスに言われ、3人は男を押さえる。

「神経繋ぐ。しっかり押さえとけよ」

痛みがどれほどのものかを知っている為、エドは顔をしかめながら

男を押さえる。

「行くぞ」

「お、おう」

ガチツ！

「ぐあああつー！ー」

「じいさん、少し荒っぽいぞ」

エドは、悲鳴を上げる男を見る。

「フン、リハビリ中に何度も壊しおつて。しまいには立てなくなるぞ、金は出来てからでいい」

「すまねえゴンじい」

「怪我人が多いな」

部屋には、機械鎧装備者の他に、あちこちに怪我をした者が何人もいた。

「落盤事故が多いからな」

先程の男が、ベッドに横になったまま言った。

「落盤？」

「クレタが、地熱プラントを建設中だ。仲間が端金で駆り出されてる」

別の男が指差し、銀時は外を見る。

「なるほどな。この谷は、2つの国に板挟みって感じなのか」

2つの崖を見比べ、改めて崖の高さを思い知る。

「あのジュリアってのは、あんな高さを登ったのか」

「彼女は戦士だ。崖を恐れる人じゃない！」

ペドロが言った時、笛のような音が聞こえた。

「秘密警察だ！」

「何!？」

「ペドロ、こつちだ！」

ゴンザレスは、床にある抜け穴を指差す。

ペドロは抜け穴の中に、素早く入った。

「じいさん、達者でな！」

エドは、抜け穴に入る前に声を掛けた。

「その機械鎧、大事にな」

「ああ…！」

力強く頷くと、エドと銀時は抜け穴に入り、走った。

「こつちだ」

抜け穴から出ると、幾つもの穴が開いた斜面が広がっていた。

「洞窟のアパートだな。まるで」

「この向こうだ」

歩き出そうとした時、反対側の崖から銃声と、何かが落ちる音が響いた。

「何だ、今の音!？」

「誰かが、崖を登ったんだ」

「何!？」

「アメストリスに撃たれた…!!」

エドと銀時は驚愕する。

崖を登っただけで、撃たれるのか。

「少しでも崖を登れば、国境を越えたことにされちまう。向こうの言うがままだ！」

「ぐおおおっ！…！」

叫び声に振り向くと、傷だらけの狼キメラが迫って来た。

「あいつ…！」

「ちっ…！」

銀時とエドは刀を抜き、ペドロは発砲する。

「臭いはこっちか…！」

狼キメラは、洞窟の中に駆け込んで行った。

「待て…！」

「銀時、鋼の…！」

追い掛けようとした時、刀を持った高杉達が、斜面を走って来る。

「おまえら…！」

「さっきの奴はどうした？」

「あっちに行った！」

エドは洞窟を指差すと、血を流したペドロに気付いた。

「ペドロ！おい、大丈夫か！？」

傷を見ると、かなり深いものだった。

「ミ…ロスに、栄光…あれ……」

「…っ！」

ペドロは息絶え、エドは悔しそうに息を漏らす。

「あなた達は、あいつを追って！この人は私が…！」

刹那は両手を合わせ、手をペドロに翳す。

「神の力…、使えんのか？」

「使える…。だから、早く追って！」

「よし、俺は刹那と一緒に行く。おまえ達は先に行け」

桂は刹那の隣に行き、後から行くと言う。

「何でてめエが残んだ!？」

「高杉さん、ここはヅラさんに任せてお」

「ドチビコンビ、行くぞ…！」

先に走り出した銀時が言い、エドと高杉は走りながら同時に叫んだ。

「誰がドチビコンビだ…！」

第12話 嘆きの丘（後書き）

エド

「ドチビコンビはねえだろ！」

銀時

「ああ言えばすぐ来るだろ。…キラッ」

高杉

「効果音付けんな。しかも口で」

第13話 狼カメラ来襲（前書き）

銀時

「そついや、今の俺達とエドっていくつ位年離れてんだ？」

エド

「オレは15で、アルは14だ」

真理

「えつとね、銀時達は16歳で、刹那は14歳らしいよ。あ、これ
『教えて!! 真理ちゃん』でやれば良かった…」

第13話 狼キメラ来襲

「あいつ、どこに行った!？」

洞窟の中は入り組んでおり、狼キメラの姿もなかった。

「こつちだ」

高杉が、一つの道を指差す。

「何でそつちなんだ？」

「あいつは、刹那に斬られて傷を負ってる。……血の跡がある」

薄暗い洞窟の中に、奥へと続く血の跡があった。

「ほんとだ!」

「つーか、刹那凄エな」

「あいつに傷を負わせたのは、刹那だけじゃねエよ。俺が焼いて、ツラが岩落つことしたりした」

「それだけ攻撃を受けて、ダメージはたったあれ位かよ……」

エドは、一瞬見えた狼キメラの姿を思い出す。

肩の近くの傷と、たてがみが少し焦げている位だった。

「とにかく追うぞ！」

3人は血の跡を辿り、洞窟の奥に向かった。

同じ頃、洞窟内になるジュリアの自室では、アシュレイとジュリアが食事をしていた。

「勉強してるんだな」

部屋の本棚に、様々な本があった。

「クレタやアメストリスに潜入する度に、少しずつ集めたの」

ジュリアは民族衣装に着替えており、アシュレイはコートを脱いでいる。

「でも、使えるようになった錬金術は、ほんの少しよ」

「そっか」

「傷…。大変な目にあつたのね」

ジュリアは、アシュレイの首もとの傷を見る。

「あ、ああ…」

傷に触れるのを見て、ジュリアは食器を片付け、錬成陣の描かれた布を広げる。

「両手を出して」

「え?」

「いいから」

アシュレイは錬成陣の上に両手を出すと、ジュリアを自分の両手を翳す。

すると、緑色の光が輝き、アシュレイの小指の傷が治った。

「…!ジュリア、おまえ…」

「仲間に教わったの」

一息つき、ジュリアは布を片付ける。

「あたし、父さんと母さんの錬金術はまだ使えないけど、これだけは覚えたのよ」

「そうか…。いろいろ、苦労させたな」

ジュリアは小さく笑い、髪をかきあげる。

「兄さん。これ、覚えてる?」

左耳に付けている、小さな銀色のイヤリングを見せる。

「兄さんが、私の為に作ってくれたのよ」

数年前、一家がまだ谷に住んでいたある夜、ジュリアはアシュレイと一緒にゴミを拾っていた。

「ん？」

持っていたランプの光に、何かが反射する。拾ってみると、金属製の蓋だった。

「わあ〜」

蓋は、綺麗な細工がしてあった。

「お兄ちゃん、見て！」

ジュリアは、蓋をアシュレイに見せた。

「ちょっと待ってて」

アシュレイは、足元に錬成陣を描いた。

「置いて」

錬成陣の中心に蓋を置き、アシュレイは錬成陣に触れた。

「えいつー！」

緑色の光が辺りに輝き、光が消えると、一組のイヤリングが出来ていた。

「あ……」

アシュレイは、作ったイヤリングをジュリアの耳に付けた。

「どっ?」

ジュリアは嬉しそうに、その場で回って見せる。

「そっだ」

右耳のイヤリングを外し、アシュレイの右耳に付けた。

「ふふつ。……あ」

アシュレイは、付けたイヤリングを外してしまう。

「ほら」

外したイヤリングを、ジュリアに差し出す。

「あたし、こっちがあるから、お兄ちゃんそっち付けて!」

アシュレイはイヤリングをポケットにしまうと、ゴミ拾いを再開する。

「もう、お兄ちゃんたらーっ!」

「お揃いで付けたかったのに」

ジュリアはイヤリングに触れながら、その時のことを話した。

「そんなこともあつたかな…」

「私、兄さんにまた会えて、すっごく嬉しいの。だから、兄さんとまた一緒に」

すると突然、遠くから何かの唸り声が聞こえた。

「来たか！」

その声は、アル達のいる牢屋にも聞こえていた。

「何だ！？」

トニは驚き、牢屋から離れた。

「ボク達も行こう！」

「ウン！」

アルと神楽は、自力で手枷を壊す。

「あ、ちょっと…これ壊してくれる？」

2人と違い、新八は自力で手枷を壊せない。

「そんなんも壊せないアルか？だから新八は新一になれないネ！何だよ、八つて！」

「今関係ねーだろ！！」

「神楽。新八の手枷、壊してくれる？ボクは、格子を壊すから」

「分かったネ…」

神楽は面倒くさそうに言い、手枷を壊す。

「さ、行こう！」

3人は牢屋を飛び出し、声のした方向に走った。

「見つけたぞ！」

「待ちやがれ！！」

血の跡を辿り、エド達は狼キメラを見つけ、追い掛けた。広間のような所に出て、狼キメラは逃げるのを止める。

「よくもペドロをやってくれたな！許さねえ！！」

エドは両手を合わせる。

すると、別の洞窟から、アシュレイが出て来るのが見えた。

「脱獄野郎！？」

「何で、ここにいんだ！？」

銀時と高杉は、アシュレイの姿に驚く。

「兄さん！」

アシュレイの後ろから、アルと新八、神楽が走って来る。

「アル！」

「新八、神楽！無事だったか！」

3人の無事な姿を見て、エドと銀時は安堵する。

「銀ちゃん！ツラとバニラは！？」

「後から来る。それより、こいつをなんとかすんぞ！」

その場にいた者達は、狼キメラを囲む。

「フツ、ゾロゾロと…！」

狼キメラが呟くと、黒コウモリ達は、銃を撃ち出す。

「くらえっ！」

エドは錬金術を使い、地面から突起を出す。

「はあっ…！」

狼キメラは突起を砕き、砕いた塊を、黒コウモリ達に向かって投げた。

「うわっ！」

投げた物の一部が、壁にあったランプに当たり、地面に落ちて燃え上がった。

「ジュリア！」

炎がジュリアに迫り、アシュレイは素早く、氷で消した。

「見つけたぞお……！！」

狼キメラは、アシュレイを見てニヤリと笑う。

「やっぱ、あいつを狙ってんのか！」

「そうみたいだ」

狼キメラの言葉を聞き、銀時とエドは改めて思った。

「ぐっ！！」

黒コウモリ達が放った銃弾が、狼キメラに命中する。

「目障りだ！」

岩を投げつけ、何人かが持っていた銃を落とす。

ジュリアは、落ちた銃を受け止め、透かさず撃った。

「動くな！」

アシュレイも電撃を放ち、狼キメラを攻撃する。

「ちいつ…!!」

狼キメラは、ジュリアに近付くと、持っていた銃を弾き、ジュリアの前に立ちはだかる。

「あ…!!」

「ジュリアから離れろ!!」

「大人しくしていれば、周りを巻き込まずにすむものを」

狼キメラは不敵に笑い、アシュレイに言った。

緊迫した空気の中、その様子を見ている者がいることに、誰も気付いていなかった……。

第13話 狼キメラ来襲（後書き）

真理

「だいたい半分位になったね」

銀時

「もう一つの話も早くやれよな。作者」

真理

「後で言っとくよ」

第14話 鮮血の星(前書き)

エド

「なかなか進まねーな」

アル

「何話続くのかな？この小説」

第14話 鮮血の星

「見つけた…」

どこかの場所で、覆面のようなマスクを被った男が呟いた。

「西の大洞窟だ。新たな合成獣を2体向かわせる」

「はっ！」

男は部下に命じた。

建物から、すでに狼キメラが2体飛び出して行った。

その建物は、クレタの監視塔だった。

「おまえからすれば、仲間でも何でもないんだろうがな！！」

狼キメラは、ジュリアの前に立ちはだかったままアシュレイに言った。

「…ふんっ」

アシュレイは右の手のひらを、狼キメラに向けた。

その際に、銃を持った男に目で合図をする。

ドンッ！

男は銃を撃ち、同時に銀時は突起を錬成した。

「ちいつ!!」

狼キメラは弾丸を避け、突起を壊すと、銃を持った男に投げつけた。

「うわっ!」

突起をぶつけられ、男は避けた拍子に、銃の引き金を引いてしまう。放たれた弾丸は、ジュリアの真上の岩に当たり、落ちてくる。

「危ねえ!」

ジュリアに向かって落ちる岩を見て、エドは声を上げた。

背後は壁、正面には狼キメラがおり、避けることは出来そうにない。そう思った時だった。

「!?!」

落ちた岩を、狼キメラが受け止め、ジュリアから庇う姿があった。

「あいつ…。何で庇ったんだ…!?!」

狼キメラの姿を見て、銀時とエドは驚く。

「アル!」

エドはアルに声を掛け、地面に両手を当てた。錬成反応が起こり、ジュリアの足元が沈む。

「きゃっ…!」

バランスを崩したジュリアを、アルが素早く受け止めた。

「アルさん！」

「アルでいいよ！」

ジュリアを抱きかかえ、アルはエド達の近くに行った。

「くらえ！」

ジュリアが解放された為、皆、攻撃に専念することが出来た。エドは透かさず、突起を錬成する。

「ちっ…！」

狼キメラは突起をかわすが、高杉が放った炎に焼かれる。

「がはっ…！！！」

炎に包まれた狼キメラにとどめを刺すように、アシユレイは電撃を放つ。

「ぐぎやあああっ…！！！」

悲鳴を上げ、狼キメラは倒れ、姿が大柄な男に変わり、息絶えた。

「死んだか…！」

銀時は狼キメラを見下ろして呟くと、遠くから声が聞こえた。

「みんな！」

「無事か!？」

横穴から、刹那と桂が入って来る。

「桂さん、及川さん！」

「遅かったな」

高杉が訊くと、刹那は頷く。

「来る途中で、他にも倒れてる人がいたから、その人達も助けてたの」

「！倒したのか…」

桂は狼キメラを見る。

エドは、刹那に声を掛けた。

「刹那さん、ペドロは？」

「大丈夫。あの人も助かったわ」

「そうか。良かった…」

「これが狼キメラ…」

民族衣装を着たミランダ達がやって来る。

アシユレイは、狼キメラを見て言った。

「俺の両親を殺した奴らの仲間だ」

「こいつは、臭いを追って来たらしいぞ。つまり、あんたがいる限り、こいつらはまた来るってわけだ」

すれ違い様に聞いた、狼キメラが言っていたことをエドは思い出す。

「この男に協力を得るのは止めましょう！」

アランは警戒した様子で、ミランダに言う。

「俺なら、すぐにでも出て行くさ。ただし、ジュリアと共にな」

「私は…っ」

アシユレイを見つめた後、ジュリアは俯く。

「ここに残るわ」

「こんな連中と、一体何が出来ると思うんだ!？」

「出来るとかじゃないわ!やらなきゃいけないの!?!」

ジュリアは強く言い、アシユレイを見据える。

「真理の扉が駄目なら、聖地の錬金術を手にする!聖地の…『鮮血の星』を」

「鮮血の星？」

聞いたことの無い言葉に、銀時達は反応する。

「化け物だ！」

1人の男が、横穴を指差した。

「新しいのが2匹、こっちに向かっている!！」

「ほら、言わんこっちゃねえ」

エドは両手を上げて呟いた。

「みんな！奥へ!！」

ミランダは叫び、洞窟の奥へ走る。

その場にいるわけにもいかず、エド達もついて行く。

「は!?!行き止まり!?!」

走った先には、地底湖があった。

「飛び込むのよ!！」

「うええ!?!」

ミランダが言うと、銀時は嫌そうに声を上げた。

数分後、2体の狼キメラが地底湖の前に来る。
2体は臭いを嗅ぎ、顔を上げた。

「くそっ！」

「臭いが途切れた！」

「…逃げられただと？」

狼キメラの声を聞き、監視塔からマスクの男が呟く。

「地下水脈に入ったようです。しかしあの男、何故クライトン夫妻の錬金術を…？」

部下の1人が、振り返って言った。

「殺すには惜しい男だ」

「ハーシエル中佐。掘削作業、終了しました」

別の部下が言い、ハーシエルは頷いた。

「よし、次の工程に移れ」

青白く光る地底湖を、全員流木に掴まって進む。

「また、助けてもらっちゃったわね。なんとお礼を言ったらいいか…」

ジュリアは泳ぎながら、アルに言った。

「気にしないで。ボク達は、ボク達の事情でここまで来たんだ」

「事情？何か用があったの？」

「信じてもらえないかもしれないけど、ボク達は別の世界から来たんだ」

「別の…世界！？」

突然の物言いに、ジュリアは驚く。

「私達からすれば、少し違う過去の世界…って言えばいいかな」

横から刹那が言う。

髪が水に濡れないように、一纏めにしている。

「帰れるの…？」

「まだ分かんないけど、必ず帰れると思う」

「そう…。ところで、その耳飾り綺麗ね」

ジュリアは、刹那の右耳に付けている、青い雫の形のイヤリングを見る。

「あ、これ？」

刹那はイヤリングに触れる。

「これは、兄から貰った、母の形見なの」

「お母さんの形見？」

「うん…」

「そっか…。けど、あなたにも、お兄さんがいるのね」

刹那は小さく頷き、小声で「もう遭うことはないと思っけど」と、
呟く。

「え……？」

「アルーツ！」

「おい、置いてくな！」

後ろを見ると、エドと銀時がかなり離れた所にいた。

「しょうがないな。兄さんは機械鎧だから、重くて進みづらいんだ」

「銀ちゃんはただのカナヅチだけどナ」

アルと神楽、新八は後ろに下がり、2人の近くに行った。

「ジュリアー！先に行ってるわよーっ！！」

「はいー！」

ミランダに返事をし、ジュリアは前方にいるアシュレイを見つめた。

「兄さん……」

しばらくして、反対側の岸にたどり着き、エドは濡れた機械鎧を念入りに拭く。

「あー、やっと拭けた」

足の機械鎧を拭き終わり、刀に手を伸ばす。

「次はこっちだな」

「錆ないよう、手早くな」

桂は、自分の刀の水分を拭き取りながら言った。

「高杉、火！ちよつと寒イ」

「俺はマツチか！！」

高杉は、透かさず銀時に言い返す。

「いいじゃん。早く火イ出せよ。それとも、水に入ったせいで出せねーのか？」

「てめエ、火だるまにされてエか…！？」

「いい加減にしろ、おまえ達。ジュリア殿が待っているだろう！」

見かねた桂が止めに入り、2人は渋々引き下がった。
ここで時間を潰している場合ではない。

「こつちよ」

ジュリアは先に歩き出し、その後を追った。

「こんな奥までアジトなんですか？」

新八が訊くと、ジュリアは「ええ」と答えた。

「この奥よ」

「な、何アルか、これ…！」

神楽は、思わず足を止めた。

壁際に幾つもある穴に、無数の頭蓋骨があった。

「お墓よ。ここは昔、ミロス人の住む街だったの」

「ここが、街だと…！？」

桂は信じられないというように、辺りを見る。
ジュリアは続けた。

「400年も昔の話だけだね」

「400年前…」

「クレタ人は、私達の先祖をこの谷に押し込めた。不老不死の石を探す為に」

「不老不死の石…!?!」

「それって、真つ赤な石じゃないのか!?!」

不老不死の石と聞き、エドは声を上げる。
その石に心当たりがあったからだ。

「知ってるの!?!」

「ボク達は、『賢者の石』って呼んでる」

「賢者の石…。詳しく訊かせて!さ、こっちよ」

ジュリアは、洞窟の奥へ案内した。

第14話 鮮血の星（後書き）

銀時

「あの地底湖って、何で光ってたんだろっな」

エド

「さあ？」

神楽

「でも綺麗だったネ！」

第15話 陰惨な歴史（前書き）

『教えて！！真理ちゃん』

真理

「このコーナーは始めて、遂にあたしの時代が来たよ！！」

銀時

「何張り切ってんだ？」

真理

「ふふふ。愛華蝶さんからの質問。『真理の姿は白いの？それとも作者と同じ顔？』」

エド

「おまえって、オレの真理に近くなかったか？」

真理

「はい、お答えします。基本あたしの姿は真っ白で、左腕だけがありません」

エド

「ありました？」

真理

「ちよつと前までは、作者の左腕を持ってたけど、今は真っ白だよ」

アル

「作者も扉を開けたの」

真理

「作者も昔、バカなことしたんだよ」

第15話 陰惨な歴史

洞窟の奥に行くと、広間のような所に出た。

「来たわね」

ミランダは、ジュリア達が到着したことに気付いた。

「あなた達には礼を言います。ジュリアを助けてくれてありがとうございます」

「ここは…?」

刹那は辺りを見回して訊いた。

「私達のアジトの最奥部。『鎮魂の間』よ」

「鎮魂って何アルか?」

「魂を鎮めるって意味だよ」

話の邪魔にならないように、刹那が小声で説明した。

「かつて、谷を掘ったミロス人。そして、戦で死んだミロス人達の魂を鎮める場所よ」

「谷を掘った…!?!?」

「こんな大きな谷を!?!?」

桂と新八は、思わず声を上げる。

「聖地の周りには、今程深い谷はなかった。けれど、クレタ人達によつて、深い谷が掘られた」

「谷を掘つた理由つてのは…」

先程のジュリアの話を思い返し、銀時はぼつりと言つ。
ミランダは頷いた。

「我々ミロス人は、神の山・ポロスを拝める場に国を作り、そこを聖地とした。その聖地には、不老不死の石が埋まっているという伝承がある」

「…やっぱりな」

「我々は、その石を『鮮血の星』と呼んでいる」

「その鮮血の星という物を掘り出す為に、この深い谷が掘られたという訳か…」

桂は腕を組んで呟く。

テーブルシティの周囲にある谷は、そんな経緯で出来たのか……。

「この400年の間、鮮血の星が幾つ掘り出されたのか分からないけど、クレタ側に、鮮血の星が渡つたという記録は残っていない」

ミランダは、正面にある壁に触れる。

壁には、図形らしきものと、円形の何かが彫られている。

「このレリーフには、谷を掘ったミロス人達の名が刻まれているわ」
広間の隅では、アシュレイが刃物を使って、手のひらに錬成陣を刻んでいる。

先程、地底湖に入った時に、錬成陣が消えてしまったようだ。

「クレタ人が去った後、我々に残されたのは、廃墟とこの深い谷だった。奴らは今でも、崖の上から我々を支配している……」

「ミロス人は、錬金術を嫌っている。鮮血の星と一緒に、過去の悲劇を思い起こすから」

ジュリアは、ぽつりと言った。

「でも、過去を遠ざけていても何も始まらない。ミロス人は、自分の足で崖を這い上がらなきゃいけない！その為に、大いなる力……鮮血の星が必要な……！」

「ジュリア、聞いて欲しいんだ！」

アルは少しためらったが、思い切って言った。

「鮮血の星が、アメストリスで言う賢者の石なら、その材料は……」

「複数の、生きている人間の命だ」

アルの言葉を引き継ぎ、エドは静かに言う。

「人間の……命？」

ジュリアは呆然と呟き、エドは「ああ」と頷く。

「賢者の石なんてとんでもねえ。凝縮された、限られた命を使うんだ」

完全な物質と言われているが、それは伝説であり、実際の賢者の石は、使用し続けられれば消滅する。

「賢者の石どころか、欲が生み出した血まみれの石だ！」

「それが…聖地の………」

衝撃の事実にも、ジュリアだけでなく、ミランダや黒コウモリ達も動揺する。

「だから両親は、その秘密をクレタ軍から隠そうとしたんだ」

錬成陣を刻み終えたアシュレイが、ポケットに手を突っ込んで言う。

「我々ミロスの神話も、血みどろということだ」

「そんなの……」

ジュリアはその場に座り込んだ。

「そんなの、使えないじゃない…！あたし達、今まで何の為に……」

失意と絶望から、ジュリア泣き崩れた。

「ジュリア…」

アルは、どう声を掛けていいか分からなかった。

「…ふう」

岩陰で、負傷者に治癒錬成を行っていた、左顎から口の上に傷のある中年の男が息をつく。

「バタネン！」

ミランダが声を掛けると、心配無い、と答えるようにバタネンは片手を上げた。

「ジュリア」

バタネンは立ち上がり、ジュリアを見る。

「鮮血の星が、人の命で出来ているというなら、その命、我々の為に使わせてもらおうじゃないか！」

「な……！？」

「ちょっと待てよ！あんたらそれでいいのか！？」

石になっても、『人間』として認識しているアルとエドは、納得が出来ない。

バタネンは、アシュレイの前に行く。

「アシュレイくん。よく、この谷に戻ってきてくれた」

「よくそんなことが言えるな」

アシュレイは目を合わせずに言う。

「確かに。我々は、君達一家を裏切り者呼ばわりしたことを、詫びなければならぬ」

一度頭を下げ、バタネンは続ける。

「だが、君は戻ってきてくれた。その力を貸して欲しい」

「自分達が、どれほど無駄な血を流そうとしているかが分からないのか!？」

苛立ちをぶつけるように言うと、バタネンは諭すように答えた。

「分かっている。分かっているからこそ、力が必要なんだ。アシュレイくん。人にはね、自分の命と引き換えにしても、手に入れたいものがあるんだよ」

「おいジュリア!」

エドが叫び声に近い声で呼ぶと、ジュリアはビクツと顔を上げる。

「人の命を犠牲にして聖地を取り戻して、それであんた幸せになれるのか!？」

「そんなこと分かっている……。でも!あたし達には、他に方法が無い……!!」

ジュリアは涙目でエド達を見つめた。

「あなた達のいるアメストリスは強いから、侵略されることも無い！いつ殺されるか、怯えることも無い！でも…あたし達は違うの！」

必死に言うジュリアに、エド達は言葉を返すことが出来ない。
銀時らは、最後に言った言葉に反応する。

「我々は長年、2つの大国により、常に死の危険にさらされている。この歴史に終止符を打つには、大いなる力が必要です。…あなた達の忠告には感謝します」

ミランダは毅然として言った。

「…分かった。けど、これだけは覚えておいてくれ。オレ達は、こんな方法は認めない」

エドは踵を返し、銀時達に「行こう」と呟いた。

「兄さん…」

アルは呼び止めようとするが、この場に残っても何も出来ないと感じ、ジュリアを一瞥してから後を追った。

「おい、待て！」

「放っとけ」

追い掛けようとしたトニを、アシュレイが止める。

「あの連中は、どうせ何も出来やしない」

アシュレイはジュリアの前に行き、肩に手を置いた。

「ジュリア。おまえの夢、俺が叶えてやる」

「え…？」

「聖地を取り戻したら、また谷で一緒に暮らそう」

「！兄さん…」

鎮魂の間を後にし、8人は洞窟を進む。

「自分の命と引き換えだ！？そんなんじゃ、いつか自分達を滅ぼしちまう！！」

「でも、あの人達、どうやって鮮血の星を探すんだろう？」

苛立つエドに、アルは疑問を口にする。

「あいつらの言ってた、『大いなる力』ってやつを確かめる必要があるな」

「それなら、この人数で戻るの目立つ。また、別れて戻った方がいいな」

銀時が言うと、桂が提案する。

「じゃあ、おまえらはガキ共と行け。元々、そいつらを捜しに来たんだろ？」

高杉はエドと銀時に、アル達を指差して言った。

「でも、目立つんじゃないか？」

「こつち側から行けば、そんなに目立たないと思うよ」

刹那は目を閉じて、横道を差した。

「それに、日も暮れてきてるし」

「なら、見つかりにくいだろ」

エドと銀時は頷き、テーブルシティで落ち合うことにして、一旦別れた。

「出口だ…!!」

外に出ると、辺りを薄暗かった。

栈橋のような道を走り、登り易そうな崖を探す。

「あれ？何ですかね？」

「人が集まってるネ」

途中で、人だかりが出来ているのを見つけた。

「おお、あんちゃん達」

振り返ると、花の入った籠を持ったゴンザレスがいた。

「！じいさん」

「良かったら、花をやってくれないか？」

その一言で、何が行われているのかが分かった。

「これって、お葬式…」

新八はぽつりと呟く。

祭壇のように飾られている場所に、遺体が安置され、人々のすすり泣く声が聞こえた。

「今日死んだ者達だ。ティアはゴミ拾い中に怪我をし、アニタは子を産んで、産まれた子と共に。そしてルシオは、崖に手を掛けて撃たれた」

「崖に手を掛けて撃たれたんですか…！？」

「たったそれだけで!？」

ゴンザレスの話聞き、新八と神楽は驚く。

「それが、この谷の日常じゃ……」

「そんな…。みんな、まだ若いのに」

「おい、あいつらアメストリス人じゃないのか？」

「何でおまえらがここにいるんだ!!」

エド達の姿を見て、ミロス人の男達が言った。

「黙れ!この子達は違うんだ」

ゴンザレスは、男達を窘めた。

「すまん。アメストリス人をよく思わない者が多いんじゃない……」

花を供えた後、祭壇に火が付けられ、皆、黙って炎を見つめる。

「ゴンじい!」

1人の少女がゴンザレスに走り寄る。

「カリナ……」

「これ、ジュリアに渡して」

カリナは小さな腕輪を手渡した。

「ティアと一緒に作ったの。お守りなの……」

「分かった。必ず渡す」

「ありがとう……」

と、エドは人だかりの中にペドロの姿を見つける。

「ペドロ、助かったか！」

「ああ。あの黒髪の少女のおかげで助かった」

その様子を見て、エドは安堵する。

「これで、またミロスの為に戦うことが出来る」

「何言っただ！せっかく助かったのに、命を粗末にすんな！！」

「粗末ではない。ミロスを救う為なら、命は幾つあっても足りない」

「刹那は、そんなことさせる為に、てめーを助けたんじゃないぞ！！！」

銀時もエドと同じように声を上げた。

「あの少女には感謝している。だが、聖地を取り戻すことが、我々の目的だ……！！」

強く言うペドロに、何も言い返すことが出来なかった。

その場を後にし、登り易そうな崖を見つけ、全員黙って登った。

「あ……。まだ、暗くなってなかったアル」

崖を半分以上登って、神楽は遠くを見た。

谷にいた時は分かりづらかったが、日は沈んでいなかった。

「見るよ。谷は、もう真っ暗だ」

銀時は谷を見下ろす。

谷は暗く、祭壇を燃やす炎が遠くからでもよく見えた。

「ミロスの人達は、ずっと、この暗い空を見上げてきたんですね…」

「このままじゃ、また谷に血が流れる」

黒コウモリ達やペドロの言葉を思い返し、エドは呟く。

悲劇が繰り返されるのは明白だった。

「錬金術は万能じゃない。大いなる力なんか頼っちゃ駄目なんだ」

アルはぽつりと言った。

錬金術を使うことの出来ない新八と神楽でも、そう思えた。

「行くぞ」

谷をもう一度見てエドは言い、再び崖を登り始めた。

第15話 陰惨な歴史（後書き）

真理

「ちなみにね、銀時の真理は言わなくても分かると思っけど、右腕だけがあつた状態だったよ」

桂

「俺や高杉の真理は？」

真理

「外觀じゃ分かんないでしょ。視力とか足の筋力とかじゃ」

第16話 束の間の静寂（前書き）

真理

「映画の内容の半分位は来たよ」

銀時

「この後が、凄エことになるんだよな」

エド

「そつそつ」

第16話 束の間の静寂

「急ぎましょう。あの者達より先に、鮮血の星を見つけたのよ!」

場所を移し、ミランダは黒コウモリ達に言った。

「あんなガキ共に、星の在処が分かる筈がない」

アシュレイは話しながら、服を脱ぎ始める。

「クレタが探していた秘密は、これだ!」

アシュレイの左脇腹に、錬成陣のような刺青があった。

「それは…!?!」

「星の在処を記した『地図』だ。父は死の間際、自分の皮膚を剥がして俺に託した!」

刺青に触れると、地図は赤く発光した。

「あ、桂さん達が来たよ!」

テーブルシティの広場でエド達は、桂達を待っていた。桂達がやって来る姿に、アルが気付く。

「すまん、遅くなった」

「いいよ。オレ達も、ついさっき来たから」

駆け寄って来た桂に、エドは軽く手を振って言った。

「この後どうするの？鮮血の星を探す？」

刹那が訊いた。

鮮血の星を使わせない為にも、先に見つけるといっ手もある。

「それもするけど、まず先に、昼間にぶっ壊しちゃった駅を直そう
と思っ」

「エド、私お腹すいたネ」

話している途中で、神楽が言う。

「あ、俺も腹減った」

「考えたら丸1日、何も食べてませんよ」

確かに、列車から降りて今まで、何も食べていない。
エドも空腹だった。

「じゃあ、兄さん達は何か食べてきなよ。ボクは先に駅に行ってる
から」

「え？アルフォンスだけで大丈夫アルか？」

「結構酷いことになってると思うよ、駅」

緊急事態だったとはいえ、列車を脱線させ、構内をめちゃくちゃにしてしまった為、駅は酷いことになっている筈だ。

「だからさ。みんなが食べてる間に、少しでも減らしておこうと思っただ」

「…悪いな、じゃあ頼んだ」

エドが言うと、アルは頷いた。

「うん。兄さんも、凄い出費になると思うから、お金用意した方がいいよ」

「……そうだな」

アルを除いても7人と多いが、神楽の摂取量がハンパではないので、エドはかなりの出費となる。

「なんかオレ、団体行動すると必ず大出費するんだけど……」

「たまたまだろ、気にすんなって」

嘆くエドの肩を、銀時は軽く叩いた。

「気にするって……」

アルとエド達は、広場で別れた。

「鋼の兄弟と仲間が、谷から戻ったようです」

アメストリスの監視塔で、部下の1人がソユーズに報告した。

「セントラルではなく、こちらに戻って来るとは」

ソユーズは紅茶を飲みながら、報告を聞く。

「いかがされますか？」

「谷で何か探ってきたか……？」

「それと、マスタング大佐が、明日の夜、こちらにいらっしやるそうです」

「そうか……」

「うん……」

立ち寄ったレストランで、エドは手帳を見ながら唸る。

「どうしたの？」

「あのアジトにあったレリーフ、見覚えがあつてさ」

手帳を全員に見せる。

そこには、鎮魂の間にあったレリーフの図形が描き写されている。

「錬成陣…ではなさそうだな」

桂は凶形を見る。

螺旋状の円形に、点が幾つかあった。

「多分、この街の形だ」

「形？」

「じゃあ、その点は何なんですか？」

新八は食べる手を止めて訊いた。

逆に、神楽はずっと食べ続けている。

「これか？これは、塔か何かだと思っただけだし、明日にならなきゃ確かめようがないし」

日は暮れており、今日はもう確かめることは出来ない。

「エド、一応ここは過去なんだから、見覚えのあるモンとかなかったのか？」

銀時が訊くと、エドは少し考えてから首を振る。

「それが、かなり曖昧なんだよ。見たかもしんない、知ってるかもしんないって感じで」

でも、とエドは続けた。

「初めて見た気がしないのは確かだ」

そう言つと、皿の料理を平らげる。

「じゃあ、食い終わつたら、駅に行くか！」

「その前にエド、デザート頼んでいい？」

「すみませーん、おかわりー」

銀時は一応訊いたが、神楽は勝手に注文をしている。

「あー！！勝手に頼むな！！」

「あ、遅かつたね」

駅の構内では、アルが修復を続けていた。

「神楽が大量に食つて、銀さんがデザート頼んだりしたせいでな…」

「何頼んでもいいって言つてただろーが」

「だから！限度があるだろー！！」

エドは銀時と、しばらくギャーギャー言い合っていた。

「あの2人は、とりあえずほつとこつ…」

アルは呆れながら、2人を眺める。

「神楽ちゃん、僕達も手伝おう」

「ウン」

「ところでアルフォンスクン。どの位直したの？」

新八が訊くと、アルは暗い線路を指差す。

「あっちの線路はもう直したから、あとはこの駅だよ」

「よし、俺はこの辺りを直すか」

桂は崩れているホームを見下ろした後、近くで言い争っているエドと銀時を見る。

「おまえ達、何時までやっている。少しは手伝え!!」

強めに言つと、2人は言い争うのを止める。

「そつだよ兄さん。こうなった原因の殆どは、兄さんが」

「だーっ!!分かった!分かったから、オレもすぐやる!!」

咄嗟だったが、ここまでやってしまったのは自分だと自覚している為、エドは錬成を始める。

「俺もやるか…」

「じゃあ、私もやる」

銀時がやるのを見て、刹那やろうとする。

「おい、おまえはこんな錬成出来ねエだろ？」

高杉が言つと、刹那はホームの隅を差す。
そこには、崩れた花壇があった。

「列車がぶつかったせいで、崩れちゃったみたい」

刹那が両手を翳すと、錬成反応の光が輝き、折れたり、潰れてしまつた花が元の状態に戻つた。

「花だけ戻しても、意味無エだろ」

両手を合わせながら、高杉はしゃがみ込み、花壇に手を翳した。
崩れていた花壇も、元に戻つた。

「あ…晋助さん、ありがとう。本当は、花壇も一緒に元に戻そうと思つただけど……」

同時にやろうとしたが、出来なかった。

「おまえの錬金術は、俺達とは違う。出来なくてもしょうがねエよ」

「うん…」

「こつちは終わったよ」

線路を直し、アルは声を掛けた。

錬金術師が何人も集まれば、修復は早かつた。

「明日、この街のことを調べる。それで、鮮血の星を探そう」

「探そうって、心当たりがあるの?」

エドは、レストランで話したことをアルに話す。

「じゃあ、その塔みたいなのを調べるんだね」

「ああ。全ては明日だ!」

第16話 束の間の静寂（後書き）

エド

「よし、ホテル行くぞ」

神楽

「明日の朝ご飯は、たっぷり食べるネ！」

エド

「だから、大量に食うなって！！」

第17話 街の秘密（前書き）

ホテルの食堂にて

神楽

「この世界の食べ物、やっぱり美味しいネ！」

エド

「少しは遠慮しろ……！」

第17話 街の秘密

翌朝。

軍のホテルから、8人が出て来る。

「あー、一杯食べたアル」

「だから、食い過ぎだつて!!」

満腹な神楽に、エドは透かさず言った。

「人の金だと思って!」

「国家錬金術師つて金持ちなんだろう? だったら、ちょっと位いいじやねーか」

「よくない!!」

人事のように言う銀時に、怒って言った。

「だいたいオレは、権力目当てに国家錬金術師になつたわけじゃねえし」

「自分達の身体を元に戻す為だつて」

刹那が呟くと、エドとアルは頷いた。

「元に戻る可能性を求めて、兄さんは国家錬金術師になつたんだ」

「軍の狗だのなんだのと、いろいろ罵られたりしたけどな」
以前のことが、今は再びそう呼ばれるような状況だ。
すると、神楽はエドの前に来ると、手を出した。

「ん？」

「お手」

「何でだよ！！」

「犬って呼ばれてたんでしょ？だからお手！お座り！」

「その犬じゃねえよ！！」

（遊ばれてる…）

エドと神楽以外の6人は、そう思った。

「……で、レリーフにあった点の位置を調べるわけだけど」

しばらくしてから、エドは本題に入った。

「広いからさ、二手に別れて調べた方がいいと思ったんだけど」

「じゃ、万事屋はアルフォンスくんと行くぞ！」

銀時はそう言いながら、アルの腕に手を置いた。

「え？ボク？」

「エド、おまえは、そいつらと行け」

「銀さん！何で勝手に決めてんだよ！！」

「地の利が少しはある奴が、1人いた方がいいだろ？」

「地の利って…、曖昧だって言っただろ」

「でも兄さん。この街は、見た目程道が複雑じゃないし、調べるのは難しくないと思うよ」

確かに、独特の地形で出来た街だが、道は複雑ではない。

「そう…だな。難しくはないか」

「早めに調べた方がいいんじゃないか？あの者達は、鮮血の星を探して、必ずやって来るぞ」

桂は谷を一瞥する。

アジトでの状況から、黒コウモリ達がやって来るのは時間の問題だった。

「ああ、早くやろう。オレ達は南側、銀さん達は北側の塔を調べてくれ！」

「待ち合わせは、中央広場にしようよ」

アルは中央広場を指差し、その場所に決めると、二手に別れていっ

た。

一方、黒コウモリのアジトでは、全員黒装束に身を包み、襲撃準備をしていた。

「我々の目的地はここだ。陽動班は、アメストリス駐屯地を攻撃。連中の目を引き付け、その隙に監視塔を狙う」

アシュレイが作戦の内容を説明し、ジュリアは武器の補充をしている。

『こちら、シティのネズミ。いつでも準備出来てます！』

「よし、そのまま待機」

『はっ』

アシュレイは、街にいるスパイに無線で指示をした。

「ジュリア」

ミランダが声を掛けると、ジュリアは振り返る。その表情は、どこか不安げだ。

「私達…、鮮血の星を目指して、大丈夫かな…」

「あなたは錬金術師。星を使う力があるわ」

励ますが、ジュリアの表情は晴れない。

「ジュリア、あなたが示した道じゃない」

「ジュリア……」

部屋にゴンザレスが入って来る。

「ゴンじい……!?!?」

思わず立ち上がり、ゴンザレスの前に行く。

「どうしたの?ここは危ない所なのに」

アジトには、危険な場所や物が幾つもあり、一般の者達は立ち入りを禁止している。

「ルシオとティアが……」

俯き、肩を震わせる姿を見て、ジュリアはすぐに悟った。

「……そう」

部屋から出て、ジュリアはゴンザレスから話しを聞いた。シヨックのあまり、膝を抱え、顔をうずめる。

「これを。カリナから預かってきた」

顔を上げると、ゴンザレスは小さな腕輪を持っていた。

「カリナがティアと一緒に作った、お守りだそうだ」

腕輪を受け取り、見つめた。
3色の石が付いた、綺麗な腕輪だった。

「…ありがとう」

一度目を閉じ、息をついた。

「そうよ。あの子達の為にも、私は鮮血の星を手に入れなくちゃならない」

髪を団子状に纏め、腕輪を右腕に付けた。

「無理するなよ」

「……うん」

「やっぱり、塔の位置は違ったか…」

中央広場に集まり、エド達は塔の配置を確認し合う。

「なア、塔なんか調べて、意味あったのか？」

銀時は、塔を調べることの意味が分からなかったらしい。

「あるよ。アジトにあったレリーフは、計画図だ。鮮血の星を錬成する為の」

「そっぴや、星を錬成するのに、何で塔が必要だったんだ？」

高杉が呟くと、エドは「それだ」と続けた。

「谷を掘ったのは、クレタの奴らが伝承を鵜呑みにしたからだ。古代のミロス人は、塔を使って星を錬成してたんだ」

エドは手帳を開いて見せた。

最初に見せたページの反対側に、同じような図形が描かれている。

「左がアジトのレリーフ、右が実際の塔の配置だ」

「あれ？南側の塔が減ってますね」

「北の方は変わってなかったのに」

塔は、中央から南側に掛けて減っており、一つしか残っていない。

「昔あった塔を誰かが壊したのね」

「壊された塔に、何か秘密があるのか？」

桂が言うと、エドは首を振った。

「いや、壊された塔は関係ない。むしろ、力を一つに集める為に、塔を壊したんだと思う」

手帳の点…いや、南側の塔を指差した。

「南側の一点に」

「おい、こいつて…」

南にある塔にやって来たが、その場所に塔らしき物は無く、逆に見覚えのある場所だった。

「こんな所に戻って来るとはな」

そこは、アシユレイを追っている時に走り抜けた場所で、近くに壊されたパイプが見えた。

「塔なんて、どこにも無いネ」

「この建物の中、一応入ってみようよ」

近くにある建物を、アルが差す。

念のため、入ってみることにした。

「ただの教会みたいだな」

「おい、あれ見ろ」

高杉は天井を差す。

見ると、飾られている旗がなびいていた。

「風だ」

風の流れを見て、エドは壁を叩き、錬成する。

壁の向こうは、塔と、地下へと続く長い階段があった。

「ミロス時代の塔を、クレタの建物が囲んでる！」

建物の様子を見て、アルが言った。

「外の教会は、塔を隠す為のカモフラージュだったのか…」

「随分深いですね……」

銀時は塔を見上げ、新八は地下を見下ろした。

「この下、なんかごちゃごちゃしてる」

刹那は、波導で地下を見る。

「ごちゃごちゃ？」

「うん。街全体でも言えることなんだけどね」

「この街は、伝声管のパイプが幾つもある。それじゃねーのか？」

「どうだろう。複雑に入り組んでたから……」

エドの発言に、刹那は首を傾げる。

「とにかく、地下したに下りてみようよ」

階段を下りて行くと、信じられないような光景があった。

「地下に…街!？」

そこにあつたのは、打ち棄てられたように広がる街だった。

「何で、こんな地下に街が…!?!」

「ここは多分、ミロス人の街だ」

新八の問いに、エドは街を見回してから呟く。

「クレタ人は、鮮血の星を探す為に、ミロス人を谷にやった。その際、邪魔が入らないよう、街全部を地下に隠した、ってところだろう」

「でも、クレタ人が星を探す前に、領土拡大の為にアメストリスに土地を取られた」

エドの後をアルが引き継いだ。

「あれ？あそこの建物、扉が閉まってるネ」

神楽が、出入り口を塞いだ建物を指差す。

「どうやら、アメストリスにも、この秘密に気付いた奴がいたみたいだな」

出入り口を壊すと、そこにも地下へ続く階段があつた。

「まだ先があるみてーだな」

「お、燭台」

階段の近くに、蝋燭の付いた燭台が置かれていた。

「よし高杉、おまえの出番だ！」

「だから、俺はマッチか！！」

燭台を差し出す銀時に、高杉は透かさずツッコんだ。

「いいから火イ付けろよ。加減出来んだろ？」

「…なら、動くなよ」

高杉は両手を合わせ、指を鳴らした。

炎が飛び、蝋燭の芯に灯る。

「あつぶねーな！！顔に当たるかと思っただぞ！！」

「だから動くなっただろ」

「おい、その位にしろ！」

「そつだよ。星を探さなきゃいけないのに！」

桂と刹那が2人を宥めた後、階段を下りた。

しばらく行くと、扉があり、開けてみると六角形の形をした部屋に出た。

「ただの部屋みたいだな…」

「こんなに深い所でも、太陽の光って届くのね」

部屋は、かなりの深さにあるというのに、天窓から陽光が照らしていた。

「でも、何か特別なことに使われていた部屋、って感じがしますよ」

「新八。それ、結構あつてるかもしんないぜ」

エドは、出入り口の正面にあつた扉を開けた。その先には、もう一つ小さな部屋があつた。

「何かあるな」

部屋の中央に、石棺らしき物が置かれている。

「棺桶かな？」

「開けてみるか」

「ええっ？開けるのか!？」

石棺を開けようとするエドとアルに、銀時の声が震えた。

「よっ…と」

開けてみたが、中には何も入っていないかった。

「あれ？空だ…」

「空？」

顔を背けていた銀時は、石棺を見る。

「何だよ、脅かしやがって…」

「銀ちゃんビビってたアルかア〜?」

神楽はニヤリと、嫌らしく笑った。

「は!?!別にビビってねーし、何言ってるの!?!」

銀時と神楽のやり取りに呆れながら、エドとアルが石棺の蓋を戻した時だった。

ガシャン!!

「な…!?!」

2人の両手が、石棺と蓋の間に手錠のようにはまる。

「エド、アル!」

「君達でも駄目だったか…」

声のする方を見ると、出入り口に、ソユーズが数人の部下を連れて立っていた。

「その棺は、無能な錬金術師を捕らえる為、私が作らせた物だ」

「え?」

「ソユーズ！」

「君達なら、この街の秘密を解き明かすことが出来ると思ったんだが」

その話を聞き、エドはこの建物を見た時のことを思い出す。

「てめえか！賢者の石を探してたのは！！」

「この部屋に何かある、とまでは分かったのだがね…。あとは、ミロスのハエ共に期待するか」

「貴様のような輩に、賢者の石が使えとは思えんな」

石棺の後ろから、桂が言った。

「心配無用。賢者の石を欲しがる者など、ゴマンという。幾らでも金になる」

髪をかきあげ、ソユーズは石の使い道を言う。

『少佐殿！大変です！』

部屋にある伝声管から、憲兵の音が響く。

「何だ？」

『対岸より、複数のテロリストによる襲撃です！…！』

「ミランダさん達だ」

部下達は動揺し、アルは小声で呟く。

一方、テーブルシティに向かって列車に乗っていたロイとリザ、セントラルの憲兵達とウィンリイは、全員窓の外を見ていた。

「一個師団でも連れて来るべきだったか…」

あちこちから炎上する街を見つめ、ロイは重々しく呟いた。

第17話 街の秘密（後書き）

真理

「地下にある街を見て、作者は1期を連想したって」

銀時

「やっぱ、似たようなところ、あるんだな」

真理

「そう思った人って、いるのかな…」

第18話 日没の襲撃（前書き）

真理

「話はどんどん加速してくよ」

エド

「展開の速さは？」

真理

「映画と同じか、少し遅い位？」

第18話 日没の襲撃

「谷底の奴らめ…、自ら滅びの幕を上げるとは」

クレタの監視塔から、テーブルシティの様子を見て、ハーシエルは目を細めた。

「坑道に退避命令を出せ、グラーツ」

「はっ！」

グラーツは放送を流し、退避命令を出した。

「わざわざ、そちらから出向いて来るとは」

ソユーズは振り返り、小声で部下に言った。

「そいつらを片付けておけ。錬金術師と言えど、ガキだ」

部屋からソユーズが出て行くと、部下達は銃を向けた。

「エド、アルフォンス」

神楽が小さな声で呼び、後ろに目配せをする。
2人は頷いた。

「なあ、ちよっといいか？」

エドは憲兵達に声を掛けた。

「この街の地下には、こんな部屋が幾つもあるのか？」

「残念だったな。おまえらが、秘密を解き明かせる錬金術師だったら、全て見れたものを」

「ふーん。そりゃ残念…だ！」

エドが言い終わる直前に、桂が素早く石棺に両手を当てる。その瞬間、石棺が壊れ、エドとアルは自由になった。

「サンキュー、ツラさん！」

「ツラさんじゃない、桂だ…！」

すぐに言い返すが、エドとアルは憲兵達に向かって行った……。

街では、黒コウモリ達が飛び交い、あちこちから炎が上がる。その様子を、監視塔からソユーズは眺めていた。

「派手に挨拶などしなくとも、こちらはいつでも歓迎するといつのに」

すると、近くの伝声管がエドの形になり、エドの声が響いた。

『やい、ソユーズ…！今すぐそっちに行くからな…！』

憲兵達は、アルと神楽により、ボコボコにされていた。

「ぐぬぬ…！何をしている！さつさと錬金術師共を始末しろ…！」

叫ぶが、その間にエド達は、地下から脱出していた。

外に出ると、日は沈んでおり、銃を持った憲兵が何人もいた。一度、教会の陰に隠れ、この後のことを話す。

「秘密の部屋は、ここだけじゃないみたいだね」

「一つずつ確かめようにも、幾つあるのか…！」

アルとエドは、地下の部屋についてを話し合う。

「また、別れて探した方が良さそうね」

「新八、神楽。おまえらはヅラと行け。こいつ一人だと、心配だから」

銀時は桂を差して言う。

それに新八と神楽、桂は言い返した。

「いやアル！銀ちゃんと一緒に行くネ！」

「僕達は足手まといにはなりません！」

「俺一人では心配とは、どういう意味だ！？」

「おい、いつぺんに訊くな」

詰め寄る3人を下がらせ、銀時は新八と神楽を見る。

「おまえらが、足手まといだとは思ってねーよ。ただな」

少し間を置いて、桂を見た。

「こいつは、錬金術をあんま使ったことがねえ。いざって時に、何とかする奴が必要だからだ」

「フーかさ、オレとアルが、ツラさんと一緒に行った方がいいんじゃないかねえの？」

「そうだね。そっちの方が、ボク達のサポートも出来るし」

「でけー鎧と一緒にいる方が、逆に目立つと思うぞ。それに、エドは鋼の錬金術師だろ？顔も割れてんじゃないのか？」

確かに、日が暮れているとはいえ、目立たない姿ではない。

ただ、知らない者が見たら、鎧のアルを鋼の錬金術師だと思うのがほとんどだが……。

「銀時、そういうおまえも、十分目立つぞ。戦の時も、白夜叉の姿は目立っていたからな」

「ツラさん。それ、今関係ないんじゃない」

「いたぞ！錬金術師だ！！」

「やべ、見つかったか」

咄嗟に、先程言った通りに、新八と神楽は桂と逃げた。
他は、刹那は高杉と、エルリック兄弟は銀時と一緒に走る。

「どっから行くんだ？」

伝声管のパイプの上を走りながら、銀時はエドに訊いた。

「黒コウモリが下りて行く所を見つけて、先回りした方がいい！」

「でも、どこにいるか分かんないよ！」

「あっ！」

別のパイプの上を走り、少し先に行く刹那が立ち止まった。

「黒コウモリ！」

黒コウモリ達は集団で飛ぶが、降下する様子がない。

「！地下に行かねエぞ」

上昇して行く黒コウモリ達を見て、高杉が呟く。

「この波導……」

上空に見覚えのある波導が見え、刹那は空を見回した。
すると、マスクをしていたが、昨日会った少女の姿を見つけた。

「ジュリアちゃん！」

刹那が呼ぶと、ジュリアは気付き、少し離れたパイプの上に下りる。

「刹那、晋助……」

マスクを外し、2人を見る。

その間に、エド達も近くに走り寄る。

「ジュリア、この街は危険だ！」

「街には、仕掛けがあるんだ！手を出しちゃいけない！！」

「あなた達は、早くこの街から逃げて下さい……！」

エドとアルは叫んだが、ジュリアの決意は変わらなかった。

「星を手に入れて、それで聖地を取り戻せるって保証は無エんだ。危ねー橋を渡ろうとすんじゃねエ……！」

「私達には、もうこれしか無いのよ……！」

説得しようとする銀時達に、ジュリアは悲痛に叫ぶ。

「どんなことがあっても、私達は前に進みます。……ごめんなさい。忠告ありがとう」

ジュリアはマスクをし、背を向けた。

「報いがあるなら、私が全て背負います」

「ジュリア！」

ワイヤーを使い、ジュリアは飛び立った。

「いたぞー!!」

背後から、憲兵達の声が聞こえた。

「あーもう、面倒だなー!!」

エドは壁を錬成して、憲兵達がすぐに来ないようにした。

「何故だ…。何故奴らは、地下へ向かわない!?!」

監視塔から、ソユーズは苦々しく呟く。

後ろで、部下が報告をしてきた。

「少佐、テロリストが、この監視塔を狙っている模様です！」

「何!?!」

「階段を押さえられたら、脱出出来ません!!」

「くっ…!!」

外では、ジュリアを含めた黒コウモリ達が、監視塔へ向かって行く。

「あの塔を襲う気だ!!」

「何をするつもりだ!?!」

ジュリアの後を追っていたエド達は、走りながら見上げる。

「テロリストが、こちらに向かっているぞ!」

監視塔の中では、警戒が強まっていた。
その時。

ズンッ

氷の柱が現れたと思うと、瞬時に水になり、電撃が走った。

「ぐあああつ!?!」

軍人達は倒れ、氷柱で作った穴から、ジュリア達4人が侵入する。

「こつちだ!」

アシュレイが先頭に立ち、最上階へ続く階段を上がって行く。
その途中で、逃げるソユーズと部下に遭遇する。

「い、行け!」

ソユーズは反射的に部下を蹴落とす。

「少佐!?!」

落下した部下に、ミランダは咄嗟に発砲する。

「がつ…！」

左肩を撃たれた部下は、階段から滑り落ちる。その間にソユーズは、パイプを伝って逃げていた。

「なんて奴！」

「放つとけ。この上だ」

階段を上がり、監視塔の最上階にたどり着く。マスクとグライダーを外し、辺りを見回す。

「鮮血の星はどこにあるの？アシュレイ」

ミランダが訊くと、アシュレイは中央にある、ドーム状になっている柵に触れた。

「こつちだ」

柵を電撃で壊し、中に入る。

「これを見てくれ」

ドームの中心に、金色の伝声管があった。

「何なの？それは」

3人は中に入り、伝声管を見た。

「命令を伝える伝声管だ。この街のあちこちに、張り巡らせてある」
アシュレイは伝声管の蓋を開ける。

「今でこそ、伝声管として使われているが、昔は別の使い方をして
いた」

「別の使い方？」

「そうだ。それこそが、聖地の秘密だ」

ザクッ

ミランダが伝声管に触れていると、突然、背後からアシュレイが刺
した。

第18話 日没の襲撃（後書き）

真理

「そう言えば、ジュリアが刹那と高杉の名前呼んでたけど、いつ教えてたの？」

銀時

「地底湖から、鎮魂の間に行く途中で」

アル

「一応、ジュリアはみんな名前は知ってるよ」

第19話 錬成される星（前書き）

真理

「いよいよクライマックス」

エド

「ほとんど映画の内容と同じだな」

第19話 錬成される星

「アシュレイ…!?!?」

背後から刺されたミランダは、血を吐き、肩越しに振り返る。アシュレイは不気味に笑っていた。

「何をするの兄さん!?!?やめて!?!?」

駆け寄ろうとすると、アランがジュリアを後ろ手にして押さえる。

「アラン!?!?」

顔面に頭突きをするが、逃れられない。

「離して!?!?」

ミランダを突き刺した状態で、アシュレイは短剣の柄にあるスイッチを押した。

血が勢い良く吹き出し、伝声管の中に流れた。

「ぐっ…!?!?」

「そうだ。この世に無駄な血など、一滴も有りやしない」

血がパイプの中に流れ込むと、伝声管は下がり、深い穴が出来る。短剣を引き抜き、ミランダは倒れた。

「ミランダ！」

ジュリアは涙目で叫ぶ。

ミランダの腹部から、とめどなく血が流れる。

「これはな、血で描く、一つの錬成陣だ。この伝声管は、街の地下に網の目のように張り巡らされている。そこに人間の生き血を入れれば、どうなると思うっ？」

「……！」

「アトラス中尉！5年は少々、長かったです！」

「え！？」

アランはアシュレイをアトラスと呼び、ジュリアはアランを見る。

「ご苦労だったな、ラウル軍曹。ジュリアを谷で見張ってくれて」

「どづいづいと……！？」

話が見えず、わけが分からなかった。

「こいつはクレタの元軍人。なあ、軍曹」

「全ては祖国の為。クレタやアメストリスにも負けない、我々の国が持てますね、アトラス中尉！」

「アラン……！！」

裏切るつもりだったのか、とミランダは苦しそつに呟く。

「本当に、ご苦労だったな」

アランの肩に手を置き、背中を刺す。

その隙に、ジュリアは離れた。

「中尉、何を…!?!」

「この錬成陣を完成させる為には、血が足りないんだよ」

アランを刺したまま穴の前に行き、短剣のスイッチを押す。

「あ…、あ…」

ジュリアは呆然と、流れる血を見つめた。

「ジュリア」

息絶えたアランを放り、アシュレイが前に来る。

血を流し込んだことにより、ドームの中全体が赤く輝く。

「俺を覚えているか？」

後退り、柵に背中が当たる感触がした。

目の前にいるのは、もうアシュレイだとは思わなかった。

「俺はずっと待っていた。おまえの両親の話を盗み聞きした、あの日から」

「アトラス…」

この名前に聞き覚えがあった。

（確か…）

数年前、谷からクレタに移住する際に、そんな名前の軍人がいた。それと同時に、両親が殺された日のことが目に浮かんだ。

（…違う。父さんと母さんを殺したのは、狼キメラじゃない…！！）

気を失う直前に見た、研究室にいた人物……。

「アトラス警護長…！！」

当時と今では、顔が全く違う。

が、今のジュリアには、そんなことを考える余裕は無い。

「あたし達を騙したのね…！許さない…！！」

剣を抜き、アトラスに飛びかかる。

「錬金術の腕を試そうと、クレタ軍に入ったが、小競り合いばかりでうんざりしていた！」

ジュリアの剣をかわし、アトラスは言った。

「だが！」

ジュリアの腕を掴み、上着を裂く。

「やめて！」

抵抗するが、下に着ていたシャツを裂かれ、背中が露わになり、纏めていた髪も乱れてしまう。

「谷底にいる、薄汚い学者夫婦の話聞いた！」

アトラスは上着を脱ぎ捨て、シャツを裂く。

「全く。大した奴だ、おまえの父親は。自分の研究成果を、2人の子供に刻みつけたんだからな!!！」

手を振り払い、ジュリアは背中を見る。

右腰に、アトラスが見せた地図と似た物がある。

「だが、あの時のおまえはまだ幼く、アシュレイの地図を重ねるには、小さすぎた！」

「兄さんをどうした!?!」

アトラスが見せた地図は、間違いなくアシュレイの身体にあったもの。

話の流れから、アシュレイの安否が気になった。

「皮を剥がして、皮膚をここに頂いた」

電撃を使い、地図の周りに切れ目を入れる。

「兄さんを…殺したの!?!」

「今更そんなことを知って、どうする!?!」

皮膚を剥ぎ、開き直るように言い捨てた。

「兄さんを…、兄さんを…!よくも!」

涙を浮かべ、再び飛びかかるが、剣を振り払われ、腕を締め上げられる。

「よく見せてもらっぞ、おまえの地図を!」

2つの地図は赤く発光し、アトラスは持っていた地図を近付けた。

「怒れ、もって怒れ!」

アトラスの声に呼応するように、持っていた地図にジュリアの地図が焼き付く。

「これで、本物の地図の完成だ!」

ジュリアを離し、アトラスを高らかに笑った。

伝声管に血を流し込んだことで、地下にある仕掛けが動き出す。

「何だ?この音!」

機械音が街中に響き、地下の部屋では、突然扉が閉まり、床が開いた。

「うわあああつ!!」

部屋にいた軍人達は、全員落ちていった。

「キリがないネ!」

神楽と新八、桂の3人は、向かって来る軍人達と戦いながら、街を走り回った。

「銀さん達は、今どこにいるんだろう…」

と、前を走っていた桂が立ち止まり、後ろの2人を手で制した。

「おまえ達、止まれ!」

「桂さん!?!」

「どうしたアルか?」

2人が訊いた時、前方の道が開き、軍人達が落ちていくのが見せた。

「な……!?!」

「ここは危険だ。パイプの上に行くぞ!」

桂は、自分達の足元に石柱を錬成し、パイプの上に移動した。

「何がどうなってんだ…?」

別のパイプの上から、高杉が呟いた。

「この街の地下…、何かが流れて、動いてる」

刹那はパイプの上に座り、波導で地下を見た。

「仕掛けが動き出した、ってことか」

「だと思っ」

目を開けた刹那は、波導で見た物に不安感を覚えた。

「それが、父さんと母さんが残した秘密…！？」

赤く発光していた2つの地図の光は消えた。

「そうだ！錬成された星の在処を示している」

アトラスは、右手から大きな氷柱を出した。

「おまえはもう用済みだ。両親の下に逝くが…っ！！」

突然、背に激痛が走り、アトラスは振り返る。

見ると、倒れていたミランダが起き上がり、剣を刺していた。

「に…げろ…！」

「ミランダ！」

「邪魔だ!!」

アトラスは氷柱をミランダの背に刺す。

「ぐあ…っ!!」

ミランダは再び倒れた。

「ミランダ…っ!!」

「あなたは…、生きて…て…」

呟くように言い残すと、ミランダは息絶えた。

「ミランダ!!」

「手間掛けさせやがって…」

剣を引き抜き、電撃で傷口を塞いだ。

アトラスは氷柱を幾つも出し、ジュリアを追い詰める。

「……っ!!」

逃げることは出来ない。

そう思った時だった。

「!?!」

背後の柵が崩れ、ジュリアは倒れる。

入れ替わるようにエドが飛び込み、そのままアトラスを殴りつけた。

「てめえ、どういうことだ!!」

「貴様…!!」

アトラスは起き上がり、エドと、一緒に飛び込んで来た銀時を睨む。

「ごめん、遅くなって」

倒れたジュリアを受け止め、アルはドームから下がる。

「アル!エド、銀時!!」

「凄腕の錬金術師かと思えば、とんだペテンヤローだったとはな!」

銀時が言うと、アトラスは氷柱と電撃を両手から出す。

「フン。馬鹿な連中に使われることが、星にとっての不幸だ!」

エドに氷柱を、銀時に電撃を放つ。

2人はそれぞれ、壁を錬成して防ぐ。

「アル!ジュリアを頼むぞ!!」

「うん!!」

エドは肩越しに振り返り、少し離れた所にいるアルとジュリアを見る。

「行くぞ、エド!!」

「ああ！」

銀時とエドは、同時にアトラスに飛びかかった。

同じ頃、伝声管に流れた血は、街の地下の『ある場所』に集まる。すり鉢状の場所に大量の血が流れ、激しい錬成反応の光と、人の絶叫のような音が響く中で、鮮血の星は錬成された。

第19話 錬成される星（後書き）

銀時

「俺達の出番、最後だけだったな。今回……」

エド

「うん……」

第20話 星を巡る戦い（前書き）

作者

「わりと早く出来たな」

真理

「この話がずっとやりたかったの？」

作者

「うん。映画観てて、興奮しながら話を組み立ててた」

第20話 星を巡る戦い

塔に付いた鐘が、街中に鳴り響いた。

「何アルか？この鐘……」

「分からん。だが、ただ鳴っているようには見えん」

パイプの上に立ち、桂達は塔を見上げる。

「あ、桂さん。あそこにいるのって、高杉さんと及川さんじゃないですか？」

離れたパイプの上に、2つの人影があった。

「そうみたいだな。行くぞ！」

3人は、人影のあるパイプに移動する。そこにいたのは、やはり刹那と高杉だったが、刹那の様子がおかしい。

「バナラ、どうしたネ？」

神楽はしゃがみ、うずくまる刹那を見る。

「鐘が鳴った時にね……、地下を見たの。そしたら、強い怨みや嘆きの感情が伝わってきた……」

波導は、気やオーラの他に、感情を見ることも出来る。だが、今までに感じたことの無いような、強く、禍々しい怨嗟がこもったものだった。

「星が錬成された」

アトラスはドームから出ると、塔の壁を壊す。

「何…!？」

スロープ状に氷を錬成し、アトラスは滑って降りて行く。

「待ちやがれ!!」

銀時は追おうとするが、氷は瞬時に蒸発した。

「ちっ…!」

「銀時、カイトがあるわ!」

ジュリアは、外していたグライダーを手取る。

「それは持つとけ!」

エドは言いながら、コートを脱ぎ、ジュリアに羽織わせる。

「こっちは任せて」

錬成反応の光が輝き、アルは緩やかな滑り台を錬成した。

「追うぞ！」

グライダーを持ち、銀時が先に滑って行く。

「銀時さん！」

「ジュリア、あんたも」

ジュリアは頷き、息絶えたミランダを見る。

(ごめんなさい、ミランダ。連れて行ってあげられなくて……)

少し俯いた後、振り返り、エドとアルと一緒に滑って降りた。

鳴り響く鐘の音は、クレタの監視塔にも届いていた。

「…星が錬成された。新たな歴史の始まりだ」

ハーシエルは呟き、目を細めた。

「グラーツ、坑道を爆破しろ」

「はっ！」

グラーツは爆破装置のレバーを引いた。

坑道に仕掛けられていた爆弾が連鎖爆発を起こし、辺り一帯は大きく揺れた。

「何だ!？」

アトラスを追っていた銀時達は、足を止めた。

「地震:じゃないよね」

「銀さん!」

「エド、アルフォンス!」

崖の方から、新八と神楽が走って来る。

「あ、ジュリアさんも一緒だったんですね」

「新八。今は、それどころじゃないアル!」

「何かあったのか?」

慌てた様子の神楽を見て、エドが訊いた。

「すぐ来て下さい!大変なんです!!!」

新八と神楽に案内され、4人は崖に連れて行かれる。

「崖?」

「早く、あれを見るネ!」

神楽が指差したのは、クレタの地熱プラント。

だが、あちこちから爆発を繰り返し、そこから熔岩が溢れていた。

「熔岩…!?!」

「こんなの…、あたし達の計画にはなかった…」

谷を見下ろし、ジュリアは呆然と呟く。

「ジュリア、今は奴を!」

熔岩を見つめた後、エドが言った。

「エドワードくん、何があったの?」

エドとアルは、先程の出来事を話した。

「あいつ、ジュリアの兄貴じゃなかったアルか!?!」

「ジュリアさんの家族を殺した人…!?!」

「鐘が鳴っていたのは、星が錬成された合図だったのか…!」

桂が重く呟くと、刹那は目を逸らした。

「…あれは、星が錬成された時のものだったのね…!」

「おい、このままだと、熔岩があつちに届くぞ!」

熔岩の流れを見て、高杉がミロス人の集落を指差す。

「錬金術で、何とかならないんですか!?!」

「無理だ。場所も悪いし、処理しきれねえ……」

新八の問いに、エドは首を振る。

「鮮血の星……」

ぼつりと言ったジュリアに、視線が集まった。

「それを使えば、熔岩を止められる！」

「駄目だ!!」

「あれは使っちゃいけない！」

エドとアルは、使うことを反対した。

「でも、あの男は星を持ってる！」

ドンッ!!

突然、大きな音が広場から聞こえた。

見ると、広場の中心に巨大な氷柱が刺さり、煙が上がっていた。

「奴だ！」

「あそこに、星があんのか」

銀時は広場を見る。

遠目だが、氷柱の下に、地下へと続く道があるようだ。

「兄さん達はあいつを追って！熔岩は、ボクが止める」

「アル…」

「アルフォンスくん、1人では無理だ。俺も行こう」

谷に、桂も同伴すると言う。

「分かった。熔岩を止めながら、ミロスの人達を避難させないと！」

「避難なら、私達がやるネ！」

神楽が新八と一緒に、アルと桂の前に行く。

「桂さんとアルフォンスくんは、熔岩を止めることに専念して下さい！」

「後は、私達に任せるアル！」

「だが…！」

「ツラ、アル。新八の言う通りだ。おまえらは、熔岩を止める」

迷う桂に、銀時は言いきった。

「桂さん、急ごう！」

アルは桂に、持っていたグライダーを渡した。

「気を付けるよ！」

「谷を、お願いします！」

エドとジュリアの言葉に頷き、桂はグライダーを背負い、新八と神楽はアルにしがみつく。

「2人共、しっかり掴まってね」

鎧が大きいせいで、グライダーを背負えないアルは、グライダーを頭上に持ち上げなければ、飛行出来なかった。

「行くぞ！」

桂達が飛んだのを見送り、広場へ向かう。

「鮮血の星がある部屋は、入る所が幾つかあるよ！」

波導で見たのか、刹那は走りながら言った。

「中に入ったら、別々に行った方がいいな」

「…そうね」

話を聞き、高杉は呟く。

ジュリアは、広場に落ちていた銃を拾いながら答える。

「鮮血の星…。俺の鮮血の星…！」

地下の部屋に続く階段を、ふらつく足で下りながら、アトラスは同じことを繰り返した。

ギイイ

扉を開け、鮮血の星が錬成された部屋に入る。

中は、血の溜まったすり鉢状の池があり、部屋の中心に、街の伝声管を意識した模型がある。

模型の手前に、真紅に輝く鮮血の星が、浮かんだ状態であった。

「これで、世界は俺の物だ…!!」

アトラスが星に手を伸ばした時だった。

「そうはさせるかぁーっ!!」

アトラスが入って来た所と違う入口から、エドが走って来る。飛びかかるが、アトラスに突き飛ばされた。

「…っど！」

池に落ちないよう、両足と右手でバランスを取った。

「エド！」

違う所から入って来た銀時が叫ぶ。

見ると、アトラスの手には、鮮血の星が握られていた。

「遂に手に入れた…!!これで世界は、俺の物だ!!」

「ちっ！」

エドは舌打ちをし、足元から槍を錬成する。

「おりゃっ！！！」

槍を振るい、アトラスに向かって行く。

アトラスの背後からは、銃を構えたジュリアがいた。

「鮮血の星はここにある！舐めるなよ！！！」

手を大きく動かすと、池の血が持ち上がり、針状になって飛んで来る。

「おわっ！」

エドは大きく飛び、槍を壁に刺し、足場にする。

「きゃあっ！！！」

ジュリアはバランスを崩し、道から落ちる。

「くっ……」

銃は落としたが、何とか道にしがみつく。

「ジュリアちゃんが落ちた！」

刀と小刀を持った刹那が、しがみついているジュリアを見る。

「刹那、前から来るぞ！」

高杉の声で、正面に飛んで来た血の塊を斬る。
この状況では、近くに行くことも出来ない。

「はあっ！！！」

氷を錬成するように、アトラスは血を固めて辺りに放つ。

「こんなことも出来んのか……」

呟きながら、高杉は炎を放った。

銀時は突起を錬成して、血の塊を砕いた。

「ちょこまかと……！ガキ共お！！！」

苛立ちをぶつけるように、アトラスは池の血を全て持ち上げる。

「おー怖っ！！！」

口とは逆に、エドは余裕な表情で壁を錬成する。

「同じような手を食うか！」

電撃を使い、壁を破壊する。

「掛かったな！」

エドは瞬時に石柱を錬成し、浮かんでいた血にぶつけた。
高杉も同時に炎を放つ。

「ぐあつー!!」

アトラスは血を大量に被り、その拍子に、持っていた星が飛んだ。

「あ………」

飛んだ星を、ジュリアが掴み取る。

「これが…、鮮血の星………」

星を握り締め、空いた手で氷を出し、道の上に載る。

「星を…寄越せ…!!」

血まみれになったアトラスが、うつ伏せになったまま言う。

「ジュリア!」

星を見つめっていると、エドの声で我に返った。

「それを持って上に逃げろ! 熔岩の中にでも捨てちまえ!!」

ジュリアは再び、星を見つめた。

「これがあれば、谷が救える。これがあれば………」

震える手で、ジュリアは星を口に運ぶ。

一同は驚愕した。

「何する気だ…!?!」

「ジュリアちゃん駄目…!」

まさか、との思いで銀時は眩き、刹那は叫んだ。

「やめろ!そんなことをしたら、星に心を喰われちまう…!」

エドは、叫びながらジュリアを止めようとするが、ジュリアは星を飲み込んでしまう。

「う…っ!」

飲み込んだ直後に、ジュリアは脱力した。

ジュリアの近くにエド達は集まった。

「ジュリア…!」

「おい、しっかりしろ…!」

「ジュリアちゃん、聞こえる!?!」

エドと銀時、刹那の呼びかけに、ジュリアは顔を上げた。

だが、水色だった彼女の瞳の色は、輝く真紅の色に変わっていた。

「おまえ、目が…!」

ジュリアはゆらりと立ち上がる。

「鋼の、危エ…!」

エドの背後にはアトラスが立っており、電撃を放った。
一瞬エドは振り返り、咄嗟にジュリアを庇う。

「うわっ！」

電撃は、右肩の下辺りに当たり、エドはジュリアと一緒に倒れる。

「エド！」

「大丈夫！？」

「星を返せ……！」

再び電撃を放つと、赤い電撃で打ち消される。

「何！？」

見ると、立ち上がったジュリアが、右手から電撃を放っていた。

「ジュリア！？」

「父さん……、母さん……、兄さん……。みんなを……。殺した……！」

強い電撃に、アトラスは身を逸らしてかわし、相殺しようとして電撃を放つが、ジュリアの電撃が圧倒的に強かった。

「みんな……。殺した……！」

「ぐっ、ぐあぁあっ……！」

アトラスは吹き飛ばされ、姿が見えなくなる。
だが、それでもジュリアは、電撃を放ち続けた。

「ジュリア、もういい！」

「こんな物があるから……。こんな場所が無ければ、誰も争わず、死
なずに済んだのに！！」

押さえようとするエド達を振り払い、ジュリアは叫ぶ。

感情に呼応するかのように電撃は強まり、部屋は崩れ落ちていった。

「時は来た……！」

クレタの監視塔で、ハーシエルはマスクに付いているチューブを抜
きながら呟く。

「中佐！？」

突然立ち上がったハーシエルを見て、グラーツは驚く。

「ここからは、私が自分で決着けりを付ける！」

第20話 星を巡る戦い（後書き）

作者

「ジュリアが星を飲み込んだ時、なんともならないかと思ってたな
…」

エド

「何でだ？」

作者

「だって、キンブリーは賢者の石飲み込んで、目の色とか変わってなかったし」

銀時

「キンブリーって、ボツスンと同じ声だったな。もう死んでるけど」

真理

「ボツスン…」

第21話 集結する谷（前書き）

エド

「今日は銀さんの誕生日だ！」

アル

「おめでとうー！...！」

銀時

「おっ。...そういう割にしちゃ、今回、俺の出番少なくてね？」

真理

「シーンの問題だから、文句言つな」

第21話 集結する谷

谷に降り立った後、新八と神楽は集落に向かい、アルと桂は熔岩を防ごうと壁を錬成する。

「保ってくれ…！」

既に、何度も壁は熔岩に飲まれ、その都度、新たに錬成を繰り返した。

「アルフォンスくん…！」

「うん。これ以上下がったら、村に届いてしまう…！」

アルと桂の鎧と着物は、飛び散った熔岩で、所々焼け焦げていた。

街では、あちこちから熔岩が吹き出て、建物が炎上していた。

「何がどうなっている…？ソユーズは何をしている…！」

ロイはリザと、何人かの軍人と一緒に、広場にやって来る。その後ろにはウィンリイがいる。

「大佐！」

広場に開いた穴から、2つの人影が出て来る。

「テロリストか!？」

反射的に、発火布をした右手を向けたが、相手の声には聞き覚えがあった。

「ロイさん!」

「マスタング!」

「刹那、高杉!？」

2人はロイの前に行き、更に穴から銀時とエド、ジュリアが出て来た。

「大佐!っ!」

「鋼の、何があった?」

「テーブルシティが、役目を終えたんだ!」

「役目?」

ロイの代わりに、リザが訊いた。

「『賢者の石を作り出す』って役目をな!」

「何!？」

エドは、ロイとリザに、これまでのことを話す。と、広場の隅で、銃を持ったソユーズが現れ、ロイに向けた。

(大佐殿は、黒コウモリに暗殺されましたーっ)

引き金を引こうとした時、リザが振り返り、銃を撃った。
ソユーズの持った銃は、弾き落とされる。

「な………!?!」

「やろっ!」

逃げ出すソユーズを、エドが追う。

リザはソユーズの足元に弾丸を撃ち込む。

「わわっ!?!」

弾丸を避けようとするが、ソユーズはバランスを崩し、段差から落ちて気絶する。

「そいつを連行しろ!」

ロイが命じると、軍人達は速やかにソユーズを連れて行く。

「私の…谷」

ジュリアは前に出て、谷を見つめた。

「ジュリア?」

「熔岩を…止める!?!」

突然ジュリアは走り出し、崖に行く。

「ジュリアちゃん！」

止める暇も無く、ジュリアは崖から飛び降りた。

「マジかよ……」

「エド！」

振り返ると、大きなトランクを抱えたウィンリイがいた。

「ウィンリイ！？」

「あんたやっぱり、右腕が機械鎧に……」

「やっぱり……！？」

「ウィンリイちゃん、どうしてここに？」

ウィンリイは刹那や、銀時達を見て驚く。

「刹那さん！？銀さん達も、何か雰囲気か……」

「説明は後だ。俺達も谷に行くぞ！」

銀時はグライダーを背負いながら言った。

「銀さん達は、先に行っててくれ！」

エドはすぐに、ウィンリイを見る。

「悪いウィンリイ、腕、壊しちゃった」

「ええっ！？もう、無茶するんだから！」

「やっぱ、ぶっ壊れてたか」

エドが、右肩辺りに電撃を受けていたのを思い出し、高杉は呟いた。

「私達は先に行こう！」

「けど、数が足りねーぞ」

グライダーの数は3つしかなく、使ってしまったら、エドが降りられなくなる。

「なら、こっすりゃいいだろ」

グライダーを背負った高杉は、刹那をひょいと抱き上げる。

「え！？ちょっと、晋助さん！？」

お姫様抱っこをされた刹那は、顔を赤くし、声が裏返る。

「うわゝ、高杉さん大胆」

「意外だな。女性を抱くことには、無縁そうに思っていたが」

ウィンリイは機械鎧を見る手を止め、ロイは意外そうに眺めている。

「うるせエぞ。てめエら…」

高杉は青筋を立てながら、ウィンリイとロイを睨む。

「チビ王子、飛んでる途中で、お姫様落つことすなよ」

銀時はニヤニヤと冷やかすように言い、谷に飛び降りた。

「誰が、チビ王子だ！」

刹那をしっかりと抱き、高杉も谷に飛び降りる。

「エドじゃ、あんなことは出来ないわね」

「うつせえ！元の世界に帰ったら、おまえにもやってやる！…それより、腕どうなってんだ？」

ウィンリイは外していた肩の部分を、改めて見てみる。

「…！どうしよう。ギアが壊れてる」

「何…！？」

「換えの部分は無いのか？」

谷を見下ろしていたロイが訊いた。

「調整の用意しかしてこなかったから…」

「いや、部品ならある!」

エドはあることを思い出し、翼を広げたグライダーを背負った。

「ウィンリイ、掴まれ!」

「え?え!??」

「早く!」

「う、うん……」

トランクを片手に、ウィンリイはエドの肩に手をまわした。

「しっかり掴まって、離すなよ!」

「ちょっと!まだ心の準備が……」

エドは勢い良く谷へ飛び降り、ウィンリイは絶叫した。

「きゃああああっ!」

飛ぶというより、落下に近い形で、2人は谷底へ消えた。

「私も、谷へ向かおう」

ロイは近くにあったグライダーを手に取る。

「大佐!」

「中尉、地上は頼んだぞ」

「……はい！」

一瞬迷ったが、リザは力強く答えた。

ミロス人の集落では、ゴンザレスと新八と神楽が、人々を誘導していた。

「熔岩が迫つとる！早く逃げる！！」

「落ち着いて進んで下さーい！」

「おーい、ゴンじいーっ！！」

頭上から声が聞こえ、振り返ると、大きな音がした。

「ゴンじいー！」

瓦礫の山から、エドとウィンリイが顔を出す。
どうやら、着地に失敗したようだ。

「あんちゃん！？」

「エドワードさん……」

「腕直してくれ！壊しちゃったんだ」

「何を言つとる！もうじき、熔岩が来るんだぞ……！」

「この腕が無きゃ、熔岩が止められねえんだ！」

「お願いです、部品を分けて下さい！」

ウィンリイも一緒に頼んだ。

「ん？嬢ちゃんまさか…！」

ゴンザレスはウィンリイを見てすぐ、エドの言っていた機械鎧技師だと分かった。

「エド、銀ちゃん達は！？」

「銀さん達は、先に行った。オレも、後から行く！」

そう言うと、エドはウィンリイと一緒に部屋に入って行った。

「新八、私達も銀ちゃんの所に行くネ！」

「え！？でも…」

「ここの人達は、殆ど避難出来たアル。大丈夫ネ！」

新八は、辺りの様子を見る。

誘導を速やかに行った為、人影は殆ど無い。

「うん。僕達も行くっ！」

2人は、熔岩の流れる先へ向かった。

「まずいぞアルフォンスくん！もう下がれん！！」

壁を錬成した桂は、アルを見上げる。

これ以上下がれば、集落に届いてしまう。

「アル、小太郎」

低めの声に、2人は振り返る。

そこには、髪と赤いコートを風に靡かせ、瞳を真紅に輝かせたジュリアが歩み寄って来た。

「熔岩は、私が止めます」

「ジュリア殿…！？」

「まさか、鮮血の星を！？」

「今の私なら、熔岩を止めることが出来る筈」

ジュリアは壁の前に歩いて行く。

と、後ろから物音がし、再び振り返った。

「アル、ツラ！」

着地した銀時が、グライダーを投げ捨てて叫ぶ。

同じように、着地した高杉は刹那を下ろし、グライダーを捨てる。

「銀時さん…！」

「ジュリア殿が、熔岩を止めると言っている！」

「星を使って止める気が……」

話を聞き、高杉はジュリアがどうやって熔岩を止めるのか、予想した。

「そう言えば銀時さん！兄さんは？」

「ああ、エドなら」

「後から来るネ！」

見ると、新八と神楽が、こちらに走って来た。

「おまえら……！」

「エドワードさんは、腕を壊しちゃったみたいで、直してから来るって！」

「あれ見て……！」

刹那が、谷間を飛ぶ人影を見つける。

「アトラス……！」

遠目だったが、ジュリアにははっきりと見えた。アトラスは飛びながら、電撃を放った。

「動かないで！」

アルが電撃を、文字通り楯となって防ぎ、高杉は炎を使い、電撃を打ち消す。

「星は俺の物だ…！」

廃棄された機械に着地し、アトラスはグライダーを外す。

「寄越せ…！！」

手を伸ばした時、突然後頭部を鷲掴みにされ、振り返った。そこには、ハーシエルが立っていた。

「な、何だおまえは！？」

電撃を放とうとするが、ハーシエルは瞬時に突起を錬成して、アトラスの両手を貫く。

「がっ…！！」

「何だあいつ！？」

「奴を仕留めたぞ…」

銀時と桂は呟く。

ハーシエルの登場に、アトラスだけでなく、銀時達も動揺を隠せない。

「鮮血の星の錬成ご苦労だった。私を覚えているか？」アトラス警

護長』」

「……まさか……、おまえは……」

「そつだ」

ハーシエルは、マスクの表面を外して見せる。

「貴様に顔の皮を剥がされた、アシュレイ・クライトンだ」

「何!？」

「アシュレイ……兄さん!？」

「あの犬神家みたいなのが、ジュリアの兄貴アルか!？」

その場にいた者達は驚き、ジュリアは目を見開いた。

「あの日のことは、1日たりとも忘れたことは無い……」

外したマスクの表面を戻し、続けた。

「貴様に顔と脇腹の皮を剥がされた私は、父と母が研究用に隠し持っていた鮮血の星を使い、生き延びた」

アトラスが立ち去った後、アシュレイは激しい出血をしながら、本の中に隠してあった星を飲み込み、一命を取り留めた。

「よくも父と母を殺してくれたな、アトラスよ……!」

憎悪に満ちた目で睨み付け、アトラスの顔面を掴む。

「こんな、こんな所で……!!」

「あの世で父と母に詫びて来い!!」

「ぐあああつ!!」

緑色に光る電撃を放ち、アトラスの身体はバラバラになって落ちた。

第21話 集結する谷（後書き）

銀時

「ほんとに今回、出番少なかったな」

エド

「銀さん、次回は多分、活躍するって」

第22話 衝撃的な事実(前書き)

飛行中

銀時

「高杉ー、どさくさに紛れて触んなよー」

高杉

「触らねエよ」

刹那

「晋助さん…、ちょっとお尻触ってる」

高杉

「え!?!」

銀時

「やっぱり触ってんじゃねーか!?!」

高杉

「悪い、抱き直す!」

刹那

「……………くすぐりたい」

銀時

「今度は胸触ってるぞ!?!」

高杉

「悪い何度も。じゃあ…」

銀時

「何時までT O L o v e るみたいなことやってんだ!!」

第22話 衝撃的な事実

あつという間の出来事に、一同は滴り落ちる血を呆然と眺めた。

「…兄さん」

ジュリアは、アトラスを葬った人物を見上げる。

「本当に、アシュレイ兄さんなの!？」

「ジュリア!心配掛けたな」

アシュレイは明るめな声で言うが、ジュリアはまだ半信半疑だった。

「あなたが兄だというなら教えて!どうして今まで、生きていることをあたしに教えてくれなかったの!？」

「許せ。父と母を殺した男を始末する為に、素性を偽る必要があったからだ。おまえのことは、狼キメラに護らせていた」

アシュレイの背後には、数頭の狼キメラがいた。

「護ってた……?」

「そうか。それである時……」

銀時は、アジトでジュリアを庇う狼キメラの姿を思い出す。

「ジュリア。私と一緒に、クレタへ帰ろう」

「！クレタは、私の故郷じゃないわ。私を育ててくれたのは谷よ！
」

突然の物言いだったが、ジュリアははっきりと言った。

「忘れたのか？この谷の連中が、我々一家にしたことを。こんな谷に、未来は無い」

「あるわ！あたし達が作るの。作ってみせる！！」

「無駄なことを…」

必死に言うジュリアを見て、アシュレイは蔑むように呟いた。

「この谷を埋めて軍を送る」

「な…！？」

「埋める？何を言ってるの！？」

この谷の深さは、相当のものだ。

谷を埋めようとするアシュレイに、全員が驚愕した。

「まさか…あの熔岩は、貴様の仕業か！？」

話しぶりから、桂は流れ出る熔岩は、アシュレイの仕業だと思った。
それにアシュレイは肯定した。

「そうだ。谷を埋め、聖地を手に入れる！そこで鮮血の星を作り続けるのだ！！我々兄妹の手で！！」

「そいつは無理な相談だ」

谷に少年の声が響く。

振り返ると、エドと、発火布を両手にしたロイが歩いて来る。

「兄さん！大佐！」

「これはこれは。アメストリスの将校殿」

「残念だが、ミロスの遺跡はぶっ壊れちゃったぜ。ジュリアの手でな」

「ん？フフ…それはご苦労」

エドの発言に、アシュレイは一瞬驚くが、不敵に笑った。

「遺跡など無くとも、聖地の錬成陣は私の中にある。星の錬成はいつでも可能だ！」

「貴様。星を錬成して、一体何をするつもりだ！？」

桂が言うと、アシュレイは当然のように言った。

「決まっているだろう。星を使い、真理の扉を開ける為だ！！」

「やっぱりそうか…！！」

ミロスの神話を聞いていたアルは、なんとなく予想はしていた。
アシュレイは続ける。

「扉を開け、真理を手に入れる！！星も聖地も、新たな世界を作り出す足掛かりに過ぎん！！」

「いい加減にしろ！」

エドは怒鳴り、前に出てアシュレイを見上げる。

「あんた神にでもなったつもりか！？星を飲み込んで、心を喰われちまってんだ！自分を取り戻せ！！」

「フン。禁忌を犯した身で、よく言えるな」

鼻を鳴らし、侮蔑するように、エドと銀時達を見る。

「おいてめエ。よく知りもしねーで、こいつらを語ってんじゃねエ
！」

「銀さん……」

銀時はエドの隣に行き、同じようにアシュレイを見上げた。

エドとアルが、どんな想いで禁忌を犯したのかを、軽々しく触れられなくなかった。

「そう言うおまえも、人のことを言えた義理か？錬成陣を使わずに錬金術を使う。おまえやその連中も、禁忌を犯したのだから？」

「いい加減なことを言うな！！！」

「銀ちゃん達は、好きで扉を開けたわけじゃないネ！無理やりやらされたアル！！」

新八と神楽は夢中で言い返すが、アシュレイは気にも止めていない。

「真理こそ、この世の全て。そして、何よりも手に入れなければならない物だ！！」

その時、アシュレイの背後に錬成された壁に、熔岩が溢れてくるのが見えた。

「壁が保たない！」

「やらせないわ！」

アルの声に、ジュリアは地面に両手を当てた。

「谷は埋めさせない！」

溢れた熔岩は、間近に迫っていた。

「力を貸して下さい！熔岩を止めます！！」

「おう！」

エドとアルは、ジュリアの隣に座る。

「はあっ！！」

アシユレイは3人に向かって、電撃を放った。

「うわわっ!!」

「ジュリア、大丈夫!？」

「ええ…」

3人は咄嗟に避けたが、当たっていれば、ただでは済まなかっただろう。

「てめエ、妹を殺す気か!？」

銀時は叫ぶが、アシユレイは答えず、後ろにいる狼キメラを放つ。

「行け!」

飛びかかって来た狼キメラ達に、銀時達は刀を抜き、エドは機械鎧を使い、アルは腕を使って応戦する。

「みんな!」

護るよう命じられているからか、狼キメラ達は、ジュリアには襲いかからない。

「いかん! 熔岩が!!」

熔岩が川に流れていくのを見て、ロイは声を上げた。

「邪魔だ!」

狼キメラに炎を放つが、その間に熔岩は川に入っていく。

「熔岩が水辺に達したぞ！」

「すぐここまで来る！」

避難をしていたミロス人達は、口々に叫んだ。

「嬢ちゃん、場所を移るぞ！」

部屋から熔岩を見たゴンザレスは、ウィンリイに声を掛けた。

「エド…！」

エドを送り出した後、向かった先から強い光が輝いたのを見た。

「あの…、ちょっとあたし、行ってきます！」

ウィンリイはトランクを持つと、外に飛び出す。

「おい、嬢ちゃん！？」

ゴンザレスは止めようとするが、ウィンリイは走り去ってしまふ。

「おっと…。危ない」

崩れかかった道を走り、エド達の下に向かう。

「あっ…！」

数メートル先に、熔岩が広がっており、足を止めた。

「もう進めない……」

顔を上げ、熔岩の先を見つめた。

「エド…、アル…」

（みんな、無事でいて…！）

エド達の下に行けないことが歯痒かったが、ウィンリィは皆の無事を祈った。

第22話 衝撃的な事実（後書き）

エド

「あんなことがあったんだな、ちょっとの間に……」

刹那

「……」

高杉

「ほとんど黙ってるな、刹那……」

第23話 ぶつかると意志(前書き)

エド

「いよいよ大詰め!!」

銀時

「俺達の大活躍!!」

真理

「ふざけもあるけどな」

第23話 ぶつかる意志

「お願い、やめて!!」

狼キメラと戦うエド達を見て、ジュリアはアシュレイに言う。
だが、アシュレイは聞く耳を持たない。

「ジュリア！オレ達のことはいい、早く熔岩を!!」

エドは、狼キメラを押さえながら言った。

「……分かった！」

その場に座り、地面に両手を合わせる。

と、目の前にアシュレイが飛び降り、ジュリアを見下ろす。

「ジュリア。おまえは何故、このゴミ溜めのような醜い世界にこだわる？」

座り込み、ジュリアの肩に手を置く。

「ここは、おまえのいるべき所ではない。さあ、私と一緒においで」

「行かない！たとえゴミのようでも、この世界は醜くなんかないわ
!!」

アシュレイを見据え、毅然と言った。

「私には、そんなことが言える、あなたの方が醜く見える。邪魔をしないで!!」

両手に力を込めると、辺り一面にあった熔岩が、一気に冷え固まった。

「星の力が……」

立ち上がったアシュレイは、その様子を一瞥した後、ジュリアに視線を戻す。

「おまえだけは、分かってくれていると思っていたが……」

両手を上げ、熔岩を噴き出させる。

「所詮は、谷の連中と同じか!!」

噴き出した熔岩を、あちこちに放つ。

「やめろアシュレイ!!」

エドは思わず手を止め、狼キメラから離れる。

「駄目!!」

エド達に向かってきた熔岩の前に、ジュリアが立ちふさがる。

「ジュリア!？」

「うあああぁっ!!」

両手から電撃を出し、ジュリアは熔岩を押し止めた。
熔岩が当たったせいで、ズボンが焼け、左足が露わになる。

「ジュリアさん！…うわっ！！」

噴き出した熔岩と狼キメラに、新八と神楽、ロイは閉じ込められる。

「閉じ込められたネ！」

「熔岩は後回しだ。先にこいつらを何とかせねば」

じりじりと迫って来る狼キメラに、ロイは両手を向ける。

「数が多すぎる。すまないが」

「こっちは任せるネ！」

「錬金術で一気に、とはいきませんが、僕達は大丈夫です！」

「それは心強いな」

ロイは小さく笑い、2人に背を向けた。

「新八、銀ちゃん達は…」

「大丈夫だよ。銀さん達なら」

「…そうアルナ！」

2人は頷き合い、それぞれ木刀と傘を握り、狼キメラに向かって行った。

「くっ…!!あ……!!」

熔岩を押し止めていたジュリアだったが、手を離してしまつた。

「しまった!!」

声を上げた時、アルが目の前に壁を錬成し、その前に立ちふさがつた。

「アル!!」

安心したのもつかの間、壁はあっという間に熔岩に飲まれてしまつた。

「ジュリアよ!兄の気持ちが変わらぬと言つなら、谷と共に沈むがいい!!」

アシュレイは熔岩が操り、ジュリアに放つ。

「分かんねーのは!!」

「そつちだろうが!!」

刀を抜いた銀時と、機械鎧を甲剣に錬成したエドがアシュレイに飛びかかる。

「ちっ…!!」

廃棄された機械の上に飛び移り、アシュレイは剣を抜いて、刀と甲剣を受け止める。

その際に、熔岩はジュリアには届かず、手前で落ちた。

「てめえ、本当にジュリアの兄貴なのか!？」

「兄貴が軽々しく、妹を殺ろうとかすんじゃないねエ!!」

アシュレイを追い、エドと銀時はそれぞれ叫ぶ。

「うるさい、黙れ!!」

振り払うように、電撃を出し、2人は吹き飛ばした。

「アル!」

「アルフォンスくん!」

一方、アルは熔岩からジュリア達を護るように、立ち続けている。

「このままでは、アルフォンスくんの鎧が溶けてしまうぞ!!」

「早く、熔岩を!!」

桂達が悲痛に言うが、アルは動かさずに叫ぶ。

尤も、楯になっているアルが動いたら、その場にいる全員が熔岩に飲まれてしまうが。

「アル…!!」

「ジュリアちゃん!」

ジュリアは一度振り返り、刹那達を見た後、地面に両手を合わせた。

「お願い…!持ち上がって…!!」

土を握り締めると、赤い光が輝き、大地がせり上がっていく。

「上がった…!」

桂はせり上がる岩を見上げた。

岩は、地熱プラントから溢れる熔岩にぶつかり、せき止められた。

「まだ、幾つもあるわ!全部塞がないと…!」

ジュリアは更に力を込めた。

それを見た刹那は、少し後ろに座り、同じように地面に両手を合わせた。

「刹那!？」

「私もやる」

そう言うと、白い光が迸り、岩がせり上がった。

「おまえ、そんなこと出来たのか」

「自然物の錬成なら、何とか出来そう…!」

刹那は術を使いながら、高杉に答えた。

「刹那。神の力で、熔岩を消すことは出来ないのか!？」

桂は刹那の持つ破滅の力で、熔岩を消せないかと考えた。

だが、それに刹那は首を振る。

「駄目、神の力を使ったら、この辺りのマグマを全て消しちゃう！」

「何!？」

「そんなことしたら、今以上に大変なことになるかも……!」

力を完全に宿したことで、自身へのリスクは無くなったが、力が強大なものになったらしい。

「2人も手伝って!固まった熔岩で錬成して!!」

「分かった。高杉、やるぞ」

「ああ……」

その場に座り、2人も錬成を始める。

「銀時と……エドワードくんは、どうしている……?」

「いつからじゃ、何も見えねエよ……」

熔岩のせいで、アシュレイと戦う2人の姿は見えないが、声や金属

音が時折聞こえた。

「大勢の人を犠牲にして、真理を手に入れて、何が楽しいんだ!!!」

甲剣を振るい、エドは叫んだ。

アシユレイは電撃を使い、エドを吹き飛ばす。

「エド!」

瓦礫に落ちたエドに、銀時は声を掛ける。

「なら、おまえの国がしてきたことは何だ?」

アシユレイは前に出て、エドに問う。

「無駄な争いを繰り返し、それを正義と言う。そのような人の世など、残す価値は無い!!!」

「高杉みてーなこと言いやがって……」

最後の台詞を聞いて、銀時はぼそりと呟き、アシユレイに向き直った。

「てめーは、今の現実から目エ逸らしてるだけだろーが!!!」

アシユレイだけでなく、高杉にも向けた言葉だった。

「真理は現実をぶっ壊す為の道具じゃねーんだよ!!!」

刀を持ったまま、銀時は突起を錬成する。
アシュレイは電撃で突起を破壊し、銀時に迫る。

「銀さん！」

瓦礫から這い出て、エドは銀時を見る。

「……………！」

エドは思わず息を呑む。

アシュレイと銀時が、物凄い速さで剣と刀を打ち合わせていたからだ。

「凄え……」

（あれが、白夜叉か……！！）

銀時はアシュレイの剣を、紙一重でかわし、刀を振るう。
見る限りだと、銀時の方が有利だ。

「っと、眺めてる場合じゃねえ！」

走り、急いで銀時の近くに行く。

と、その直後から、銀時は押され始める。

（何だ……！？急に速くなってきた）

そう思いながら剣をかわすが、次第に髪や羽織りを切られていく。

「であああっ……！」

エドは銀時の横から、アシュレイに斬り掛かる。

「隙をつけると思ったか！」

アシュレイは銀時を押し付け、エドの甲剣を斬り落とした。

「くっ…！」

「おい、大丈夫かエド!？」

「ああ…！」

2人は後ろに下がり、距離を取った。

「あいつ、いきなり速くなりやがった」

「多分、星の力だ」

エドは機械鎧をある程度戻し、刀を抜いた。

アシュレイも星を飲み込んでいる為か、錬金術や身体能力がかなり上がっている。

「星の力が。反則くせエな…！」

「けど、やるしかねえよ！」

「そうだな」

刀を握り、2人はアシュレイに向かって行く。

その間に、熔岩は次々に塞がれていく。

「アル！」

アルの鎧が溶け始め、ジュリアは悲鳴に近い声を上げる。

「大丈夫…！」

「早く熔岩を塞がないと…！！！」

「アルフォンスくん、もう少し頑張ってくれ！！！」

気持ちは焦るが、錬成する質量が巨大なせいで、すぐに塞ぐことが出来ない。

「銀時の奴…！」

錬成をしながら、高杉は呟いた。

外側にいたせいか、先程アシュレイに言った銀時の声が届いていた。

「『今の現実から目エ逸らしてる』…か」

「ん？高杉、何か言ったか？」

「いや……」

「あと…少し！」

プラントの穴は殆ど塞がり、残るはあと一ヶ所となった。

「…！上まで、届かない！！」

ジュリアは顔を上げる。

高い位置まで、大地を持ち上げることが出来なかった。

「私も出来ない…！！」

「俺もだ…！！」

「みんな…！！」

「ぐあっ…！！」

エドと銀時は、機械に叩き付けられる。

「俺は必ず真理を手にし、新たな世界を作る！！」

起き上がる2人に、アシュレイは言い放った。

「ふざけんな！キラにでもなったつもりか、コノヤロー！！」

「新しい世界があるとしたらな、それは真理の先にあるんじゃないやねえ！てめえの足元にあるんだ！！」

エドは駆け出し、銀時は錬金術でアシュレイの放つ電撃を防ぐ。

ザン…ッ

エドの振るった刀は、アシュレイのマスクを斬った。

顔全体はまだ隠れているが、口元が露わとなり、アシュレイは激昂した。

「貴様：！！！」

口元を押さえ、電撃を放つ。

「言われのない不幸を負わされる痛みが、おまえらに分かるか！！！」
攻防を入れ替え、今度は銀時がアシュレイに斬り掛かる。

「不幸な目に遭ってんのが、自分^{てめ}だけだと思っ^ててんじゃねエエツ
！！！」

銀時はアシュレイの剣を砕いた。

その時、エドはアシュレイの手を見た。

「銀さん、危ねえ！！！」

次の瞬間、アシュレイは冷気を放ち、2人を氷の中に閉じ込めた。

「これで終わりだ！！！」

とどめを刺すように、氷に電撃を放った。

「もうやめて！！！」

氷の前にジュリアが飛び出し、同じように電撃を放つ。

「聖地を護ろうとした、両親の気持ち^が分からぬか！！！」

「護ろうとしたのは、聖地じゃないわ！ミロスみんなよ！！」

熔岩の流れが弱まり、閉じ込められていたロイ達は出ることが出来た。

狼キメラは3人の手で、全て倒されていた。

「何…！？」

「ジュリア！」

電撃をぶつけ合うアシュレイとジュリアに、一同は驚く。

「兄さん！銀時さん！」

アルは氷の前に駆け寄った。

熔岩で、肩と足、背中の一部が溶けたが、動くのに支障はなかった。

「アルフォンス、どいてろ」

高杉は炎を放ち、氷を溶かす。

エドと銀時はずぶ濡れで出てきた。

「冷て〜…」

「！やべえ、このままだと、2人共死んじゃまう！！」

星の力を使い合う2人を見て、エドは言った。

「そんな…！！」

「何とかならないんですか!?!」

神楽と新八は不安そうに言うが、ここからでは止める方法が無い。

「強すぎる…!?!」

ジュリアは止めようとするが、アシュレイの力が圧倒しており、止められない。

(そうだ…!)

電撃を放ちながら、左耳のイヤリングを取った。

イヤリングを前に翳し、電撃を集めた。

「…!それは…!?!」

アシュレイは目を見開いた。

「お願い…!お願い!?!」

イヤリングによって強くなった電撃は、アシュレイの電撃を打ち消し、向かって行った。

「ジュリア…!?!」

電撃を受け、アシュレイの身体が焼ける。

「あっ…!?!」

イヤリングは砕け散り、足元に落ちた。

同時に、アシュレイの方から、何かが飛び、近くに落ちる。

「…!?!」

落ちたのはペンダントで、よく見ると、ジュリアが付けていたイヤリングと同じ物だった。

「これは…!」

幼い頃、作ってくれたアシュレイとお揃いにしたくて渡した、もう一つのイヤリング。

(あの時はしてくれなかったけど、ずっと持っていてくれたの……?)

機械の上に立ち、炎に包まれるアシュレイを見上げた。

「兄さん…」

ジュリアの目から、大粒の涙が溢れた。

「兄さん…!」

第23話 ぶつかる意志（後書き）

真理

「この映画リメイクも、あと数話で完結。あたしはどうなるんだろ」

エド

「知らねーよ。マジで」

第24話 想いと共に（前書き）

第23話より

指パッチンをして氷を溶かす高杉。

エド、銀時

「あぢーっ!!」

2人は見事に焼け焦げている。

銀時

「てめエ、殺す気が!!」

高杉

「安心しろ。レアだ」

エド

「焼き加減とか聞いてねーし!!」

第24話 想いと共に

同じ頃、黒コウモリ達とは別行動を取っていたボタンン達は、クレタの監視塔の地下に穴を掘っていた。

「爆破する！全員下がれ！！」

ボタンンは全員を下がらせ、天井を爆破する。監視塔の床に穴が開き、武器を持って突入した。

「武器庫を押さえる！ミロスを救え！！」

監視塔の周囲から、あちこちで爆発が起こる。

「何事だ！？」

グラーツが、軍人の1人に訊いた。

「暴動です！ミロスの連中が押し寄せて来ました！！」

「何！？ハーシエル中佐は！？」

「分かりません！」

「くっ…！祖国復興は先送りか。全員、退避だ！！」

グラーツは軍人達に指示を出した。

谷では、弱まったとはいえ、熔岩が流れ続けている。

「おい、熔岩がまだ出てんぞ！」

銀時はプラントを見上げ、指差した。

「上まで力が届かないの…!!！」

刹那が言い、地上とプラントを見比べる。

「確かに、届きそうにねエな…」

「いや、まだ方法はある。…ジュリア！」

エドは何かを考え、ジュリアに声を掛けた。

「下が駄目なら、反対側から腕を伸ばす！」

「え!？」

反対側：それは、テーブルシティのあるアメストリスからだ。

「なっ！」

振り返り、エドはロイに訊く。

「仕方なかるう」

本来なら、そのようなことは出来ないが、熔岩を止めるには、それ

しかなかった。

「よし、決まりだ！銀さん達は、下から支えてくれ！！」

「分かった」

エドやジュリアはアメストリス側から、銀時達はせり上がった岩を使って錬成を始めた。

「行けーっ！！」

アメストリス側の崖から、腕の形をした岩が突き出て、先に錬成された岩から更に岩が伸び、腕を支えた。

ズン…ッ！！

プラントの穴は塞がり、流れ出た熔岩は固まっていく。

「熔岩が止まったぞ！」

「助かったのか！？」

避難していたミロス人達は、プラントの穴を塞いだ岩を見上げ、口々に言った。

「止まった……」

プラントを見上げ、エド達はひとまず安堵する。

「あ…！」

ジュリアは、機械の上に立っていたアシュレイが、崩れ落ちるのを見た。

「危ない！」

両手を落下地点に向け、雪状の氷を錬成する。

アシュレイはその上に落ち、身体に残っていた炎と熱で、雪は殆ど蒸発した。

「兄さん！」

呼びかけるが、アシュレイは微動だにしない。

「おい、あいつもう…」

アシュレイの焼け焦げた全身を見て、銀時は思わず呟く。特に左腕は、使い物にならない程、酷く焼けていた。

「兄さん…、死なせないから…！！！」

涙を滲ませ、ジュリアはアシュレイに駆け寄ると、両手を身体の上に翳した。

「まさか…！」

ロイは声を上げる。

何をする気なのか、他の者達も分かり、ジュリアのそばに行く。

「ジュリア、やめる!!」

エドとアルは、ジュリアの身体を押さえた。

「離して! 兄さんを…、兄さんを…!!」

「駄目だ! 人体錬成になっってしまう!!」

「それでもいい! 早く兄さんを!!」

ジュリアを押さえている間に、刹那は両手を合わせ、アシユレイに手を翳す。

「刹那…!!」

白い光が輝き始めた時だった。

「うわああああっ!!」

ジュリアの絶叫と共に、辺りに緑色の光が輝き、刹那の力がかき消される。

「力が…!? きゃあっ…!!」

「兄さん!!」

再びジュリアが叫ぶと、光は更に強くなり、近くにいたエドとアル、刹那は軽く吹き飛ばされた。

「うわっ!!」

「エド！アル！」

「大丈夫か？刹那！」

銀時と桂は、それぞれ声を掛ける。

「ジュリアの足が光ってるネ！」

露わになっている左足が白く光り、消えていく。

「分解されていく……」

左の膝から下が消えていくのを、エドは呆然と呟いた。

「死なないで、兄さん……！！」

強く閉じた目から、涙が流れた。

その時、ジュリアの脳裏に真理の扉が見えた。

「……………！！」

ドクン、と心臓が高鳴り、ジュリアは目を見開いた。

その直後に光が消える。

「ジュリア……？」

アルが声を掛けて支えようと、力尽きたように、ジュリアはうなだれた。

「うっ……」

横たわっていたアシュレイが息を吹き返し、同時に顔面が輝き、皮を剥がされる以前の状態に戻った。

「顔が…！」

「元に戻ったのか……」

驚く新八に、銀時が横から言った。

「がはっ……」

アシュレイは咳き込み、血と鮮血の星を吐き出した。吐き出されてすぐに、星は消滅する。

「うっほっ……」

うなだれたジュリアも血と一緒に吐き出し、同じように星は消滅した。

「吐き出したか……」

血溜まりを見下ろし、高杉が呟く。

「傷口を塞がなきゃ」

アルはジュリアを寝かせる。

左膝から下は無く、大量の出血をしていた。

「すぐに治すからね」

しゃがみ込み、刹那は傷口に両手を翳し、治癒錬成を始める。

「ジュリア、目を開けて！」

「しっかりして下さい！」

「早く起きるネー!!」

アルと新八、神楽は呼びかけるが、ジュリアは目を閉じたまま動かない。

「自分で言ってたじゃないか。『ミロス人は、自分達の足で崖を這い上がらなきゃいけない』って…!!」

鎮魂の間で言っていたことを言うが、ジュリアは目を覚まさない。

「ジュリア……」

「アル。傷が治った」

エドが言つと、刹那は立ち上がった。

「失くなった足は戻せないけど、これで大丈夫な筈だよ」

「エド、みんな！」

声のした方を見ると、ウィンリィが立っていた。

「ウィンリイ！」

「大丈夫？みんな無事！？」

「ああ。腕、ありがとな。ゴンじいにも、礼言っとかないと」

軽く右腕を上げてみせると、ウィンリイの背後に、避難したミロス人達がいた。

「あとのことは、あの者達に任せた方がいいな」

桂がミロス人達を見ていると、頭上から歓声が上がる。場所は、クレタの監視塔からだ。

「なんだ？」

「！もう夜明けか…！」

崖を見上げ、銀時は空が明るくなっていることに気付く。

「ここに、ミロスの建国を宣言する…！」

バタネンが監視塔の屋上から宣言し、トニヤペドロはミロスの国旗を掲げている。

「今日この日こそが、我々の新たな誕生の日だ…！」

その宣言に、ミロス人達は歓喜の声を上げた。

夜明けの太陽に照らされたテーブルシテイは、神々しく輝いていた。

第24話 想いと共に（後書き）

ウィンリィ

「あっ、エド！その機械鎧、ちょっと変形してるじゃない！！」

エド

（バレた……！！）

第25話 護りたいもの(前書き)

真理

「もうすぐ終わるなあ」

エド

「映画リメイクなのに、よく20何話も続いたな」

第25話 護りたいもの

「ん……」

クレタの監視塔にある部屋で、アシュレイは目を覚ます。マスクをしていない顔に触れると、顔が元に戻っていることが分かった。

「……！」

右側のベッドを見ると、ジュリアが寝かされていた。

「くっ……」

痛みが走ったが、アシュレイは起き上がり、ジュリアのそばに行った。

「ジュリア……」

ジュリアの髪に触れていると、チェストの上にペンダントと、砕けたイヤリングが置いてあることに気付いた。

それからしばらく経ち、ジュリアは目を覚ます。星を吐き出した為、瞳の色が戻っている。

「……」

起き上がり、隣のベッドを見る。
布団がめくれ、誰もいなかった。

「はっ……」

足に違和感を感じ、触れてみる。
左足が、膝から下が失くなっていた。

「あ……」

息をつき、チェストの上に目をやると、台座に載ったイヤリングが、
一つだけあった。

「気が付いたか」

ドアが開き、バタネンが入って来る。

「バタネン」

バタネンは、ベッドの近くにある椅子に座る。

「クレタ軍は撤退して行った。だが、すぐに戻って来るだろう」

少し間を開けてから、ぼつりと言った。

「ミランダのことは聞いた。残念だったな……」

ジュリアは俯き、布団を握り締める。

「よく持ちこたえてくれた。おまえ達がいなければ、成功しなかつ

ただらう」

労いの言葉を掛けるが、ジュリアは顔を上げようとしない。

「……アシュレイは行ってしまったよ」

「え……」

思わず顔を上げる。

やはり、隣のベッドにいたのはアシュレイだったのか、と思った。

「どこに行くかは、言っていなかったが……」

「そう……ですか」

ジュリアはイヤリングを見つめた。

「その耳飾りは、鎧の彼が託していた」

「！アルが……？」

「ああ。ジュリアの大切な物だと言っていた」

ボタンンは台座を見て、少し首を傾げた。

「おかしいな。もう一つあった筈なんだが……」

「ううん。これだけよ」

ジュリアは笑いかけ、イヤリングを取った。

「私の分は、これ一つでいいの」

左耳に付け、イヤリングに触れた。

「ボタンン、やらなきゃならないことが、沢山あるわ」

「そうだな」

「大変なのは、ここからよ」

松葉杖を付き、ジュリアは立ち上がる。

「よいしょ…」

コンコン

ドアをノックする音が聞こえ、見ると、何かを持ったゴンザレスが入って来た。

「しっかし、凄えもん作っちゃったな」

エド達は、熔岩を止めた岩の腕に立っていた。

「咄嗟で緊急事態だったんだから、しょうがないよ」

アルが横から言う。

溶けてしまっていた鎧は、エドが直し、全員の服装も錬成で直っている。

「谷が無事で良かったね」

刹那は谷を見下ろして呟いた。

「兄さん、あのさ……」

「元の世界と、ほぼ同じことやっちゃまったな……」

「え!?!」

アルや銀時達は驚く。

エドは頭を掻きながら、谷と街を見る。

「最初はぼんやりしてて、デジャビュかと思ってたけど、はっきりした。この世界でのことを、オレは元の世界でも経験してる」

「…やっぱり、兄さんもなんだ」

「やっぱりって、アルフォンスも覚えがあるアルか?」

神楽が訊くと、アルは頷き、谷を眺めた。

「この後は確か……」

「ん? 誰か来るぞ」

アルが呟くと、桂がクレタの方から、人影を見つける。

「あれ、ジュリアさんですよ!」

こちらに歩いて来るのは、ジュリアだった。
ジュリアは民族衣装を羽織り、左足に義足をし、松葉杖を付いてい
たが、元気そうだ。

「駄目だよ。そんな足で、いきなり歩き回って」

近くに来たジュリアに、アルは軽く咎める。

「ちゃんとお礼が言いたかったの」

ジュリアは全員の顔を、順番に見た。

「あなた達のお陰で、谷を護ることが出来ました。本当にありがと
う」

「僕達は、何も出来ませんでしたけど…」

「そうアルナ。この中で一番役立たずだったのは、新八ネ。これだ
からダメガネは」

謙虚に言う新八に、神楽は容赦なく言った。

「ダメガネ言うなアアツ!!」

「…ジュリア。オレはあんたがやったこと、絶対に認めないからな」
ジュリアを見据え、エドはきつめに言った。

「兄さん…!!」

言い過ぎ、と言うようにアルが止める。
その様子に、ジュリアは笑った。

「また、怒られちゃったわね」

「『また』?」

「うん。私もね、別の世界から来てたの。ついさっき思い出したけど」

「ええーっ!?!?」

「ジュリアちゃんも来てたの…!?!?」

突然の発言に、全員驚いた。

「じゃあ、エドとアルにも逢ってたのか!?!?」

銀時が訊くと、ジュリアは頷いた。

「思い出したのがついさっきだったから、状況は元の世界と、あんまり変わらなかったけどね」

「それでもジュリア。なんつーかさ…、あんた凄えよ」

「え?」

口ごもりながらエドは言い、ジュリアは不思議そうな顔をする。

「あんなこと、そろそろに出来ねえ。それを二度もするとはね」

「……ありがとう」

「礼なんていらねーよ」

エドは振り返り、アルを叩いた。

「うわっ」

「オレ達は先行ってっから、あとは頼むぞ」

「え！？ちよっと兄さん！」

いきなり振られ、驚いている間に、エド達はちよつとみちを行ってしまっ。

「行っちゃった……」

「いいお兄さんだね」

「え？」

「ううん、いい兄弟だね。やっぱり」

言い直し、ジュリアは谷を見る。

方向を変えた時、足の痛みに顔をしかめた。

「あ、大丈夫!？」

「うん」

「ジュリア、何か…雰囲気変わったね」

「ああ、義足^{これ}?まだ、慣れなくて……」

義足を一瞥し、軽く動かした。

「そうじゃなくて、綺麗になったな、って思ったんだ」

ジュリアは微笑み、「ありがとう」と呟く。

「アル。私、改めて分かったの」

「え?」

「谷のこと。そして、両親が護ろうとしたもののこと」

元の世界でも、ジュリアは谷を護る為に必要なものは、真理の扉や聖地の錬金術だと思っていた。

「全て背負って、護ることが私の義務だと思ってた。でもそれは、谷や両親の力に縋ってただけだったって」

谷を見る目は、以前とは違う。

護るものが何か、はっきりしていた。

「私はこの足で立って、生きていく。護りたいものは、確かにここにあるから」

「ここでも、ジュリアは手に入れたんだね。大切なものを」

「……そうかもね」

「覚えている？元の世界で、ボクがボク自身を取り戻したら、必ず会いに行くって言ったこと」

「……覚えてるよ」

風に目を細め、ジュリアはアルを見上げる。

「身体を取り戻すことが出来たんだ。だから、元の世界に帰れたら、必ず会いに行くよ」

「……うん！待ってる。早く帰れるといいわね」

「それはジュリアもだろ？」

自然と2人は笑い合い、その後別れた。

一方、アシュレイは1人、谷を背にしていた。

「ジュリア……」

一度振り返って呟くと、仮面と帽子を被り、歩き出した。空洞になった左袖が、風に靡いていた。

第25話 護りたいもの(後書き)

銀時

「なア、俺達…次回には帰れるのか？」

エド

「さ、さあ…？」

真理

「映画だと最後は」

エド

「今言っな！！」

第26話 いつかまた会えたら（前書き）

真理

「遂に完結！！」

エド

「オレ達は、無事に帰れるのか！？」

第26話 いつかまた会えたら

「一個師団でも連れて来れば、と思ったが、こんなに寄越してきたか……」

テーブルシティの駅で、ロイはため息混じりに呟いた。
列車の車両から、続々と軍人が降りて来る。

「上は、クレタ側とテロリストが動くまで、手が出せないと言っています」

リザが隣で言い、2人はセントラル行き列車に乗り込む。

「様子見ということか。しかし」

ロイは、後ろの車両を見る。

そちらには、拘束されたソユーズと部下達がいた。

「テロを防ぐことの出来なかった当方にも、落ち度がある。こちらの問題は、セントラルで解決するしかあるまい」

ロイとリザは、座席に座った。

反対側の座席には、エドやウィンリィ、銀時達が座っている。

「ところで鋼の」

「ん？」

声を掛けられ、エドは首だけを動かしてロイを見る。

「あれは、人体錬成ではなかったのだな？」

「奴は死んでなかった」

「ううん。死んでたよ」

エドの発言を遮り、刹那が言った。

「あいつ、死んでたのか!？」

「確かに、無事には見えなかったな」

エドは驚き、銀時は頷いた。

「ジュリアちゃんの力で、私の力が消えちゃったのは驚いたけど、僅かだけど神の力は働いてたの」

「それで、虫の息みてーな僅かな命の残り火と、自分の身体を代価に、あいつは兄貴を助けたって訳か」

刹那の話聞き、銀時はジュリアがアシュレイを救った経緯を推測する。

「しかし、錬金術で、死者を蘇らせることは不可能だ」

窓の外を見ながら、ロイは呟く。

「如何に優れた術師でも、伝説の代物を用いたとしても、死者を蘇

らせることは出来ない。それこそが、我々に生きる意味を与えるのだろう」

「生きる意味…か」

ロイの言葉に、刹那はぼつりと呟いた。

「考えたことなかったけど、私の力は、安易に使つべきものじゃないってことかな…」

「マスタング殿が言ったのは、錬金術のことだ」

「神の力と錬金術は違う。どう使うかは、おまえが決めればいいだろ」

桂と高杉が言い、刹那は改めて、自分の力についてを考えた。

「あ…」

外を見ていたアルが、何かに気付く。

「もうすぐ、谷が見えなくなる」

「ほんとだ…」

テーブルシティを出て、しばらく列車から見えていた谷は、次第に見えなくなっていく。

「…元の世界に帰れたら、いつかまた来ようぜ」

黙っていたエドは、アルに言った。

「うん」

アルは頷き、見えなくなっていく谷を見つめた。

「次に来た時は、争いの無い国になってるといいね」

「そうだな……」

「帰れるといいけど……」

それぞれが思いを馳せる中、列車は汽笛を鳴らし、セントラルへ向かった。

その直後に、強い光が輝いた。

「……ん？」

エドは辺りを見る。

そこは、セントラルの駅前だった。

「あれ？さつきまで、列車に乗ってたのに……」

身体を見ると、右腕が機械鎧ではなくなり、生身に戻っていた。

「兄さん。ボク達、何時セントラルに来たのかな？」

隣にいるアルが訊いてくる。

勿論、鎧姿ではなく、人間の姿でだ。

「アル！？おまえ戻って…」

よく見ると、銀時達も何時もの姿になっている。

「一体どうなっている？さっきまで我々は、テーブルシティから列車に乗っていた筈だが…！？」

ロイは駅を見て、近くにリザがないことに気付く。

「中尉はどこだ！？」

「ここにはいませんよ」

辺りを見ていた刹那が言った。

「あの人は、私達とは違って、向こうの世界の人でしたから」

「向こうの世界って…、オレ達、帰って来たのか！？」

驚くエド達に、刹那は頷いて答える。

「帰って来たのか…」

全員が安堵したのを見て、刹那は話した。

「谷が見えなくなつてすぐ、元の世界に戻ってこれたみたい」

「おまえが何かしたのか？」

桂が問いに首を振った。

その際に、右耳のイヤリングが揺れた。

「私は何もしてないよ。やったとしたら……」

そう言うと、刹那は空を見上げた。

雲一つ無い青空だった。

「刹那さん……？」

唯一事情を知らないウィンリィは、不思議そうに刹那を見る。

「帰ってこれたのなら、ここにいる訳にはいかな」

ロイは駅の時計を見て、時間を確認する。

「私は司令部へ戻る。やらねばならないことが幾つもあるからな」

そう言うと、ロイは司令部へ戻って行った。

「さてと、これからどうする？」

ロイを見送った後、ウィンリィが訊いた。

「この街とか、エドやアルフォンスの故郷に行きたいネ！」

神楽が言う。

元々、アメストリスに行く予定だった為、あちこちを見たいと思っていた。

「それより、俺達の世界には、ちゃんと帰れるのか？」

元のアメストリスに来れても、次元を越えてきた銀時達は、無事に帰れるかが気になった。

「大丈夫！行く時は、次元と時空が乱れてたけど、もう心配無いよ」

「そっか…」

刹那の話を聞き、銀時はエド達を見る。

「俺達はこのまま帰るわ」

「え！？」

「何言ってるアルか、銀ちゃん！？」

突然の発言に、エドや神楽は驚く。

「あんなゴタゴタの後で、ギャーギャー騒げるか。もうこの世界に来れねーって訳じゃねえんだろ？」

話しながら、刹那の顔を見る。

「来ようと思えば、いつでも来れるよ」

「だってよ。すぐ帰るぞ」

刹那が答えると、銀時は透かさず言っ。

「なんでそんなに帰りたアルか？」

「結野アナの番組が観たいとか、どうせそんな理由なんじゃないんですか？」

「それもあるけど、疲れてんだよ俺は！錬金術使いながらやんちゃしたせいで…！」

ジト目で見る神楽と新八に、銀時は言い返した。

「やんちゃって…」

「エドは疲れてねーのか？」

「まあ、ちよつとは…」

首を軽く動かし、右腕を見る。

「でも、銀時さんが言った通り、一度帰った方がいいかも」

「バニラまでそんなこと言うアルか!？」

「今回は、予想外なことが幾つもあったし、時空間の流れとかを見ておきたいの」

「俺は刹那の意見に賛成だ」

黙っていた桂は、刹那を見た。

「次元を行き来するのは、刹那の力によるものだ。帰った方がいい

のなら、今回は帰ろう」

そう言った後、高杉に目をやる。

「おまえはどうする？」

「…俺は元々、この世界に来るつもりはなかった。帰れるんなら、さっさと帰るぜ」

「じゃあ、決まりだね」

「せっかく来れたのに……」

「また来れるんだから、いいじゃない」

むくれる神楽を、ウィンリイがたしなめた。

「あ、そうだ。刹那さん！」

「ん？」

「前に貰った花の種、ありがとうございました！もうすぐ咲きそうなんです！」

「ほんと？良かった！」

嬉しそうに言うウィンリイに、刹那は笑って言った。

その後、人通りの少ない場所に移り、刹那は力を発動させる。

「じゃあ、またな。けっこう楽しかったぜ」

「ああ、また来いよ」

「待ってるからね!」

緑色の光が輝き、銀時達の姿が見えなくなっていく。

「元気でね!」

「またな!!!」

ウィンリイは手を振り、エドと銀時は同時に叫んだ。

やがて光は消え、銀時達の姿は消えた。

「行っちゃったわね」

「うん……」

「じゃあ、オレ達も帰ろうぜ!」

エドが言い、3人は駅に向かって歩いた。

その場を振り返らずに。

いつかまた会えると、信じ続けて。

完

第26話 いつかまた会えたら（後書き）

エド

「この後で、ハガレンのOVAのパクリがあるぞ」

アル

「良かったら見て下さい！」

裏話と後書き？（前書き）

真理

「全員参加って割に、またあたしはここだけの登場か！…こんなO
VAもどき、別に見なくてもいいからね！…」

裏話と後書き？

「新訳ミロス、終了ーっ！！」

その場に、わっ、と歓声上がる。

「という訳で、打ち上げだ！場所は、シャンバラの時と同じ…」

「凡豆^{ほんまめ}って店だよ！」

エドの台詞を、アルが続けた。

「アル！それオレの台詞！！」

「兄さん、自分で言ったら、なんかキレそうだったからさ」

店の名前に、『豆』のキーワードが入っている為、敢えて先に言っ
た。

「時間は、今日の夕方からだって。出演者は、全員参加だよ」

そして夕方になり、居酒屋風の店・凡豆に、出演者が続々と入って
行く。

出演者と混じって、明らかに登場していない人物もちらほらいる。

「それにしても。あれはないよね」

店の前で、刹那は無表情で高杉に言った。
出演者は全員、本編と同じ服装だ。
『あれ』が何か、すぐに分かった。

「…やっぱ、お姫様抱きがいけなかったか!？」

谷に降りる時、グライダーが足りなかった為、高杉は刹那を抱いて飛んだ。

「……」

「いけなかったのか!？」

無表情の刹那は顔を背け、ニヤリと怪しい笑みを浮かべた。

「おい、いけなかったんなら、いけないって言え!おーい!!!」

「そろそろ始まるから、おまえらも中入れ」

銀時が店から顔を出し、2人の中に入れた。

打ち上げは、開始から数分で、かなりの盛り上がりようになった。

「すみませーん。遅れましたー!!」

鎧姿のアルが、店の中に入って来る。

「アル!」

「アルフォンスは今回、鎧だから何も食べられないんじゃないアルか？」

食べる手を止めて、神楽が訊いた。

「ああ、それなら大丈夫」

鎧の腹部が開き、生身のアルが出てくる。

「ぶはあっ！暑かった」

「ええっ！？アル、中に入ってたのか！？」

「実は、25話から中に入ってたんだ！気づかなかったでしょ？」

突然の発言に、一同は啞然とする。

「では、盛り上がってきたところで」

リザがマイクを取り、立ち上がった。

「特別版ウラハガネ・ぶつちゃけ大会！略して特別ハガちゃけ大会スタート！！」

「うおおおおっ！！」

大歓声上がり、口々に叫んだ。

「何故私の出番が映画よりも少ないのだ！！」

「何で俺が、マスタングと間違われなきゃなんねエんだ!!」

「機械鎧壊さないでよ、エド!!」

「俺が錬金術を使うところが少なすぎるぞ!!」

「『SILVER DANCE』いつになったら再開するんだよ!!」

「今回のお土産なーに?」

「ただの愚痴じゃねえかよ!!」

「しかも最後は、出演者じゃないよね…」

エドとアルは、店の一角にあるゲスト席を見る。

「兄さん、スケット団がいるよ!」

「しかも作者までいる……」

「それだけじゃねーぞ」

酒を飲んでいた作者は、2人を見る。

「今回もクコさんちのフウちゃんと、白黒仮面さんちのカオスクンをゲストに呼んだぞ」

「また呼んだのか」

『最早恒例だな。鋼魂のシリーズだと』

ゲストの2人、というより、1人と1匹を見ながらスイッチが言う。

「恒例もいいけど、こっちも書けよ!」

泣きながらボツスは、作者に迫る。

「寄るな。怖い」

「今回のお土産はー?」

同じテーブルにいるフウが訊く。

「ああ、用意してるからね。お楽しみに」

「やったー!」

「あ、そうそう。僕実は、新訳ミロスに出てたんだ」

カオスは食べながら言い、他の出演者は驚いた。

「は!?!おまえ出てたのか!?!」

「あ、エドちゃん。ボクも出てたよ」

「フウちゃんもか!?!」

予告篇で、出てはいけないと言われていたが、登場していたらしい。

「へえ、こっさり出てたのか…。オレも出れば良かった」

「ボッスン、出てなかったんか？」

『オレとヒメコは出ていたぞ』

「は!？」

「んだよ。おまえらも出てたのか？」

銀時が訊くと、ヒメコとスイッチは頷いた。

「アタシとスイッチは、テーブルシティに向かう列車に乗ってたで」

「ボクはレストランにいたよ！」

「ミロスの人達の中に僕はいたよ。気付いたかな？」

「ちょっと待て!じゃあ何?エキストラで登場してないのってオレだけ!？」

「文章じゃ分かんねーだろ。気にすんなって」

卑屈になっていくボッスンを、銀時は宥めた。

「トリック・オア・トリート!」

店に、緑色の巨大なドラゴンとも蛇ともつく生物が入って来る。

「何だ!？」

「1期のエンヴィーだ!!」

「シャンバラ引っ張ってくんじゃねーよ」

ドラゴンの背中が開き、エンヴィーが出てくる。

「今日はハロウィンだから、1期のスタイルで……」

「今日はハロウィンネ！誰かお菓子出すアル」

「出やがったなエンヴィー！！」

殺気を放ちながら、作者は立ち上がる。

「なんだ？」

『作者は1期のエンヴィーに対し、激しい憎悪を抱いているゾ』

「ぶっ殺す!!」

店の中で、作者はエンヴィーを追い回す。

他のメンバーは、とりあえず無視する。

「銀さん。今回の話、どうだった？」

エドは、フルーツ牛乳を片手に、銀時に話し掛けた。

銀時は苺牛乳を飲んでいる。

「どっつって？」

「色々あるじゃん。戦争の時の格好で錬金術使って新鮮だった、とか…」

「あゝ、特に無エな。錬金術使って戦うのって、刀だけ使って戦うのよりしんどかったって位で」

「ま、そうだな…」

「わあっ！！」

突然アルが、驚きの声を上げた。

「ん？どうした、アルフォンスくん」

「刹那さんが、置いてあったウイスキーボンボンと酒粕入りの最中、殆ど食べちゃって…」

それを聞き、銀時とエド、高杉は血の気が引く。桂は、意味が分からなさそうな顔をする。

「あー美味しーい！！」

顔を赤くしながら、刹那は更に食べようとする。

「刹那ちゃん、食べ過ぎなんじゃ…」

フウは啞然としているが、刹那は全く気にしていない。

「大丈夫。私は酒強いから。今回の話の都合上、フウより若いけど、

酒自体は飲んでないし」

ウイスキーボンボンに手を伸ばし、口に入れた。

「フウは食べない方がいいよ。けっこうアルコールの度数高いから」

「ねえ、僕達のお土産ってどうなってるの？」

カオスが訊くと、刹那は部屋の隅を指差した。

「作者が、お土産用に錬成したって言うってたけど……」

「あれかな？」

紙袋が2つ置いてあり、カオスは1つを開ける。

中には、親指程の大きさの赤い石が幾つも入っていた。

「鮮血の…星？」

「違う。そういう形の飴！1000個位錬成して作ったぞ」

エンヴィーを殴りながら、作者が言う。

カオスは飴を1つ出し、舐めてみる。

「あ、莓味だ！」

「味は色々あるからね」

「おい作者！遊んでねーで、次回作はどうなってんだ!？」

エドはフルーツ牛乳を飲み干し、訊いた。

「次回作？とりあえず、次にやるのは鋼魂じゃないよ」

「え…！？」

一瞬沈黙が流れ、エドは慌てて聞き返した。

「え？何！？鋼魂、今回で終わり！？」

「終わらないよ。ネタは考えてるから。始動は…来年？」

「遅っ！！」

「あー、次はシリアスな銀魂単品の話書くわ。SILVER DA
NCE書きながらやる」

「出来んの！？」

透かさずボツスンが詰め寄る。

「出来るって。多分」

「多分！？」

「じゃあ、そろそろ終わりにするか」

作者は、エドと銀時を見る。

「この小説の主人公のおまえらが締めろ」

突然の指名に2人は驚き、コソコソ話し合う。

「おい、締めるって…どう締めんだ？」

「映画の主題歌を全員で歌うとか？」

「面倒だ。それでいくぞ！」

銀時はコンポを引っ張り、エドは説明をする。

「最後なんで、全員でラルク歌うぞ！！銀さん、いいぞ！」

エドが合図をすると、銀時は曲を流すが、曲が違う。

「あ、間違えた。これLOST HEAVENだ」

「それだとシャンバラじゃねーか！！」

そんなこんなで、『鋼魂 新訳 嘆きの丘の聖なる星』ここに完結！！

裏話と後書き？（後書き）

作者

「と、いう訳で、鋼魂の次回作は、来年頃になります。クコさん、白黒仮面さん、毎度毎度ご協力いただき、ありがとうございます。機会がありましたら、また次回もよろしくお願いします。ここまで読んでくれた読者の方全てに感謝します!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2145v/>

鋼魂 新訳 嘆きの丘の聖なる星

2011年11月12日02時01分発行